

# 平成28年度 NCNP原著論文一覧表

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
1	Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Shinada T, Sakaki K, Sassa Y, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Daniele M, Kawashima R	"Creative females have larger white matter structures: evidence from a large sample study"	Human Brain Mapping 38(1),414 - 430,01,2017	大規模健常若者サンプル(男:女=776:560、年齢20.8 ± 0.8歳)を対象に、創造性の認知指標と局所脳白質体積の神経相関を評価した。女性において、創造性と大脳新皮質の幅広い領域の脳白質体積が正相関していた。一方で、創造性と脳白質統合性との相関は認めなかった。女性特有の脳の構造的結合と創造性の関係性が示された。
2	Takeuchi H, Taki Y, Sekiguchi A, Nouchi R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Hashizume H, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R	"Differences in gray matter structure correlated to nationalism and patriotism"	Scientific Reports 15(6),29912 - .07,2016	常者777人(男:女=433:344、年齢20.7 ± 1.9歳)を対象に、国家主義および愛国心と局所脳灰白質密度の神経相関を評価した。国家主義が強いほど後部帯状皮質、眼窩前頭皮質密度が増大し、扁桃体の密度が低下し、愛国心が強いほどは吻外側前頭部の灰白質密度が低下していることが明らかになった。各脳部位は、同情、優越感、自殺念慮、QOLの指標との関連が認められた。国家主義が社会関連の領域や辺縁系と関連している一方、愛国心は幸福感との関連が示された。
3	Nakagawa S, Sugiura M, Sekiguchi A, Kotozaki Y, Miyauchi CM, Hanawa S, Araki T, Takeuchi H, Sakuma A, Taki Y, Kawashima R	"Effects of post-traumatic growth on the dorsolateral prefrontal cortex after a disaster"	Scientific Reports 27(6),34364 - .09,2016	ストレスイベント後のポジティブな心理的变化として、外傷後成長という概念がある。東日本大震災前後の26名の健常大学生の脳画像データを利用し、外傷後成長の神経相関を評価したところ、震災後に他者との絆が深まった人ほど背外側前頭前野(DLPFC)の体積が増加していることが明らかになった。DLPFCはレジリエンスやストレスコーピングに関わる脳部位であり、外傷後成長の神経基盤の関連も示された。
4	Takeuchi H, Taki Y, Sekiguchi A, Nouchi R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R	"Mean diffusivity of basal ganglia and thalamus specifically associated with motivational states among mood states"	Brain Structure and Function 222(2),1027 - 1037,03,2017	本研究では、右利きの健常若年成人766人を対象に、意欲的状態が拡散テンソルイメージング(DTI)で算出される平均拡散率(MD)との関連、および気分状態と複数の認知機能との関連性を検証した。右淡蒼球、右被殻、右尾状体および右視床のMDと『元氣』の尺度との間に特異的に有意な負相関を認めた。これら結果は、ドーパミン作動系システムは、うつや不安というよりは、意欲的状態に特に寄与していることを示唆している。
5	Nouchi R, Takeuchi H, Taki Y, Sekiguchi A, Kotozaki Y, Nakagawa S, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Sassa Y, Kawashima R	"Neuroanatomical bases of effortful control: evidence from a large sample of young healthy adults using voxel-based morphometry"	Scientific Reports 6(31231),08,2016	健常者680人(男:女=374:306、年齢20.61 ± 1.82歳)の脳MR画像を収集し、実行注意を反映する心理尺度であるエフォートフルコントロールの神経基盤を評価した。エフォートフルコントロールの下位尺度である、抑制制御が強いほど、前/補足運動野の灰白質および背側前帯状皮質の灰白質/白質が大きく、行動制御が強いほど島皮質と被殻の灰白質が小さく、注意制御が強いほど下前頭回、眼窩前頭回、前帯状皮質、島皮質の白質量が大きかった。これら領域が感情・行動制御の神経基盤であることが示された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
6	Sekiguchi A, Sato C, Matsudaira I, Kotozaki Y, Nouchi R, Takeuchi H, Kawai M, Tada H, Ishida T, Taki Y, Ohuchi N, Kawashima R	"Postoperative hormonal therapy prevents recovery of neurological damage after surgery in patients with breast cancer"	Scientific Reports 6(6),34671 – ,10,2016	我々の最近の研究により、乳がん手術直後に手術麻酔量と関連した注意機能の低下と視床体積の減少を報告していた。今回の研究では術後内分泌療法の認知機能および視床体積に与える影響を検証したところ、手術のみで治療を終えた群は術直後の注意力障害及び視床体積の低下が回復していたが、術後に内分泌療法を受けた群では回復していないことが明らかになった。術後内分泌療法は、術直後の神経障害の回復を阻害する因子であることが示唆された。
7	Nouchi R, Taki Y, Takeuchi H, Nozawa T, Sekiguchi A, Kawashima R	"Reading aloud and solving simple arithmetic calculation intervention (Learning therapy) improves inhibition, verbal episodic memory, focus attention, and processing speed in healthy elderly people: Evidence from a randomized controlled trial"	Frontiers in Human Neuroscience 10,217 – ,05,2016	学習療法(音読と単純計算)の効果として、高齢者における実行機能、処理速度の向上が知られているが、より広範な認知機能に対する効果は不明であった64名の高齢者対し無作為対照化試験を実施し、6か月間の学習療法の効果を検証したところ、抑制機能、言語的なエピソード記憶、注意機能、処理速度の向上が認められた。これらは、音読と単純計算で必要とされる認知処理であり、認知負荷による広範な認知機能の改善が実証された。
8	Nakagawa S, Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Sekiguchi A, Kotozaki Y, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R	"Sex-related differences in the effects of sleep habits on verbal and visuospatial working memory"	Frontiers in Psychology 7 (1128),07,2016	健常者779人(男:女=434:345、年齢20.7 ± 1.8歳)を対象に、睡眠習慣と作業記憶の関連性を調査した結果、視空間作業記憶能力が、昼寝の時間および夢を思い出す頻度と正相関し、言語性作業記憶能力が、睡眠時間と正相関を示した。更に、作業記憶能力が男性では昼寝時間、女性では睡眠時間と正相関していた。睡眠習慣が認知機能に与える影響および、その男女差が存在することが示唆された。
9	Nakagawa S, Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Sekiguchi A, Kotozaki Y, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Hashizume H, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R	"The anterior midcingulate cortex as a neural node underlying hostility in young adults"	Brain Structure and Function 222(	健常者777人(男:女=433:344、年齢20.7 ± 1.8歳)を対象に、怒りと敵意の心理指標と局所脳灰白質密度の神経相関を評価した。敵意の心理指標と、前中部帯状皮質および背内側/外側全当然皮質から外側前運動野にわたる広範な前頭野の局所灰白質密度が正の相関を示し、怒りの指標との脳部位の重複は認めなかった。敵意の神経基盤は、怒りのそれとは異なることが示された。
10	Hori H, Koga N, Hidese S, Nagashima A, Kim Y, Higuchi T, Kunugi H	24-h activity rhythm and sleep in depressed outpatients.	J Psychiatr Res 77,27 – 34,06,2016	睡眠の障害や活動性の低下はうつ病の中核的特徴と考えられているが、うつ病患者において概日活動リズムを客観的に定量化した研究は乏しい。本研究では、20名のうつ病患者、年齢・性別をマッチさせた20名の健常対照者を対象に、腕時計型のアクチグラフィを用いて活動量を7日間連続で測定し、概日活動リズムと睡眠について解析した。健常者に比べ、うつ病患者では活動リズムの平坦化や活動量の低下、睡眠の断片化が有意に認められた。ロジスティック回帰分析により、活動リズム障害や断眠がうつ病を有意に予測するという結果が得られた。これらの結果から、アクチグラフィで測定した睡眠-活動リズムは、うつ病の客観的補助診断指標として臨床場面で使用されうる可能性が示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
11	Higuchi Y, Inagaki M, Koyama T, Kitamura Y, Sendo T, Fujimori M, Uchitomi Y, Yamada N.	A cross-sectional study of psychological distress, burnout, and the associated risk factors in hospital pharmacists in Japan.	BMC Public Health 16,534 – 534,07,2016	現代の病院薬剤師の診療では、患者との対面コミュニケーションの機会が増えており、病院薬剤師に新たな負担を課している可能性がある。そこで本研究では、病院の薬剤師823名を対象に、心理的苦痛(GHQ-12)、燃え尽き(BO)および共感疲労(CF/STS)の実態と、関連要因(性別、勤続年数、病院の大きさ、対人勤務時間、コミュニケーションに関連する性格特性(AQ、ASRS))を検討するために横断研究を行った。その結果、380人(46.2%)の薬剤師から回答を得た。GHQ-12、BO、CF/STSのカットオフポイント以上を示した参加者は、54.7%、49.2%、29.2%であった。GHQ-12は長年の経験(p<0.001)と負の関連を、AQ(p<0.001)およびASRS(p<0.001)は性の関連を示した。BOはAQ(p<0.001)およびASRS(p=0.001)と負の関連を示し、CF/STS(p=0.023)は長年の経験と負の関連、AQ(p<0.001)およびASRS(p<0.001)と正の関連を示した。以上の結果より、病院薬剤師は心理的苦痛、仕事関連の燃え尽きの高い罹患率を示した。さらに、コミュニケーションスタイルに関連する自閉症様傾向およびADHD様傾向の共通の性格特性は、心理的苦痛および燃え尽きのリスクを増加させる可能性があることが示唆されたことから、燃え尽きに対して早期のリスクアセスメントとこれらの特性に特化した予防的介入が求められる。
12	Ikeda M, Takahashi A, Kamatani Y, Okahisa Y, Kunugi H, Mori N, Sasaki T, Ohmori T, Okamoto Y, Kawasaki H, Shimodera S, Kato T, Yoneda H, Yoshimura R, Iyo M, Matsuda K, Akiyama M, Ashikawa K, Kashiwase K, Tokunaga K, Kondo K, Saito T, Shimasaki A, Kawase K, Kitajima T, Matsuo K, Itokawa M, Someya T, Inada T, Hashimoto R, Inoue T, Akiyama K, Tanii H, Arai H, Kanba S, Ozaki N, Kusumi I, Yoshikawa T, Kubo M, Iwata N	A genome-wide association study identifies two novel susceptibility loci and trans population polygenicity associated with bipolar disorder.	Molecular psychiatry 01,2017	
13	Matsuo J, Ota M, Hori H, Hidese S, Teraishi T, Ishida I, Hiraishi M, Kunugi H	A large single ethnicity study of prepulse inhibition in schizophrenia: Separate analysis by sex focusing on effect of symptoms.	J Psychiatr Res. 82,155 – 162,11,2016	感覚運動ゲイティング機構の検査であるプレパルス・インヒビション(PPI)は、統合失調症患者で低下が見られることが示されており、動物モデルでも認められることから、統合失調症のエンドフェノタイプと考えられている。本研究では、181名の統合失調症患者および250名の健常対照者においてPPIを測定し、患者においては症状との関連も検討した。男女別の解析により、統合失調症では男性患者、女性患者ともPPIが有意に障害されており、男性患者では思考障害がPPI減弱に関連することが示された。
14	Yamanishi E, Hasegawa K, Murata M, Tomono J, Oshima S, Kurabayashi M.	A Novel form of necrosis, TRIAD, occurs in human Huntington's disease.	Acta Neuropathol Commun. 5 (1),19 – ,03,2017	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
15	Tsunoda K, Yamashita T, Motokura E, Takahashi Y, Sato K, Takemoto M, Hishikawa N, Ohta Y, Nishikawa A, Nishino I, Abe K	A patient with slowly progressive adult-onset nemaline myopathy and novel compound heterozygous mutations in the nebulin gene	JOURNAL OF THE NEUROLOGICAL SCIENCES 373 (2017),254 – 257,02,2017	ネマリンミオパチーは小児期に徐々に発症する希少な先天性ミオパチーで、TPM3、NEB、ACTA1、TPM2、TNNT1、CFL2などの遺伝子変異により引き起こされる。これらの遺伝子は細フィラメントの構成タンパク質であるが、ネブリン遺伝子変異がネマリンミオパチーの原因として約半数を占める。ネマリンミオパチーは1963年に初めて報告され、筋線維に見られるネマリン小体という糸状の構造物が特徴である。臨床的特徴としては、筋力低下、呼吸不全、先天性形質異常(細長い顔貌、テント状上口唇、高口蓋、下顎後退など)を呈し、生後早期に死亡する例もある。小児期発症型と同様に成人発症型ネマリンミオパチーは発症から2年以内に呼吸器不全となり、歩行困難になるのが通例である。ここでは、ネブリン遺伝子の新規遺伝子変異を持つ成人発症型ネマリンミオパチー患者を報告するが、このケースは症状の進行が非常に穏やかであり、発症から19年経過後も階段を上ることが可能である。
16	Satoh-Asahara N, Ito H, Akashi T, Yamakage H, Kotani K, Nagata D, Nakagome K, Noda M.	A Patient-Held Medical Record Integrating Depression Care into Diabetes Care.	Jpn Clin Med, 7,19 – 22,07,2016	インターネットを用いて、現存する糖尿病患者の患者手帳の構成要素を調査し、糖尿病とうつ病のケアがいかに統合的に行われているかを検証した。8種類の患者手帳が明らかとなった。いずれの患者手帳においてもうつ病のモニタリングや治療に関する記載は含まれていなかった。今後、糖尿病と併存率の高いうつ病のケアを含む新たな患者手帳の作成が重要と考えられた。
17	Fujii Y, Aida N, Niwa T, Enokizono M, Nozawa K, Inoue T	A small pons as a characteristic finding in Down syndrome: A quantitative MRI study	Brain Dev 11,2016	Down症候群児の脳幹は後頭蓋窩との比において、橋が健常児より有意に小さく、中脳や延髄では有意差はなかったことを明らかにした。
18	Nagaoka A, Takehara H, Hayashi-Takagi A, Noguchi J, Ishii K, Shirai F, Yagishita S, Akagi T, Ichiki T, Kasai H	Abnormal intrinsic dynamics of dendritic spines in a fragile X syndrome mouse model in vivo	Scientific Reports 6,26651 – .05,2016	
19	Stickley A, Koyanagi A, Takahashi H, Kamio Y	ADHD symptoms and pain among adults in England	Psychiatry Research 2016 246,326 – 331,10,2016	発達障害および精神障害の成人は一般健康リスクが高い可能性が示唆されている。ADHD症状を多く持つ人は痛みを経験するリスクが高いかどうかを英国の成人精神医学並存調査データベースに登録されている7403人のデータを用いて調べた。その結果、自己回答尺度ASRSでADHDに相当すると考えられる14点以上有する人は無症状の人の3.15倍、痛みを経験するオッズ比が高く、併存する一般的な精神障害を調整するとオッズ比は1.64倍となった。医学的に説明できない痛み症状を訴えるADHD患者については併存精神障害を疑い、精査する必要性があることを示唆する結果となった。
20	Mukai M, Nagata E, Mizuma A, Yamano M, Sugaya K, Nishino I, Goto YI, Takizawa S	Adult-onset Mitochondrial Myopathy, Encephalopathy, Lactic Acidosis, and Stroke (MELAS)-like Encephalopathy Diagnosed Based on the Complete Sequencing of Mitochondrial DNA Extracted from Biopsied Muscle without any Myopathic Changes	INTERNAL MEDICINE 56(1),95 – 99,01,2017	ミトコンドリア脳筋症・乳酸アシドーシス・脳卒中様発作症候群は、臨床症状が一定していないことが特徴である。33歳男性で家族歴がなく、脳卒中発作を繰り返していた。この患者の生検筋から抽出したDNAに対して、ミトコンドリアゲノム解析を行ったところComplexIのサブユニットをコーディングするMTND3上のm.10158T>C変異を検出した。高次機能障害の進行を妨ぐには、迅速な診断と適切な治療介入が必要である。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
21	Sone Daichi, Kaido Takanobu, Watanabe Masako, Murata Yoshiko, Taniguchi Go, Otsuki Taisuke	Adult-onset refractory epilepsy with hypothalamic hamartoma and no gelastic seizures successfully treated by stereotactic thermocoagulation: A case report.	Seizure 37,32 - 4,04,2016	
22	Okamoto Y, Kosaka H, Kitada R, Seki A, Tanabe HC, Hayashi MJ, Kochiyama T, Saito DN, Yanaka HT, Munesue T, Ishitobi M, Omori M, Wada Y, Okazawa H, Koeda T, Sadato N.	Age-dependent atypicalities in body- and face-sensitive activation of the EBA and FFA in individuals with ASD.	Neurosci Res 14(42),70 - 76,02,2017	自閉スペクトラム症(ASD)は、子どもでより顕著に身体や顔を認識することに困難がある。これらが線条体外身体領域(EBA)および紡錘状回顔領域(FFA)の機能不全に起因する場合、これらの領域の活性化は、成人よりも小児において非定型的であり得る。ASDおよび定型発達の小児と成人に、顔、身体、車および場面を見せて、機能的核磁気共鳴断層画像法を施行した。ASDの成人は、EBAおよびFFAの活性化において非定型性を示さなかったが、ASDの小児はこれらの領域において非定型の活性化を示した。特にASDの小児では定型発達の小児よりも、FFAの顔敏感活性化が低く、EBAの大きさも小さかった。(268文字)
23	Suzuki, Y. Korlach, J. Turner, S. W. Tsukahara, T. Taniguchi, J. Qu, W. Ichikawa, K. Yoshimura, J. Yurino, H. Takahashi, Y. Mitsui, J. Ishiura, H. Tsuji, S. Takeda, H. Morishita, S.	AgIn: Measuring the Landscape of CpG Methylation of Individual Repetitive Elements	Bioinformatics 32(19),2911 - 2919,10,2016	一分子シーケンシングの手法を用いて、遺伝子のDNAメチル化のランドスケープを明らかにするアルゴリズムAgInを開発した。
24	Kishikawa Sari, Sato Shintaro, Kaneto Satoshi, Uchino Shigeo, Kohsaka Shinichi, Nakamura Seiji, Kiyono Hiroshi	Allograft inflammatory factor 1 is a regulator of transcytosis in M cells.	Nature communications 8,14509 - 14509,02,2017	
25	Araia S, Okamoto Y, Fujioka T, Inohara K, Ishitobi M, Matsumura Y, Junga M, Kawamura K, Takiguchi S, Tomoda A, Wada Y	Altered frontal pole development affects self-generated spatial working memory in ADHD	Brain and Development. 38(5),471 - 480,05,2016	近赤外線分光鏡を用い、空間作業記憶課題遂行中のADHD児30名と定型発達児35名の前頭前野皮質の血行動態を測定し、各群における年齢と誤答数との相関、年齢と前頭前野皮質の血行動態の活動性の相関を調べた。両群で年齢と誤答数との間で負の相関を認め、発達を通しての空間作業記憶能力の向上が示唆された。また、定型群において前頭極の酸素化ヘモグロビン量と年齢との間に正の相関を認めたがADHD群では認められず、情報の記憶と処理に関わる前頭極の機能的成熟の異常がADHD児に存在する可能性が示された。(249文字)

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
26	Tomita T, Yasui-Furukori N, Kaneda A, Ishioka M, Sugawara N, Nakagami T, Nakamura K.	An attempt to construct a 7-item short version of the temperament and character inventory to predict the treatment response of patients with depression; a validation study.	BMC Psychiatry 16,290 – 290,08,2016	気質性格検査(TCI)は性格特性を評価する心理検査であり、大うつ病性障害(MDD)の治療反応性に関する研究が多数報告されている。本研究では、先行研究で抽出された10項目版TCIのカットオフ値を検討した。パロキセチンで6週間加療された73人の患者を対象とし、受信者操作特性(ROC曲線)を用いて検討を行った。治療反応の予測性が高い上位7項目を使用したモデルにおいて、3/4をカットオフ値とした際、ROC曲線下の面積(AUC)は0.825、オッズ比19.3、尤度比8.86と、最も高い予測性を示した。TCIの項目174、137、70、237、106、191、34からなるモデルでカットオフ値3/4とすることで、MDDの治療反応性を予測できるかもしれない。
27	Furuta M, Sumi-Akamaru H, Takahashi MP, Hayashi YK, Nishino I	An elderly-onset limb girdle muscular dystrophy type 1B (LGMD1B) with pseudo-hypertrophy of paraspinal muscles	NEUROMUSCULAR DISORDERS 26(9),593 – 597,09,2016	A型ラミンをコードするLMNA遺伝子の変異は、ラミノパチーと呼ばれる多様な障害を起こす。今回、LMNA遺伝子にヘテロ接合のp.Arg377His変異を持つ、65歳から骨格筋症状が出現した肢帯型筋ジストロフィー1B型(LGMD1B)患者を報告する。脊柱起立筋から筋力低下が始まり、72歳時には著明な脊柱起立筋の偽性肥大を認めた。44歳から失神を認めたが、60歳まで心筋の伝導路異常は認めなかった。p.Arg377His変異は、家族性のLMNA遺伝子関連ミオパチーにおいて脊椎周囲の筋の仮性肥大を起こすことがこれまでに報告されているが、それらのほとんどは60歳までに筋力低下を示している。脊椎周囲の筋の仮性肥大がある点、筋力低下の発症が高齢であるという点で本症例は他にみられない。
28	Masahiko Gosho, Kazushi Maruo, Ryota Ishii, Akihiro Hirakawa	Analysis of an incomplete longitudinal composite variable using a marginalized random effects model and multiple imputation	Statistical Methods in Medical Research 11,2016	臨床研究において、多項目(例えば、質問項目)の和として計算される総スコアがアウトカムとして測定されることがある。ただし、1個以上の項目に欠測が存在した場合、単純に和を計算することができず、当該時点・被験者における総スコアを欠測化して解析手法を適用することが多い。しかしながら、このようなアプローチは効率の低下やバイアスを招く恐れがある。我々は、線形混合モデルと多重補完法に基づく項目欠測データに対する手法を開発した。さらに、シミュレーション研究に基づき、我々の提案法が従来法と比較して確度と精度の高いことを示した。
29	Kita Y, Suzuki K, Hirata S, Sakihara K, Inagaki M, Nakai A	Applicability of the Movement Assessment Battery for Children—Second edition to Japanese children: A study of the age band 2	Brain and Development 38(8),706 – 713,09,2016	本研究は、発達障害の一つである発達性協調運動障害(DCD)の診断法の確立に向け、運動機能の国際的尺度(MABC-2)の日本適応化を検討した。100名以上の小児にMABC-2を実施し、尺度の信頼性・妥当性を示す一方で、日本人小児が基準国の小児に比して器用であることを明らかにした。本知見は、本邦で初めてMABC-2の有用性を示すとともに、整備の遅れているDCDの診断法確立のための貴重な知見となった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
30	Stickley A, Tachibana Y, Hashimoto K, Haraguchi H, Miyake A, Morokuma S, Nitta H, Oda M, Ohya Y, Senju A, Takahashi H, Yamagata T, Kamio Y	Assessment of autistic symptoms in children aged 2 to 4? years with the preschool version of the Social Responsiveness Scale (SRS-P): findings from Japan.	Autism Research. Version of Record online 03,2017	2歳前後の自閉症スクリーニングは多数開発されているが、3-4歳幼児の自閉症症状の分布やスクリーニング尺度は乏しい。本研究は幼児版SRSの日本版を用いて一般母集団での分布、そして信頼性と妥当性を調べ、臨床場面でのスクリーニング能を調べた。これらより、幼児版SRSは、ASDのみならず、高ASD症状を有する幼児に鋭敏であることが示された。本尺度は、臨床場面のみならず、自閉症研究においてASDエンドフェノタイプをとらえるのに有用と考えられる。
31	Kada Akiko, Yonemoto Naohiro, Yokoyama Hiroyuki, Nonogi Hiroshi, Hanada Hironori, Hase Mamoru, Sakamoto Tetsuya, Kasaoka Syunji, Kikuti Migaku, Nagao Ken, Sase Kazuhiro, Kimura Kazuo, Sumiyoshi Tetsuya, Fujimoto Kazuteru, Hisao Ogawa, Shirai Shinichi, Kanemitsu Miho, Hayashi Kumiko,	Association between accessibility to emergency cardiovascular centers and cardiovascular mortality in Japan.	International journal for quality in health care : journal of the International Society for Quality in Health Care 28(3),281 - 7,06,2016	
32	Yoshikawa E, Nishi D, Matsuoka Y.	Association between frequency of fried food consumption and resilience to depression in Japanese company workers: A cross-sectional study.	Lipids in Health and Disease 15 (1),156 - 156,09,2016	労働者における食事からの揚げ物の摂取頻度とレジリエンス及びうつ症状の関連を明らかにすることを目的として、ある企業の従業員715人を対象に研究を行った。研究の結果、揚げ物の摂取頻度はレジリエンスと逆相関しており、レジリエンスを介したうつ症状への間接的な正の関連が認められた。揚げ物の摂取頻度が高いことは、レジリエンスの低下を通してうつ症状を増悪させている可能性があることが示唆された。
33	Uemura M, Ohira T, Yasumura S, Otsuru A, Maeda M, Harigane M, Horikoshi N, Suzuki Y, Yabe H, Takahashi H, Nagai M, Nakano H, Zhang W, Hirotsaki M, Abe M, for the Fukushima Health Management Survey Group	Association between psychological distress and dietary intake among evacuees after the Great East Japan Earthquake in a cross-sectional study: the Fukushima Health Management Survey.	BMJ Open 6(7),e011534 - ,08,2016	東日本大震災後の福島第一原子力発電所事故により避難した地域住民の、心理的不調、トラウマ反応と食物摂取の関係について検討した。2012年の福島県健康調査の横断データを用いて解析した結果、14.7%が心理的不調(K6で13点以上)、21.2%が高トラウマ反応(PCL-Sで44点以上)を示し、食物摂取頻度調査票(food-frequency questionnaire: FFQ)で食物摂取との関連を、人口動態的変数、ライフスタイル関連変数を調整して検討したところ、心理的不調は、米、パン、魚、肉、野菜や果物、大豆製品、乳製品の低摂取、トラウマ反応とは、米、パン、魚、肉、乳製品の低摂取、野菜や果物のより多い摂取と関連していた。この関連は特に女性で顕著であった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
34	Yoshikawa E, Nishi D, Matsuoka Y	Association between regular physical exercise and depressive symptoms mediated through social support and resilience in Japanese company workers: A cross-sectional study	BMC Public Health 16,553 – 553,07,2016	労働者における運動習慣の有無とソーシャルサポート、レジリエンス及びうつ症状の関連を明らかにすることを目的として、ある企業の従業員715人を対象に研究を行った。運動習慣のソーシャルサポート、レジリエンスを介するうつ症状への間接的な関連については媒介分析を用いて検討した。研究の結果、運動習慣のある群はない群に比較してソーシャルサポートおよびレジリエンスが高く、うつ症状には有意差が認められなかったが、ソーシャルサポートとレジリエンスを介したうつ症状への間接的な関連が認められた。定期的な運動はレジリエンスの向上及びソーシャルサポートの増進を通して労働者のうつ症状を軽減している可能性があることが示唆された。
35	Ninomiya-Baba Midori, Matsuo Junko, Sasayama Daimei, Hori Hiroaki, Teraishi Toshiya, Ota Miho, Hattori Kotaro, Noda Takamasa, Ishida Ikki, Shibata Shigenobu, Kunugi Hiroshi	Association of body mass index-related single nucleotide polymorphisms with psychiatric disease and memory performance in a Japanese population.	Acta neuropsychiatrica 1 – 10,12,2016	精神疾患患者1426名、健常者1189名を対象として、BMIに関連するSNP（一塩基多型）と精神疾患との関連と中間形質、記憶検査成績との関連を検討した。その結果、3種類のSNPの遺伝子型とアレルの発生頻度は精神疾患と関連しており、6種類のSNPが記憶課題の成績と関連していることが示された。
36	Pu Shenghong, Nakagome Kazuyuki, Itakura Masashi, Iwata Masaaki, Nagata Izumi, Kaneko Koichi	Association of fronto-temporal function with cognitive ability in schizophrenia.	Scientific reports 7,42858 – ,02,2017	統合失調症の認知機能と前頭側頭領域の脳機能との関連について、光トポグラフィー(NIRS)を用いて検討した。統合失調症患者では健常対照群に比してNIRSで測定された前頭側頭部の広範な領域にわたって血液量の活性化が低いことが示され、社会認知(心の理論)、神経認知の各指標と有意な相関が認められた。社会認知指標で統制した場合には、神経認知指標と前頭側頭部での血液量活性化との間に有意な相関がみられなくなったのに対して、神経認知指標で統制したところ、社会認知と背外側前頭前皮質、前頭極部での血液量の活性化との間に有意な相関が認められた。
37	Higuchi Y, Sumiyoshi T, Seo T, Suga M, Takahashia T, Nishiyama S, Komori Y, Kasai K, Suzuki M	Associations between daily living skills, cognition, and real-world functioning across stages of schizophrenia; A study with the Schizophrenia Cognition Rating Scale Japanese version	Schizophrenia Research Cognition 7,13 – 18,02,2017	統合失調症患者の日常生活技能に直結した認知機能の、面接による客観的評価尺度であるSchizophrenia Cognition Rating Scale (SCoRS) 日本語版(筆者らが開発)の妥当性を、多施設共同研究により検討した。結果として、SCoRSの成績は、Brief Assessment of Cognition in Schizophreniaで測定される認知機能、ならびにSocial and Occupational Functioning Assessment Scaleで測定される社会機能と有意な相関を示すことが、統合失調症や統合失調症発症のハイリスク者において認められた。
38	Ohmori Y, Ito H, Morita A, Deura K, Miyachi M; Saku Cohort Study Group	Associations between depression and unhealthy behaviours related to metabolic syndrome: a cross sectional study	Asia Pacific Journal of Clinical Nutrition 26(1),130 – 140,01,2017	本研究では、うつと不健康行動及びメタボリックシンドローム(MetS)の関連を地域の人間ドック受診者1,225名の男女を対象に調査した。結果、男女共にうつとMetSとの関連は認められなかったが、女性のみ、うつ群の方が非うつ群よりもMetS+MetS予備群の割合が高かった。また、うつと不健康行動は、男女で異なった行動要因に関連が見られた。本研究結果より、女性においてうつと不健康行動はMetSの警鐘となりうる可能性が示唆された。



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
39	Pu S, Nakagome K, Miura A, Iwata M, Nagata I, Kaneko K.	Associations between depressive symptoms and fronto-temporal activities during a verbal fluency task in patients with schizophrenia.	Sci Rep, 6,30685 - ,07,2016	統合失調症患者41名を対象に、抑うつ症状と語流暢課題を用いたNIRS (光トポグラフィー)で測定された前頭部の神経活動との関連を検討した。PANSSの5因子モデルの抑うつ/不安因子得点と腹外側前頭前皮質、右背外側前頭前皮質、左側頭領域での脳活動との間に負の相関が認められた。統合失調症における前頭・側頭部の活動性の低下が抑うつ症状と関連することが示唆された。
40	Stickley A, Koyanagi A, Takahashi H, Ruchkin V, Inoue Y, Kamio Y	Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and loneliness among adults in the general population	Research in Developmental Disabilities 62,115 - 123,01,2017	メンタルヘルスのリスク要因である孤独感について、ADHD成人大規模データを用いてADHD症状との関連を調べた。用いたデータは英国の成人精神医学的合併調査データ(n=7403)である。解析結果から、高ADHD症状と孤独感との間には強い関連があり、ADHDに合併するその他の精神障害によって説明できたのはそのうち3分の1だけであった。また孤独感にはADHD症状とリニアな関連があり、症状程度が高いほどより孤独であった。このことはADHD成人のQOL向上のためのメンタルヘルス方策を立案する際に考慮すべきである。
41	Sone D, Sato N, Maikusa N, Ota M, Sumida K, Yokoyama K, Kimura Y, Imabayashi E, Watanabe Y, Watanabe M, Okazaki M, Onuma T, Matsuda H.	Automated subfield volumetric analysis of hippocampus in temporal lobe epilepsy using high-resolution T2-weighted MR imaging.	NeuroImage: Clinical 12,57 - 64,06,2016	海馬の自動化されたサブフィールド体積測定は、側頭葉てんかん(TLE)での使用に望ましいが、その有用性は確立されていない。高解像度T2強調MRIイメージングを使用した海馬サブフィールド(ASHS)およびFreeSurferソフトウェアの新しいバージョン(ver.6.0)の自動セグメント化は、このボリュームメトリの候補である。この研究の目的は、ASHSならびにFreeSurferの新旧バージョンを用いて、TLE患者の海馬サブフィールドを評価することであった。海馬硬化症(TLE-HS)を有する25人および明らかな病因を持たない25人(TLE-nonHS)を含む50人の連続した片側TLE患者を募集した。すべての患者と45人の健常対照は、高分解能T2強調および3DT1強調MRIを受けた。FreeSurfer ver.5.3, ver.6.0, ASHSにより、すべてのMR画像を解析した。各サブフィールドについて、Zスコアを計算し、グループ間で比較した。TLE-HS群では、ASHSとFreeSurfer ver.6.0は、同側アンモン角(CA)1, CA4および歯状回(DG)において最大Zスコアを示したが、FreeSurfer ver.5.3では同側の海馬台が最大Zスコアを示した。TLE-nonHS群では、ASHSまたはFreeSurferによる有意な体積減少はなかった。ASHSとFreeSurferの新しいバージョンは、FreeSurfer(ver.5.3)の旧バージョンと比較して、HSを有するTLE患者の既存の組織病理学的知識との互換性において利点を有するかもしれないが、病理学的所見および/または外科的結果に関する更なる検討が望ましい。
42	Preethish-Kumar V, Pogoryelova O, Polavarapu K, Gayathri N, Seena V, Hudson J, Nishino I, Prasad C, Lochmuller H, Nalini A	Beevor's sign: a potential clinical marker for GNE myopathy	EUROPEAN JOURNAL OF NEUROLOGY 23(8),e46 - e48,08,2016	Beevor's signは、腹直筋において下部より上部の筋力が強いために、頸部屈曲時に臍が上方に移動する現象である。GNE myopathy 17例でBeevor's signの有無を調べたところ、股関節の伸展筋力がMRC 3以下の15例(88.2%)で陽性であったが、その他の遠位型ミオパチー(三好型ミオパチー、筋強直性ジストロフィー)では認めなかった。Beevor's sign陽性15例のうち下肢MRIを施行した12例では、腸腰筋に中等度～重度の萎縮と脂肪浸潤を認め、また、そのうち、腹部MRIを施行した2例では腸腰筋に加え、腹直筋下部(臍部より遠位)に萎縮と脂肪浸潤を認めた。GNE myopathyでは、大腿四頭筋が比較的保たれていることが知られているが(quadriceps sparing)、quadriceps sparingかつBeevor's sign陽性は、GNE myopathyを積極的に疑う手掛かりになる可能性がある。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
43	Miyatake S, Mitsuhashi S, Hayashi YK, Purevjav E, Nishikawa A, Koshimizu E, Suzuki M, Yatabe K, Tanaka Y, Ogata K, Kuru S, Shiina M, Tsurusaki Y, Nakashima M, Mizuguchi T, Miyake N, Saitsu H, Ogata K, Kawai M, Towbin J, Nonaka I, Nishino I	Biallelic Mutations in MYPN, Encoding Myopalladin, Are Associated with Childhood-Onset, Slowly Progressive Nemaline Myopathy	THE AMERICAN JOURNAL OF HUMAN GENETICS 100(1),169 - 178,01,2017	全エキソーム解析でネマリンミオパチー(NM)の原因遺伝子MYPNを同定した。 NMは近位筋優位の筋力低下、筋緊張低下、呼吸筋低下を呈する先天性ミオパチーで、心筋合併症は稀である。原因遺伝子は10種類報告されているが、約25-30%の症例では遺伝学的原因は不明である。重症度は様々で、重症な症例の多い核内棒状封入体をもつサブタイプでは原因遺伝子としてACTA1遺伝子のみが報告されている。 病理学的にはNMと診断されているものの遺伝学的原因が不明な症例に全エキソーム解析を行ったところ、4家系4症例にMYPM遺伝子劣性変異を認めた。いずれの症例も小児期から成人期の発症で、比較的軽症かつ緩徐進行性の経過であり、40歳代で歩行障害を認めた。内2症例に呼吸筋障害、心筋障害、病理学的に核内棒状封入体を認めた。MYPM遺伝子が作るタンパク質は筋サルコメアの構成成分でありZ線に位置するが、患者群ではこのタンパク質がほとんど消失していた。MYPM遺伝子のナンセンス変異をもつノックインマウスでは、Z線の構造異常やネマリン小体様の凝集物が電子顕微鏡下で確認され、NMの病態が再現できた。 本研究により、比較的軽症のNM症例、特に心筋障害を合併もしくは核内ロッドを認める症例では、MYPM遺伝子のスクリーニングの検討が必要と示唆された。
44	Miyake N, Fukai R, Ohba C, Chihara T, Miura M, Shimizu H, Kakita A, Imagawa E, Shiina M, Ogata K, Okuno-Yuguchi J, Fueki N, Ogiso Y, Suzumura H, Watabe Y, Imataka G, Leong HY, Fattal-Valevski A, Kramer U, Miyatake S, Kato M, Okamoto N, Sato Y, Mitsuhashi S, Nishino I, Kaneko N, Nishiyama A, Tamura T, Mizuguchi T, Nakashima M, Tanaka F, Saitsu H, Matsumoto N	Biallelic TBCD Mutations Cause Early-Onset Neurodegenerative Encephalopathy	AMERICAN JOURNAL OF HUMAN GENETICS 99(4),950 - 961,10,2016	小児期早期(1歳未満)に発症し、進行性のびまん性脳萎縮、退行、小頭症、発達遅滞、筋力低下、筋萎縮、呼吸不全という特徴的な臨床症状を呈する4家系8症例に全エキソーム解析を用いて遺伝子変異探索を施行した。その結果全8症例にTBCDの劣性変異を認め、ミスセンス変異5つ、ナンセンス変異1つ、スプライス部位の異常によるフレームシフト変異1つの計7変異を同定した。TBCDはtubulin-specific chaperonesと呼ばれる5つのシャペロン分子の1つで、微小管集合体において重要な役割を果たす。またARL2, TBCE, $\beta$ -tubulinと結合することが知られているが、細胞実験においてこれらの結合能は低下していた。キロショウジョウバエの嗅覚投射ニューロンを用いた実験では、TBCD変異により機能を失い、この変異は機能喪失型変異と考えられた。症例により重症度が大きく異なるが、TBCD蛋白の機能がどの程度機能が残されているかに起因すると考えられた。剖検例の脳組織学的検索においては小脳のプルキンエ細胞の変性所見が観察された。これはミトコンドリア異常症で観察される所見であり、TBCD変異により微小管に依存する細胞内ミトコンドリア輸送が障害されることがこの神経変性脳症の病態である可能性が示唆された。
45	Hayashi Yoshinori, Morinaga Saori, Zhang Jing, Satoh Yasushi, Meredith Andrea L, Nakata Takahiro, Wu Zhou, Kohsaka Shinichi, Inoue Kazuhide, Nakanishi Hiroshi	BK channels in microglia are required for morphine-induced hyperalgesia.	Nature communications 7,11697 - 11697,05,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
46	Takarada, T. Xu, C. Ochi, H. Nakazato, R. Yamada, D. Nakamura, S. Kodama, A. Shimba, S. Mieda, M. Fukasawa, K. Ozaki, K. Iezaki, T. Fujikawa, K. Yoneda, Y. Numano, R. Hida, A. Tei, H. Takeda, S. Hinoi, E.	Bone Resorption Is Regulated by Circadian Clock in Osteoblasts	J Bone Miner Res 12,2016	骨形成骨芽細胞において時計遺伝子Bmal1とPer1が発現リズムを示すこと、骨芽細胞でのみBmal1が欠損しても骨密度が減少することを見だし、骨吸収と骨密度の制御に概日時計システムが関わっていることを明らかにした。
47	Inoue YU, Inoue T	Brain enhancer activities at the gene-poor 5p14.1 autism-associated locus	Scientific Reports 6,31227 - .08,2016	自閉症スペクトラム障害と連関するヒトカドヘリン遺伝子間領域 5p14.1に脳領域特異的な遺伝子発現制御活性があることをヒト細菌人工染色体をマウス個体へ導入する独自技術の適用により明白にした。
48	Noriomi Kuroki, Hiroko Kashiwagi, Miho Ota, Masanori Ishikawa, Hiroshi Kunugi, Noriko Sato, Naotsugu Hirabayashi, Toshio Ota	Brain structure differences among male schizophrenic patients with history of serious violent acts: an MRI voxel-based morphometric study	BMC psychiatry 03,2017	
49	Suzuki Y, Fukasawa M, Obara A, Kim Y	Burnout among public servants after the Great East Japan Earthquake: decomposing the construct aftermath of disaster.	J Occup Health. 59,156 - 164,03,2017	東日本大震災後の宮城県職員(n=3,533)において、災害要因が災害16か月後のバーンアウトに影響を与えているかについて検討した。また、バーンアウトの疲労感、シニシズム、職務効能感の減少という下位尺度における災害要因、及び職務関連要因の影響を検討した。基本的属性、職務関連要因を調整しても、家屋被災の程度が大きいことがバーンアウトに影響していた。保健医療従事者は、疲労感、シニシズムのリスクが増していたが、職務効能感に関する影響はなかった。
50	Aoki Y, Manzano R, Lee Y, Dafinca R, Aoki M, Douglas AG, Varela MA1 Sathyaprakash C, Scaber J, Barbagallo P, Vader P, M?ger I, Ezzat K, Turner MR, Ito N, Gasco S, Ohbayashi N, El Andaloussi S, Takeda S, Fukuda M, Talbot K, Wood MJ	C9orf72 and RAB7L1 regulate vesicle trafficking in amyotrophic lateral sclerosis and frontotemporal dementia.	Brain. 02,2017	C9ORF72はRAB7L1 GTPアーゼのエフェクター・タンパク質として働き、細胞外小胞(エクソソーム)分泌を制御する分子機構を発見した。本研究は、治療法の無かったC9ORF72関連の筋萎縮側索硬化症と前頭側頭型認知症の新規核酸治療法開発の可能性を拓いた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
51	Munteanu I, Kalimo H, Saraste A, Nishino I, Minassian BA	Cardiac autophagic vacuolation in severe X-linked myopathy with excessive autophagy	NEUROMUSCULAR DISORDERS 27(2),185 - 187,02,2017	過剰自己貪食を伴うX連鎖性ミオパチーはVMA21遺伝子変異により引き起こされる重度な筋疾患である。酵母におけるこれまでの研究では、VMA21は酸性オルガネラのプロトンポンプとして働くV-ATPaseのマスターシャペロンであることがわかっている。V-ATPaseは酸性オルガネラのpHを調節するプロトンポンプとして働き、哺乳類組織には欠くことのできない複合体である。本報では、VMA21c.164-6t>g変異により引き起こされる、心筋においても自己貪食空胞が見られた最も危篤なXMEAの症例を報告する。しかし、この変異を伴う患者は人工呼吸器を使用するほど骨格筋が脆弱であるにもかかわらず、心疾患を含めた骨格筋以外には症状を呈さない。骨格筋に特異的なオルガネラ酸性化不全と過剰なオートファジーがもたらす組織破壊の機序を明らかにすることは、筋生理学の理解に貢献すると考える。または、VMA21変異が骨格筋特異的に起こることとは、VMA21以外の哺乳類V-ATPaseのアセンブリシャペロンの存在を示唆しているとも考えられる。
52	Nagatsuka Kazuyuki, Miyata Shigeki, Kada Akiko, Kawamura Atsushi, Nakagawara Jyoji, Furuji Eisuke, Takiuchi Shin, Taomoto Katsushi, Kario Kazuomi, Uchiyama Shinichiro, Saito Kozue, Nagao Takehiko, Kitagawa Kazuo, Hosomi Naohisa, Tanaka Keiji, Kaikita Koichi, Katayama Yasuo, Abumiya Takeo, Nakane Hiroshi, Wada Hideo, Hattori Akira, Kimura Kazumi, Isshiki Takaaki, Nishikawa Masakatsu, Yamawaki Takemori, Yonemoto Naohiro, Okada Hiromi, Ogawa Hisao, Minematsu Kazuo, Miyata Toshiyuki	Cardiovascular events occur independently of high on-aspirin platelet reactivity and residual COX-1 activity in stable cardiovascular patients.	Thrombosis and haemostasis 116 (2),356 - 68,08,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
53	Williams Kelly L, Topp Simon, Yang Shu, Smith Bradley, Fifita Jennifer A, Warraich Sadaf T, Zhang Katharine Y, Farrowell Natalie, Vance Caroline, Hu Xun, Chesi Alessandra, Leblond Claire S, Lee Albert, Rayner Stephanie L, Sundaramoorthy Vinod, Dobson-Stone Carol, Molloy Mark P, van Blitterswijk Marka, Dickson Dennis W, Petersen Ronald C, Graff-Radford Neill R, Boeve Bradley F, Murray Melissa E, Pottier Cyril, Don Emily, Winnick Claire, McCann Emily P, Hogan Alison, Daoud Hussein, Levert Annie, Dion Patrick A, Mitsui Jun, Ishiura Hiroyuki, Takahashi Yuji, Goto Jun, Kost Jason, Gellera Cinzia, Gkazi Athina Soragia, Miller Jack, Stockton Joanne, Brooks William S, Boundy Karyn, Polak Meraida, Muñoz-Blanco José Luis, Esteban-Pérez Jesús, Ribano Alberto, Hardiman Orla, Morrison Karen E, Ticozzi Nicola, Silani Vincenzo, de Belleruche Jacqueline, Glass Jonathan D, Kwok John B J, Guillemin Gilles J, Chung Roger S, Tsuji Shoji, Brown Robert H, García-Redondo Alberto, Rademakers Rosa, Landers John E, Gitler Aaron D, Rouleau Guy A, Cole Nicholas J, Yerbury Justin J, Atkin Julie D, Shaw Christopher E, Nicholson Garth A, Blair Ian P	CCNF mutations in amyotrophic lateral sclerosis and frontotemporal dementia.	Nature communications 7 (7),11253 - ,04,2016	家族性ALS/FTDの新規病因遺伝子CCNFを同定した。
54	Uezumi A, Nakatani M, Ikemoto-Uezumi M, Yamamoto N, Morita M, Yamaguchi A, Yamada H, Kasai T, Masuda S, Narita A, Miyagoe-Suzuki Y, Takeda S, Fukada SI, Nishino I, Tsuchida K	Cell-Surface Protein Profiling Identifies Distinctive Markers of Progenitor Cells in Human Skeletal Muscle	STEM CELL REPORTS 7(2),263 - 278,08,2016	骨格筋には幹細胞である筋衛星細胞と、筋への脂肪浸潤やその線維化に寄与する間葉系前駆細胞の全く異なる幹/前駆細胞が存在するが、その詳細は不明であった。本研究では、ヒト骨格筋に存在するこれらの幹/前駆細胞の細胞表面タンパク質を包括的に解析し、筋衛星細胞についてはCD82及びCD318、間葉系前駆細胞についてはCD201を新規マーカーとして同定した。これらのマーカーを用い、筋原性の前駆体と間葉系前駆体を区別し、単離することが可能になった。機能解析においては、CD82が過剰な筋分化を抑制することにより筋原性の前駆体の増殖と保存を調節していること、またCD201シグナルにより間葉系細胞の脂肪分化を促進することが明らかとなった。よって、本研究で同定されたこれらの細胞表面タンパク質は、骨格筋における幹/前駆細胞の有効なマーカーであるだけでなく、ヒト骨格筋の恒常性維持機構や疾患のさらなる理解のために重要な分子であろう。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
55	Hidese Shinsuke, Hattori Kotaro, Sasayama Daimei, Miyakawa Tomoko, Matsumura Ryo, Yokota Yuuki, Ishida Ikki, Matsuo Junko, Noda Takamasa, Yoshida Sumiko, Teraishi Toshiya, Hori Hiroaki, Ota Miho, Kunugi Hiroshi	Cerebrospinal fluid neural cell adhesion molecule levels and their correlation with clinical variables in patients with schizophrenia, bipolar disorder, and major depressive disorder.	Progress in neuro- psychopharmacology & biological psychiatry 76,12 - 18,02,2017	本研究の目的は、統合失調症・双極性障害・大うつ病性障害における脳脊髄液(CSF)のNCAMレベルと、そのNCAMレベルと臨床変数との関連を検討することであった。これらの患者と健常者を対象としたところ、全ての患者は健常者よりも脳脊髄液のNCAMレベルが低く、なかでも双極性障害患者では顕著に低かった。さらに、双極性障害と統合失調症の患者において、脳脊髄液のNCAMレベルと臨床症状に相関があった。このことから、重度の精神疾患の症状形成にNCAMが関与することが示唆された。
56	Matsuoka Y, Hamazaki K, Nishi D, Hamazaki T	Change in blood levels of eicosapentaenoic acid and posttraumatic stress symptom: A secondary analysis of data from a placebo-controlled trial of omega-3 supplements	Journal of Affective Disorders 205,289 - 291,08,2016	オメガ3系脂肪酸(主成分DHA)による身体外傷後のPTSD予防を目的としたRCTの二次解析として、赤血球膜中多価不飽和脂肪酸組成とPTSD症状との関連を調べた。研究の結果、オメガ3系脂肪酸投与群では、介入後のEPA組成が高いこととPTSD症状が低いことの間に関連が認められた。PTSD症状を最小化するにはDHAよりEPAの方が効果的である可能性が示唆された。
57	Jono Y, Iwata Y, Mizusawa H, Hiraoka K.	Change in Excitability of Corticospinal Pathway and GABA-Mediated Inhibitory Circuits of Primary Motor Cortex Induced by Contraction of Adjacent Hand Muscle.	Brain Topogr. 29 (6),834 - 846,11,2016	
58	Oe M, Takahashi H, Maeda M, Harigane M, Fujii S, Miura I, Nagai M, Yabe H, Ohira T, Suzuki Y, Yasumura S, Abe M	Changes of Posttraumatic Stress Responses in Evacuated Residents and Their Related Factors: A 3-Year Follow-up Study From the Fukushima Health Management Survey.	Asia Pacific Journal of Public Health 29(2),182S - 192S,03,2017	東日本大震災、福島原発事故後の避難地域の住民におけるトラウマ反応の経過を軌跡分析で検討した。結果、慢性、抵抗性、回復、非回復の4群に分類された。回復群に関連していた要因は、笑いの頻度が多いことが回復群に促進的な関連がみられ、65歳以上、津波の経験、暮らし向きが悪いことが、抑制的に関連していた。
59	SatoM, Noda T, Sugiyama N, Yoshihama F, Miyake M, Ito H	Characteristics of aggression among psychiatric inpatients by ward type in Japan: Using the Staff Observation Aggression Scale ? Revised (SOAS-R)	International Journal of Mental Health Nursing 09,2016	精神科患者の攻撃行動は、臨床において重要な問題であり、攻撃性を惹起させる要因の注意深い評価と行動の適切なマネジメントが必要である。本研究は、日本語版の改定Staff Observation Aggression Scale ? Revised (SOAS-R)を用いて、攻撃行動における3つの病棟特性による違いについて比較した。その結果「精神科救急病棟」では攻撃性の対象は職員であり、攻撃された職員は怖いと感じていた。「精神科急性期病棟」では服薬支援が最も攻撃性の誘因であり多くは言語的攻撃であった。「精神科一般病棟」では、患者間での手を使う攻撃行動が多く、攻撃された患者は身体的苦痛を感じ、攻撃した患者本人は隔離される場合が多かった。これらの病棟特性を考慮して、攻撃行動の特徴を理解した上で精神科ケアがなされる必要がある。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
60	Yasui-Furukori N, Hashimoto K, Tsuchimine S, Tomita T, Sugawara N, Ishioka M, Nakamura K	Characteristics of Escitalopram Discontinuation Syndrome: A Preliminary Study.	Clin Neuropharmacol 39(3),125 - 127,05,2016	背景:抗うつ薬中断症候群(ADS)は抗うつ薬による治療を突然に中止した患者に於いて、しばしば生じる。 方法:エスシタロプラムを中止した25人のうつ病に罹患した外来患者の評価を実施した。 結果:56%(14/21人)の患者にてADSが観察された。頻度の高い症状として、めまい(44%)、筋緊張(44%)、悪寒(44%)、困惑あるいは集中の困難感(40%)、健忘(28%)、および泣くこと(28%)であった。治療用量および血漿濃度はADSを有する患者に於いて有意に高値であった。年齢、性別、および中止前のエスシタロプラム治療期間についてのサブグループ間について、群間差を認めなかった。 結論:高い治療用量および低いクリアランスがADSのリスクを高めることを示唆している。全ての患者について、非常に慎重な減量が推奨される。
61	Matsuzaka Y, Tanihata J, Komaki H, Ishiyama A, Oya Y, R?egg U, Takeda SI, Hashido K	Characterization and Functional Analysis of Extracellular Vesicles and Muscle-Abundant miRNAs (miR-1, miR-133a, and miR-206) in C2C12 Myocytes and mdx Mice.	PLoS One. 11(12),12,2016	マウスC2C12筋芽細胞を対象に、細胞外小胞の分泌は、カルシウムイオン依存性の細胞内セラミドレベルによって制御されていることを証明した。さらに、マウスC2C12筋芽細胞とmdxマウスを対象に、分泌された細胞外小胞と筋特異的miRNA-1, -133a, -206は、筋変性と筋細胞死を抑える働きがある可能性を示した。
62	Odaka H, Numakawa T, Yoshimura A, Nakajima S, Adachi N, Ooshima Y, Inoue T, Kunugi H.	Chronic glucocorticoid exposure suppressed the differentiation and survival of embryonic neural stem/progenitor cells: Possible involvement of ERK and PI3K/Akt signaling in the neuronal differentiation.	Neurosci Res 113,28 - 36,12,2016	ラット培養細胞を用いて、グルココルチコイドが胎児由来神経幹細胞の分化シグナルに対して抑制的に作用することを明らかにした。
63	Ikeda K, Mori-Yoshimura M, Yamamoto T, Sonoo M, Suzuki S, Kondo Y, Nakamura H, Mitsuhashi K, Maeda MH, Shimizu J, Hayashi YK, Nishino I, Oya Y, Murata M	Chronic Myopathy Associated With Anti-Signal Recognition Particle Antibodies Can Be Misdiagnosed As Facioscapulohumeral Muscular Dystrophy	JOURNAL OF CLINICAL NEUROMUSCULAR DISEASE 17(4),197 - 206,06,2016	抗SRP抗体を伴う自己免疫介在性壊死性ミオパチー(抗SRPミオパチー)患者で、長期経過と筋病理における炎症が見られないことから、当初は筋ジストロフィーと診断されていた6例を報告した。内5例は、翼状肩甲を呈したことから顔面肩甲上腕型筋ジストロフィー(FSHD)と診断されていた。しかし、家族歴がない事、筋力低下に左右差が目立たないこと、重度の嚥下障害等の所見から、抗SRPミオパチーが疑われ、抗体測定により抗SRPミオパチーの診断が確定した。これらの症例は、非典型的FSHD症例においては抗SRP抗体測定を考慮する必要性があることを示している。
64	Egusa SF, Inoue YU, Asami J, Terakawa YW, Hoshino M, Inoue T	Classic cadherin expressions balance postnatal neuronal positioning and dendrite dynamics to elaborate the specific cytoarchitecture of the mouse cortical area	Neuroscience Research 105,49 - 64,04,2016	マウス大脳皮質体性感覚バレル領野に特徴的な組織構築様式の表出に生後間もないクラシックカドヘリンの差次的発現様式が重要であることを初めて実験的に示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
65	Beheshti I, Demirel H, Matsuda H	Classification of Alzheimer's disease and prediction of mild cognitive impairment-to-Alzheimer's conversion from structural magnetic resource imaging using feature ranking and a genetic algorithm	Comput Biol Med 83,109 - 119,02,2017	特徴的なランキングと遺伝的アルゴリズムを用いて構造的磁気共鳴映像データを解析する新規なコンピュータ支援診断(CAD)システムを開発した。このシステムを用いて、臨床診断前の1~3年の間に軽度認知障害(MCI) - アルツハイマー病(AD)の変換を予測することができる。CADシステムは4段階で開発された。まず、健常対照(HC)と比較して、AD群における全身および局所灰白質(GM)萎縮を調べるために、ボクセルベースの形態計測技術を使用した。GMの大幅な削減が行われた領域は、関心領域(VOI)として分類した。第2に、これらのVOIを用いて、AD、HC、安定MCI(sMCI)および進行性MCI(pMCI)患者群のそれぞれの萎縮領域からボクセル値を抽出した。次いで、ボクセル値を特徴ベクトルに抽出した。第3に、特徴選択段階では、すべての特徴が、それぞれの検定得点および最適な特徴のサブセットを見つけるために設計された遺伝的アルゴリズムに従ってランク付けされた。フィッシャー基準は遺伝的アルゴリズムにおける目的関数の一部として用いられた。最後に、10倍交差検証を有するサポートベクターマシン(SVM)を用いて分類を実施した。我々は、提案された自動CADシステムを、ADNI(AD 160個、162個のHC、65個のsMCIおよび71個のpMCI被験者)のベースライン値に適用することによって評価した。実験結果は、提案されたシステムがsMCI患者とpMCI患者とを区別することができ、臨床現場での実用に適していることを示した。
66	Watanabe Y, Uruha A, Suzuki S, Nakahara J, Hamanaka K, Takayama K, Suzuki N, Nishino I	Clinical features and prognosis in anti-SRP and anti-HMGCR necrotizing myopathy	JOURNAL OF NEUROLOGY, NEUROSURGERY & PSYCHIATRY 87(10),1038 - 1044,10,2016	自己免疫介在性壊死性ミオパチー(iNM)に関連する自己抗体として抗SRP抗体と抗HMGCR抗体が知られているが、両者がもたらす臨床病理学的な差異は明らかではなく、本研究はそれを明らかにすることを目的とした。2010 - 2014年に筋炎統合的診断研究プロジェクトに登録された特発性炎症性筋疾患症例 460例のうち、臨床病理学的にiNMと診断された例は177例であった。うち抗SRP抗体陽性例は69例(39%)、抗HMGCR抗体陽性例は46例(26%)であった。これらの症例を対象に臨床病理像を比較した。抗SRP抗体陽性例では重度の筋力低下、筋萎縮、頸部筋力低下、嚥下障害、呼吸障害、間質性肺病変の頻度が有意に高く、一方、抗HMGCR抗体陽性例ではスタチン製剤の使用、細胞膜上へのMAC(C5b-9)沈着が高頻度であった。本研究は抗SRP抗体と抗HMGCR抗体の臨床病理像を過去最大規模の症例数で解析し、両者の相違点を世界に先駆けて報告した。尚、この内容は同号のEditorialで注目論文として取り上げられた。
67	Shimizu R, Ogata K, Tamaura A, Kimura E, Ohata M, Takeshita E, Nakamura H, Takeda S, Komaki H	Clinical trial network for the promotion of clinical research for rare diseases in Japan: muscular dystrophy clinical trial network.	BMC Health Serv Res. 16(241),1 - 9,07,2016	筋ジストロフィーを中心とした希少疾患を対象に、参加医療機関が最新の臨床試験や標準的治療などの国内外の情報・データの共有を行い、効率的かつ迅速に臨床試験・臨床研究が実施できる筋ジストロフィー臨床試験ネットワーク(MDCTN)を本邦で構築した。これにより、我が国における臨床試験が促進されると期待される。



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
68	Hamanaka K, Goto K, Arai M, Nagao K, Obuse C, Noguchi S, Hayashi YK, Mitsuhashi S, Nishino I	Clinical, muscle pathological, and genetic features of Japanese facioscapulohumeral muscular dystrophy 2 (FSHD2) patients with SMCHD1 mutations	NEUROMUSCULAR DISORDERS 26(4-5),300 - 308,04,2016	本研究で、アジア人初の顔面肩甲上腕型筋ジストロフィー2型 (FSHD2) 患者が同定された。FSHDは、D4Z4リピートと呼ばれる繰り返しDNA配列が短縮して発症するFSHD1と、SMCHD1と呼ばれる遺伝子の変異で発症するFSHD2に分類される。今まで、アジア人のFSHD2患者の報告はなかった。本研究では、SMCHD1遺伝子における変異を持つ日本人患者11家系13症例が同定された。結果、これらFSHD2患者は、FSHD1と臨床的、筋病理学的に同様であった。また遺伝学的に、日本人FSHD2患者は、欧米のFSHD2患者と異なる種類のSMCHD1遺伝子変異を持っていた。また、これらFSHD2患者はD4Z4リピートが正常下限程度の長さであり、SMCHD1遺伝子変異のみならずD4Z4リピートがある程度短い事がFSHD2発症に必要である可能性が示唆された。
69	Shinmei I, Kobayashi K, Oe Y, Takagishi Y, Kanie A, Ito M, Takebayashi Y, Murata M, Horikoshi M, Dobkin RD	Cognitive behavioral therapy for depression in Japanese Parkinson's disease patients: a pilot study	Neuropsychiatric Disease and Treatment 12,1319 - 1331,06,2016	パーキンソン病に並存するうつに対するCBTのハ?イロツスタテ?イを実施した。19名のパーキンソン病患者に6週のCBTを実施し、GRID-HAMDにおいて有意なうつ得点の改善を確認した(Hedges' g = -1.02, 95%CI = -1.62 to -0.39)。脱落率は19例中1例で?、重篤な有害事象は発生せず?、パーキンソン病患者のうつに対するCBTの実施可能性か?確認て?きた。
70	Sumiyoshi T., Nishida K, Niimura H, Toyomaki A, Morimoto T, Tani M, Inada K, Ninomiya T, Hori H, Manabe J, Katsuki A, Kubo T, Koshikawa Y, Shirahama M, Kohno K, Kinoshita T, Kusumi I, Iwanami A, Ueno T, Kishimoto T, Terao T, Nakagome K.	Cognitive insight and functional outcome in schizophrenia; A multi-center collaborative study with the Specific Level of Functioning Scale - Japanese version.	Schizophrenia Research Cognition 6,9 - 14,12,2016	統合失調症の社会機能的転帰の評価尺度として、海外で高い妥当性が報告されているSLOF(The Specific Levels of Functioning Scale)の日本語版を作成し、その妥当性を検証するとともに、社会機能と認知的洞察との関連について検証した。統合失調症患者58名を対象にSLOFのほか、SFS(社会機能評価)、BACS(神経心理検査)、UPSA-B(社会機能的能力)、BCIS(認知的洞察)を用いて評価を行った。その結果、SLOFはSFSに比してより強く認知機能、社会機能的能力と関連し、SFSは認知的洞察との間に有意な関連が見いだせなかったのに対して、SLOFは認知的洞察と有意な関連が認められた。SLOF日本語版は、客観的な社会機能評価において高い有用性を示すことが示唆された。
71	Takahashi Y, Kanai M, Taminato T, Watanabe S, Matsumoto C, Araki T, Okamoto T, Ogawa M, Murata M	Compound heterozygous intermediate MJD alleles cause cerebellar ataxia with sensory neuropathy.	Neurol Genet 3(1),e123 - ,11,2016	常染色体優性遺伝形式の遺伝性脊髄小脳変性症の一種であるマチャド・ジョセフ病が、中間的なCAGリピート伸長の複合ヘテロ接合として発症に至る症例を発見し、その変異の詳細と症例の病態について検討を行った。
72	Kitamura Y, Komori T, Shibuya M, Ohara K, Saito Y, Hayashi S, Sasaki A, Nakagawa E, Tomio R, Kakita A, Nakatsukasa M, Yoshida K, Sasaki H	Comprehensive genetic characterization of rosette-forming glioneuronal tumors: independent component analysis by tissue microdissection	Brain Pathol 16(6),11,2016	ロゼット形成glioneuronal腫瘍は近年定義された疾患である。比較的まれな腫瘍であるが、それらの症例を集めて包括的遺伝子の特徴を調べた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
73	Liang WC, Tian X, You CY, Chen WZ, Kan TM, Su YN, Nishino I, Wong LC, Jong YJ	Comprehensive target capture/ next-generation sequencing as a second-tier diagnostic approach for congenital muscular dystrophy in Taiwan	PLOS ONE 12(2),e0170517 – e0170517,02,2017	台湾人の先天性筋ジストロフィー(CMD)患者48名において、次世代シーケンサーを含む遺伝子解析を行った。VI型コラーゲンの筋鞘膜特異的欠損症(SSCD) 15名の内14名にCOL6A1, COL6A2, もしくはCOL6A3遺伝子変異を認めた。知的障害はなく、遠位筋優位の筋緊張低下を有し、重症度は全体として過去の報告例より低かった。メロン欠損型6名は全例LAMA2変異を有し、知られている独特の臨床症状を呈した。精神遅滞やてんかんの頻度は6名中3名と、過去の報告例より多かった。αジストログリカン部分欠損型2名の内1名にはPOMT1遺伝子変異、もう1名にはTPAPPC11遺伝子変異が見つかった。ジストロフィー変化に加えて著しいリンパ球浸潤を認めた2名にはLMNA遺伝子変異が見つかった。この2名に頸部伸展制限や関節拘縮はあったが、現時点で心合併症はなかった。本研究により、筋病理所見が遺伝子変異と密接に関係しており、遺伝子診断の前に疑わしい遺伝子を絞ることが出来ることを確認した。また台湾人におけるCMDの各亜型の頻度を報告した。
74	Yokoyama K, Imabayashi E, Sumida K, Sone D, Kimura Y, Sato N, Mukai Y, Murata M, Matsuda H.	Computed-tomography-guided anatomic standardization for quantitative assessment of dopamine transporter SPECT	Eur J Nucl Med Mol Imaging Epub ahead of print,08,2016	CTを用いたSPM12による解剖学的標準化が、DaTスキャンの定量評価に有用であった。
75	Yokoyama K, Imabayashi E, Sumida K, Sone D, Kimura Y, Sato N, Mukai Y, Murata M, Matsuda H	Computed-tomography-guided anatomic standardization for quantitative assessment of dopamine transporter SPECT.	Eur J Nucl Med Mol Imaging 44 (3),366 – 372,03,2017	FP-CIT単光子放出コンピュータ断層撮影法(SPECT)(DaTscan)を用いたドーパミントランスポータ(DAT)の定量的評価のために、解剖学的標準化は、線条体結合の客観的かつユーザ非依存的定量化を、-interest (VOI) テンプレート。しかしながら、パーキンソン病(PD)におけるDATの低蓄積は、構造情報なしでDaTscan特異的鋳型を使用した場合、変形エラーにつながるであろう。この変形誤差を回避するために、SPECT / CT装置を用いて得られたコンピュータ断層撮影(CT)データを解剖学的標準化に適用した。我々は、パーキンソニズム症候群(PS)を有する130人の患者(80人のPD患者および50人の非PD患者を含む)のDaTscan画像を適用的に分析した。まず、統計的パラメトリックマッピング12 (SPM12)を使用して、CT画像から灰白質をセグメント化した。次に、これらの灰白質画像を、累乗型リー代数(DARTEL)アルゴリズムを使用する異型解剖学的位置合わせを使用して解剖学的に標準化した。次に、DaTscan画像を、CT解剖学的標準化で使ったのと同じパラメータで歪ませた。PDにおける減少したDATに対する線条体VOIの目標は、各群からの20のDaTscan画像のSPM12群比較から生成された。これらのVOIを、両方の群の残りの患者のDaTscan画像に適用し、参照領域内の非特異的カウントを用いて特異的結合比(SBR)を計算した。SBRを用いたPD群と非PD群の鑑別診断の観点から、DaTscan画像の定量評価のためのソフトウェアプログラムとして既に公開されている2つの方法、DaTQUANTとDaTViewとを比較した。SPM12群の比較は、両側全線条体のPD患者において有意なDAT低下を示した。評価された3つの方法のうち、現在のCTガイド方法は、2つの群を完全に分離するので、PD群と非PD群を区別するための最大の力を示した。
76	Mitoma H, K.Adhikari, D.Aeschlimann, P.Chattopadhyay, M.Hadjivassiliou, C.S.Hampe, J.Honnorat, B.Joubert, Kakei S, J.Lee, M.Manto, Matsunaga A, Mizusawa H, Nanri K	Consensus Paper:Neuroimmune Mechanisms of Cerebellar Ataxias	:Cerebellum 15(2),213 – 232,04,2016	近年、免疫介在性機序が小脳性失調症で注目されており、このコンセンサス論文でそれらの臨床的特徴や発症機序について論じる。そこには、抗GAD抗体関連小脳失調症、小脳型橋本病、原発性自己免疫性小脳失調症、グルテン失調症、Miller Fisher症候群、SLEに伴う失調症、傍腫瘍性小脳変性症が含まれ、液性機序、細胞介在免疫、炎症、血管障害が関与している。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
77	Yamashita Y, Fujimura T, Katahira K, Honda M, Okada M, and Okanoya K?	Context? sensitivity? in the? detection? of? changes? in? facial? emotion.	Scientific Reports 6,27798 – 27798,06,2016	社会的文脈における表情変化の認知を模した「表情変化検出課題」を提案し、文脈に一致した自然な表情変化は速く正確に、文脈と一致しない不自然な表情変化は遅く不正確に、認知される傾向があることを明らかにした。
78	Yamaguchi S, Sato S, Horio N, Yoshida K, Shimodaira M, Taneda A, Ikebuchi E, Nishio M, Ito J	Cost-effectiveness of cognitive remediation and supported employment for people with mental illness: a randomized controlled trial	Psychological Medicine 47(1),53 – 65,01,2017	本研究の目的は、多施設共同の無作為化臨床試験において、認知機能に障害を持った精神障害者における認知機能リハビリテーション（認知リハ）と援助付き雇用の費用対効果を測定することであった。研究の結果、従来の支援と比較し、認知リハ＋援助付き雇用は、安い費用で、利用者に高い就労率、長い就労期間、認知機能の回復をもたらす可能性があることが明らかになった
79	Ishikawa R, Ishigaki T., Kikuchi A., Matsumoto K., Kobayashi S., Morishige S., Hosono M., Nakamura Y., Kase A., Morimoto T., Haga D	Cross-cultural validation of the Cognitive Biases Questionnaire for psychosis in Japan and examination of the relationships between cognitive biases and schizophrenia symptoms	Cognitive Ther Res 10,2016	サイコーシスの認知バイアス質問紙(CBQp)は、精神病における認知バイアスを測定するための妥当性のある自記式質問紙である。CBQp日本版の妥当性および統合失調症症状との関連を検討した。統合失調症患者111人、うつ病患者40人、健常対照群35人を対象に検討したところ、CBQpは中等度～高い内的一貫性、陽性症状との併存的妥当性、健常対照群との判別妥当性を示し、症状については、統合障害／自閉的没入との相関が認められた。
80	Kodera H, Ohba C, Kato M, Maeda T, Araki K, Tajima D, Matsuo M, Hino-Fukuyo N, Kohashi K, Ishiyama A, Takeshita S, Motoi H, Kitamura T, Kikuchi A, Tsurusaki Y, Nakashima M, Miyake N, Sasaki M, Kure S, Haginoya K, Saitsu H, Matsumoto N.	De novo GABRA1 mutations in Ohtahara and West syndromes.	Epilepsia 57(4),566 – 573,04,2016	GABRA1遺伝子の新生突然変異が大田原症候群やWest症候群を引き起こすことを見出した。
81	Yasumura A, Takimoto Y, Nakazawa E, Inagaki M	Decision making in children with attention-deficit/hyperactivity disorder	Open Journal of Pediatrics 6,158 – 162,06,2016	臨床研究に関する説明や同意文書は、医学的な専門用語などが比較的多く、特に注意力などに問題を呈する発達障害児には理解が困難な場合も少なくない。そこで、代表的な認知機能検査であるWISCを用いて意思決定能力の定量評価を試みた。参加者は注意欠陥多動性障害(ADHD)児11例であった。結果、言語性IQと比較して動作性IQが低下していた。群指数では、処理速度が低下していた。下位検査では、符号及び組合せが低下していた。結果から、聴覚的な説明が有効であることやリスク・ベネフィットの重みづけに注意して説明することの必要性が示唆された。以上のことから、WISCによってADHD児の意思決定能力を定量的に評価できる可能性が示唆された。
82	Yoshimura N, Nishimoto A, Belkacem AN, Shin D, Kambara H, Hanakawa T, Koike Y	Decoding of covert vowel articulation using electroencephalography cortical currents	Front Neurosci Neuroprosthetics 10,175 – .05,2016	脳波から母音想像中課題の母音を識別

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
83	Uno K., Kikuchi Y., Iwata M., Uehara T., Matsuoka T., Sumiyoshi T., Okamoto Y., Jinno H., Takada T., Furukawa-Hibi Y., Nabeshima T., Miyamoto Y., Nitta A	Decreased DNA methylation in the Shati/Nat8l promotor in both patients with schizophrenia and a methamphetamine-induced murine model of schizophrenia-like phenotype	PLoS ONE 11(6),1 - 11.06.2016	本研究において、Shati/Nat8遺伝子 (CPG-islands) のメチル化率が、統合失調症モデルマウスで低下するか検討を行った。結果として、メタアンフェタミン投与マウスの側坐核および末梢血においてShati/Nat8遺伝子のメチル化率が対照マウスに比べ、有意に低下した。さらに、Shati/Nat8遺伝子メチル化率低下は、統合失調症患者でも認めた。以上より、Shati/Nat8遺伝子のCPG-islandsのメチル化のプロフィールは統合失調症の診断マーカーになりうると思われた。
84	Nakamura A, Fueki N, Shiba N, Motoki H, Miyazaki D, Nishizawa H, Echigoya Y, Yokota T, Aoki Y, Takeda S	Deletion of exons 3-9 encompassing a mutational hot spot in the DMD gene presents an asymptomatic phenotype, indicating a target region for multiexon skipping therapy.	J Hum Genet. 61(7),663 - 667,05,2016	ジストロフィノパチーの遺伝子欠失変異のホット・スポットに含まれる、エクソン3-9欠失変異を有するデュシェンヌ型筋ジストロフィー患者の骨格筋症状は軽微であることから、マルチ・エクソン・スキップ治療の優れた治療標的になり得ることが示唆される。
85	Sato K, Takahashi I, Satake R, Fukuda S, Nakaji S, Yasui-Furukori N.	Depressive Symptoms and Coping Behaviors among Individuals with Irritable Bowel Syndrome in Japan.	Intern Med 56(5),493 - 498,03,2017	精神的不調と過敏性腸症候群(IBS)が関連するとされるが、IBS患者におけるストレス対処方略に関する研究は少ない。本研究では、IBS患者における抑うつ症状とストレス対処方略に関して検討を行った。岩木健康増進プロジェクト2013に参加した993人の中から、Rome III基準による症状を満たした58人について検討を行った。主たる評価にはコーピング特性簡易尺度質問票(BSCP)と疫学的抑うつ尺度(CES-D)を用いた。58人のうち22人が、probable depressionと判定された。ストレス対処方略では、回避と抑圧が抑うつ症状と関連していた。ストレス対処方略に関わる心理療法がIBS患者における抑うつ症状を軽減できるかもしれないが、さらなる縦断的デザインによる検証が必要である。
86	Sakakibara E, Homae F, Kawasaki S, Nishimura Y, Takizawa R, Koike S, Kinoshita A, Sakurada H, Yamagishi M, Nishimura F, Yoshikawa A, Inai A, Nishioka M, Eriguchi Y, Matsuoka J, Satomura Y, Okada N, Kakiuchi C, Araki T, Kan C, Umeda M, Shimazu A, Uga M, Dan I, Hashimoto H, Kawakami N, Kasai K.	Detection of resting state functional connectivity using partial correlation analysis: A study using multi-distance and whole-head probe near-infrared spectroscopy.	Neuroimage (142),590 - 601,11,2016	近赤外線分光法(Near-infrared spectroscopy: NIRS)を用いて安静時機能結合(Resting-state functional connectivity: RSFC)を推定し、RSFCのfMRI先行研究から得られた結果に対して本推定の妥当性を検討した。NIRS用プローブ多重配置型を用いた結果、脳外の信号の影響を減少させることを示したが、NIRS用全頭型プローブを用いた結果は、脳半球間と脳半球内の対領域に有意なRSFCが示され、特に女性でRSFCがより強かった。これらの結果は、先行研究結果と一致しており、本研究方法の妥当性は確認された。
87	Hori Y, Ogura J, Ihara N, Higashi T, Tashiro T, Honda M, Hanakawa T	Development of a removable head fixation device for longitudinal behavioral and imaging studies in rats	J Neurosci Methods 264,11 - 15,05,2016	PET、MRI撮像対応型の小動物運動学習用脳固定具を開発し、従来型の固定具と比較検討した
88	Mizuno M, Yamaguchi S, Taneda A, Hori H, Aikawa A, Fujii C	Development of Japanese version of King's Stigma Scale and its short version: Psychometric properties of a self-stigma measure.	Psychiatry Clin Neurosci 71,189 - 197,03,2017	本研究では、精神科患者の自己スティグマを評価する尺度である「Kingスティグマ尺度日本語版」およびその短縮版を作成した。精神疾患患者112名からデータを取得し、信頼性と妥当性を検討したところ、全項目版および短縮版とも十分な信頼性と妥当性を示した。精神疾患に対するスティグマの解消に向け、標準版は主に国際比較に、短縮版は主に臨床で用いられることが有用であると思われた。
89	Kono Yumi, Yonemoto Naohiro, Kusuda Satoshi, Hirano Shinya, Iwata Osuke, Tanaka Kyoko, Nakazawa Jun	Developmental assessment of VLBW infants at 18 months of age: A comparison study between KSPD and Bayley III.	Brain & development 38(4),377 - 85,04,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
90	Ohyama T, Kaga Y, Goto Y, Aoyagi K, Ishii S, Kanemura H, Sugita K, Aihara M	Developmental changes in autonomic emotional response during an executive functional task: A pupillometric study during Wisconsin card sorting test.	Brain and Development 11,2016	自律性情動反応の実行機能への関与を明らかにし、その発達変化について検討した。実行機能課題としてウィスコンシンカードソーティングテスト (WSCT) 施行中の瞳孔径変化を計測し、特に課題のカテゴリーが変更されるとき (CS) に注目して検討した。成人ではCS時に散瞳し、正答を得た時には縮瞳するパターンを認めた。小児では発達とともに成人のパターンに近づき、達成数と散瞳の程度は正の相関を認めた。以上より自律性情動反応は実行機能に重要な役割をはたしていることが示唆される
91	Suzuki Y, Yabe H, Horikoshi N, Yasumura S, Kawakami N, Ohtsuru A, Mashiko H, Maeda M; Mental Health Group of the Fukushima Health Management Survey.	Diagnostic accuracy of Japanese posttraumatic stress measures after a complex disaster: The Fukushima Health Management Survey.	Asia Pac Psychiatry 9(1),03,2017	PTSDのスクリーニング尺度 (PCL) 日本語版の診断効率について、福間第一原子力発電所事故を経験した人々において検討した。避難住民群、臨床群から51人の参加者を得て、WHO 統合国際診断面接 (CIDI) による PTSD 診断に対する感度、特異度、診断効率を検討した結果、それぞれ 66.7%、84.9%、79.2%であった (最適カットオフ52、ROC曲線下面積0.83)。先行研究で検討されている短縮版についても、完全版と同程度であった。日本語版PCLの完全版、短縮版について、診断効率が確認された。
92	Fujita A, Waga C, Hachiya Y, Kurihara E, Kumada S, Takeshita E, Nakagawa E, Inoue K, Miyatake S, Tsurusaki Y, Nakashima M, Saito H, Goto YI, Miyake N, Matsumoto N.	Different X-linked KDM5C Mutations in Affected Male Siblings: Is Maternal Reversion Error Involved?	Clin Genet 90(3),276 - 281,09,2016	
93	Hanaoka, K., Sasakura, K., Suwanai, Y., Toma-Fukai, S, Shimamoto, K., Takano, Y., Shibuya, N., Terai, T., Komatsu, T, Ueno, T., Ogasawara, Y., Tsuchiya, Y., Watanabe, Y., Kimura, H., Wang C., Uchiyama, M., Kojima, H., Okabe, T., Urano, Y., Shimizu, T., Nagano, T.	Discovery and mechanistic characterization of selective inhibitors of H2S-producing enzyme: 3-mercaptopyruvate sulfurtransferase (3MST) targeting active-site cysteine persulfide	Sci. Rep. 7(40227),1 - 12,01,2017	H2S生産酵素選択的阻害剤の開発
94	Ishii S, Kaga Y, Tando T, Aoyagi K, Sano F, Kanemura H, Sugita K, Aihara M	Disinhibition in children with attention-deficit/hyperactivity disorder: changes in [oxy-Hb] on near-infrared spectroscopy during "rock, paper, scissors" task	Brain and Development 12,2016	AD/HD児の前頭葉抑制機能を客観的に評価するため、後出しじゃんけん負け課題施行中の近赤外線スペクトロスコピー (NIRS) を使用して、前頭部脳血流変化 (OxyHb濃度) を検討した。ADHD群の正答数は、年少群 (6~10歳) に差はなく、年長群 (11~16歳) で、有意に低下していたが、ADHDのOxyHb濃度は年少群でも有意に低下していた。以上より、前頭部のOxyHb変化は、AD/HDのバイオマーカーとして、年少群から有用であることが示唆される。
95	Muramatsu Y, Tokita Y, Mizuno S, Nakamura M.	Disparities in visuo-spatial constructive abilities in Williams syndrome patients with typical deletion on chromosome 7q11.23	Brain and Development 39(2),145 - 153,02,2017	ウィリアムズ症候群は視空間認知障害が強いことが知られている。今回、我々は7q.11.23部分に典型的な欠失を持ち、典型的な視空間認知障害の所見を示した既往のある5名の本症候群患者 (16歳-24歳時点) について、その視空間認知能力をより鋭敏とされる3次元の要素を含む視空間構成課題を用いて検討した。その結果、今回の横断的な検討時点においては、視空間構成認知能力の個人差が大であり、中には定型発達者の標準値に匹敵する検査課題の遂行レベルを示すものもあった。臨床症状の横断的検討のみで遺伝子機能を議論することへの警鐘となる所見と考えられた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
96	Baba S, Takeshita E, Yamazaki H, Tarashima M, Sasaki M	Disruption of the photoreceptor inner segment/outer segment junction in a 6-year-old girl with Joubert syndrome	Neuro-Ophthalmology 41(1),19 - 23,10,2016	ジュベール症候群はhypotonia、知的障害などを呈する遺伝性の神経疾患である。ごま塩様眼底を示しOCTにて外境界膜の欠損と、IS/OSラインの非連続性を示したジュベール症候群の女兒を報告する。OCTで中心窩領域の網膜外層の障害が(障害も)認められた。ジュベール症候群ではしばしば様々な程度の網膜変性が合併するが、OCT所見については報告されていない。我々の(症例の)所見はジュベール症候群における網膜障害のより正確な機序を示すものである。
97	Matsuno H, Kudoh M, Watakabe A, Yamamori T, Shigemoto R, Nagao S	Distribution and Structure of Synapses on Medial Vestibular Nuclear Neurons Targeted by Cerebellar Flocculus Purkinje Cells and Vestibular Nerve in Mice: Light and Electron Microscopy Studies.	PLoS ONE 11(10),e0164037 - ,10,2016	研究グループではマウスの眼球運動学習の長期記憶は小脳皮質プルキンエ細胞の出力先である前庭核及び小脳核にあることを示してきた。今回マウス前庭核におけるシナプス構造について、順行性トレーシング法、光学顕微鏡、電子顕微鏡を用いた観察を行った。小脳プルキンエ細胞の軸索は前庭核の大型細胞領域と小型細胞領域へ、異なるシナプス形態を持って投射していることが明らかとなった。また小型細胞領域では前庭核細胞の遠位樹状突起上に抑制性シナプスを形成しており、前庭神経細胞-前庭核間の興奮性シナプス伝達に直接的に作用している可能性が示唆された。
98	Matsuoka T, Miwa Y, Tajika M, Sawada M, Fujimaki K, Soga T, Tomita H, Uemura S, Nishino I, Fukuda T, Sugie H, Kosuga M, Okuyama T, Umeda Y	Divergent clinical outcomes of alpha-glucosidase enzyme replacement therapy in two siblings with infantile-onset Pompe disease treated in the symptomatic or pre-symptomatic state	MOLECULAR GENETICS AND METABOLISM REPORTS 9 (2016),98 - 105,12,2016	2例の乳幼児期発症のポンペ病(IOPD)における酵素補充療法(ERT)の効果について報告した。IOPD患者は未治療の場合生後1年以内に死亡する。一方、本報告において生後4か月からERTを施行された患者は6歳時においてもベッドから起き上がる事は出来ないが生存していた。生後10日目からERTを施行された2例目は3歳時より筋力低下を示したがそれ以前は無症状であった。以上の2例の結果は、生後早い時期からのERTは数年間IOPDの症状を予防、軽減するのに有効であることを示している。しかし、さらに長期間ERTの効果を持続させるには、酵素の筋への取り込みの増強が必要と考えられる。
99	Zaha K, Matsumoto H, Itoh M, Saitsu H, Kato K, Kato M, Ogata S, Murayama K, Kishita Y, Mizuno Y, Kohda M, Nishino I, Ohtake A, Okazaki Y, Matsumoto N, Nonoyama S	DNM1L-related encephalopathy in infancy with Leigh syndrome-like phenotype and suppression-burst	CLINICAL GENETICS 90(5),472 - 474,11,2016	Dynamin1 like (DNML1)はGTPaseの一種で、ミトコンドリアやペルオキシソームの分裂を調整しており、ドミナントネガティブの変異は、哺乳類の細胞でミトコンドリアの分裂を妨げることが知られている。また人の表現型としては非常に重症な乳児の脳症が報告されている。今回臨床症状で筋緊張の低下とサブレッションバーストを伴うスパズムを認め、生化学検査でミトコンドリアの機能不全、病理学的にはLeigh脳症を呈した症例を経験し、全エクソーム解析を施行したところde novoの新規のDNML1変異が発見された。この症例を過去に報告されたDNM1L関連脳症症例との比較、考察を行い、報告する。
100	Amino Mari, Inokuchi Sadaki, Yoshioka Koichiro, Nakagawa Yoshihide, Ikari Yuji, Funakoshi Hiraku, Hayakawa Katsura, Matsuzaki Masakazu, Sakurai Atsushi, Tahara Yoshio, Yonemoto Naohiro, Nagao Ken, Yaguchi Arino, Morimura Naoto,	Does Antiarrhythmic Drug During Cardiopulmonary Resuscitation Improve the One-month Survival: The SOS-KANTO 2012 Study.	Journal of cardiovascular pharmacology 68(1),58 - 66,07,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
101	Hagiwara Shuichi, Oshima Kiyohiro, Aoki Makoto, Miyazaki Dai, Sakurai Atsushi, Tahara Yoshio, Nagao Ken, Yonemoto Naohiro, Yaguchi Arino, Morimura Naoto,	Does the number of emergency medical technicians affect the neurological outcome of patients with out-of-hospital cardiac arrest?	The American journal of emergency medicine 35(3),391 – 396,03,2017	
102	Nagao Ken, Nonogi Hiroshi, Yonemoto Naohiro, Gaieski David F, Ito Noritoshi, Takayama Morimasa, Shirai Shinichi, Furuya Singo, Tani Sigemasa, Kimura Takeshi, Saku Keijiro,	Duration of Prehospital Resuscitation Efforts After Out-of-Hospital Cardiac Arrest.	Circulation 133(14),1386 – 96,04,2016	
103	Nakamura Tomohiko, Yonemoto Naohiro, Nakayama Masahiro, Hirano Shinya, Aotani Hirofumi, Kusuda Satoshi, Fujimura Masanori, Tamura Masanori,	Early inhaled steroid use in extremely low birthweight infants: a randomised controlled trial.	Archives of disease in childhood. Fetal and neonatal edition 101 (8),04,2016	
104	Sugie K, Yoshizawa H, Onoue K, Nakanishi Y, Eura N, Ogawa M, Nakano T, Sakaguchi Y, Hayashi YK, Kishimoto T, Shima M, Saito Y, Nishino I, Ueno S	Early onset of cardiomyopathy and intellectual disability in a girl with Danon disease associated with a de novo novel mutation of the LAMP2 gene	NEUROPATHOLOGY 36(6),561 – 565,12,2016	Danon病はX連鎖優性遺伝形式の疾患であり、男性は肥大型心筋症、ミオパチー、知的障害が3主徴で小児期から発症するのに対し、女性では肥大型心筋症や伝導障害が主症状となり、成人発症であることが多い。今回、我々は12歳で発症し、心筋症と伝導障害に加え、知的障害も合併したLAMP2遺伝子にナンセンス変異を持つDanon病女児例を経験した。Danon病の女児で知的障害を有する症例の報告は本症例が初めてであり、Danon病女性の臨床症状には幅があることが考えられた。
105	Ota M, Matsuo J, Ishida I, Hattori K, Teraishi T, Tonouchi H, Ashida K, Takahashi T, Kunugi H	Effect of a ketogenic meal on cognitive function in elderly adults: potential for cognitive enhancement.	Psychopharmacology (Berl) 233 (21-22),3797 – 3820,10,2016	健常高齢者に対してケトン食を摂取させた際、血中のケトン体濃度の上昇と認知機能の改善を認めた。
106	Takaki Fukumori, Hiromi Kuroda, Masaya Ito, and Masami Kashimura	Effect of guided, structured, writing program on self-harm ideations and emotion regulation	The Journal of Medical Investigation 64,74 – 78,02,2017	
107	Ota M, Hori H, Sato N, Yoshida F, Hattori K, Teraishi T, Kunugi H	Effects of ankyrin 3 gene risk variants on brain structures in patients with bipolar disorder and healthy subjects.	Psychiatry Clin Neurosci 70,498 – 506,11,2016	Ankyrin3 (ANK3)遺伝子のイントロン部位の多型は、双極性障害のリスク因子と考えられている。本研究では、43名の双極性障害患者および229名の健常対照者においてANK3遺伝子の多型(rs10761482)と脳の構造との関連を検討し、ANK3遺伝子が双極性障害患者の右小指子(forceps minor)のFA(fractional anisotropy)値の低下および加齢性の脳萎縮に関連することを見いだした。
108	Hidese, S., Ota, M., Wakabayashi, C., Noda, T., Ozawa, H., Okubo, T., & Kunugi, H.	Effects of chronic l-theanine administration in patients with major depressive disorder: an open-label study.	Acta neuropsychiatrica 1 – 8,07,2016	大うつ病性障害患者20名を対象に、L-theanineの精神症状への影響を検討した。抑うつ症状や不安症状は有意に低下し、BACSで評価した認知機能は全般的に改善していた。L-theanineは様々な症状に有益な効果をもたらす可能性がある。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
109	Noguchi R, Sekizawa Y, So M, Yamaguchi S, Shimizu E	Effects of five-minute internet-based cognitive behavioral therapy and simplified emotion-focused mindfulness on depressive symptoms: a randomized controlled trial	BMC Psychiatry 17(1),85 – 85,03,2017	本研究は、インターネットを用いた簡易な認知行動療法(iCBT)と簡易なマインドフルネス療法(sEFM)の効果を検証するために、比較のための対照群を含めた3群による無作為化臨床試験を実施した。試験の結果、介入直後では、対照群と比較し、sEFMは全般的な精神的健康(PHQ-9)に有意な効果を示した。しかし、6週間後においては、iCBTおよびsEFMの効果は見られなかった。iCBTとsEFMの長期効果を期待するためには、それぞれのプログラムの修正が必要であると示唆された
110	Okada Y, Murata M, Toda T.	Effects of Levodopa on Vowel Articulation in Patients with Parkinson's with Parkinson's Disease.	Kobe J Med Sci. 61(5),E144 – 154,04,2016	
111	Murata M, Mihara M, Hasegawa K, Bemseok J, Chon-Haw T, Nishikawa N, Oeda T, Yokoyama M, Weining Z R, Davis R, Susan E, Krai C and Janet B.	Efficacy and safety of levodopa-carbidopa intestinal gel from a study in Japanese, Taiwanese, and Korean advanced Parkinson's disease patients.	npj Parkinson's disease 16020 – ,08,2016	
112	Saida, T., J.I. Kira, S. Kishida, T. Yamamura, Y. Sudo, K. Ogiwara, J.T. Tibung, N. Lucas, M. and Subramanyam	Efficacy, safety, and pharmacokinetics of natalizumab in Japanese multiple sclerosis patients: A double-blind, randomized controlled trial and open-label pharmacokinetic study	Mult Scler Relat Disord. 11,25 – 31,01,2017	MS治療薬ナタリズマブ承認の基礎となった国内フェーズ2試験について、二重盲検期の解析結果と、PKデータをまとめて報告した論文である。
113	Watanabe, S., Takahashi, H., Torimitsu, K.	Electroconductive polymer-coated silk fiber electrodes for neural recording and stimulation in vivo.	Japanese Journal of Applied Physics 56(3),02,2017	導電性高分子を用いて作成した繊維状電極の特性を解析し、これが脳活動の測定と刺激に使用できることを明らかにした。
114	Suzuki H, Aoki Y, Kameyama T, Saito T, Masuda S, Tanihata J, Nagata T, Mayeda A, Takeda S, Tsukahara T	Endogenous Multiple Exon Skipping and Back-Splicing at the DMD Mutation Hotspot.	Int J Mol Sci. 17(10),10,2016	デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者を対象に、ジストロフィン遺伝子欠失変異のホットスポットであるエクソン45-55領域を標的にしたエクソン45-55スキップ治療が有望視されている。本研究では、正常骨格筋由来のトータルRNAを用いてRT-PCR法によりエクソン45-55領域から生じるトランスクリプトを詳細に解析し、エクソン44と56が結合した環状RNAを含め8つの環状RNAの検出に成功した。
115	Ito N, Shimizu N, Tanaka H, Takeda S	Enhancement of satellite cell transplantation efficiency by leukemia inhibitory factor.	J Neuromuscul Dis. 3(2),201 – 207,06,2016	筋衛星細胞を用いた細胞移植治療は、Duchenne型筋ジストロフィーなどの筋疾患に対する治療法の一つとして考えられている。しかし、筋衛星細胞はin vitroで培養するにつれて、その未分化能を失い、移植効率が低下する。筆者らは培養時にLeukemia inhibitory factor (LIF)を加える事により、筋衛星細胞の未分化性が維持され、移植効率が向上する事を明らかにした。
116	Okazaki T, Saito Y, Ueda R, Awashima T, Nishimura Y, Yuasa I, Shinohara Y, Adachi K, Sasaki M, Nanba E, Maegaki Y.	Epileptic phenotype of FGFR3-related bilateral medial temporal lobe dysgenesis.	Brain Dev 39(1),67 – 71,01,2017	FGFR3遺伝子変異をもつ軟骨低形成症をもつ患児で、両側内側側頭葉の異形成とてんかんを伴っていた。このような症例はこれまで知られていない。



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
117	Kitamura S, Katayose Y, Nakazaki K, Motomura Y, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Enomoto M, Moriguchi Y, Hida A and Mishima K	Estimating individual optimal sleep duration and potential sleep debt	Sci Rep 6,35812 - ,10,2016	若年成人男性15名を対象に、12時間睡眠機会での睡眠時間の減少から得られた漸近値から睡眠必要量(OSD)を推定し、習慣的睡眠時間(HSD)との差分から潜在的睡眠負債(PSD)を推定した。総睡眠時間は睡眠延長セッションを通じて急速に減少し、OSDは8.41±.18h、PSDは1.04±.24hであった。PSDは客観的眠気と相関し、また延長後には糖代謝、甲状腺、HPA系機能の改善がみられた。本知見は、個人の睡眠負債の評価に睡眠必要量に対する考慮の重要性を示している。
118	Zhang W, Ohira T, Abe M, Kamiya K, Yamashita S, Yasumura S, Ohtsuru A, Maeda M, Harigane M, Horikoshi N, Suzuki Y, Yabe H, Yuuki M, Nagai M, Takahashi H, Nakano H, for the Fukushima Health Management Survey Group	Evacuation after the Great East Japan Earthquake was associated with poor dietary intake: The Fukushima Health Management Survey.	Journal of Epidemiology 27(1),14 - 23,01,2017	福島第一原子力発電所事故の避難住民における、住宅事情と食物摂取の関係について検討した(n= 73,43)。修正ポアソン回帰分析の結果、自宅あるいは親戚宅で生活している住民に比較して、アパートや借家で生活している住民は、果物・野菜、肉、大豆製品、乳製品の摂取頻度が低かった(それぞれのPrevalence ratio=0.69, 0.82, 0.89, 0.83, 5%水準で有意差あり)。仮設住宅の住民においてもこれらの摂取頻度は低かった(それぞれのPrevalence ratio=0.83, 0.90, 0.94, 0.91, 5%水準で有意差あり)。自宅外生活の避難住民の食物摂取のパターンが明らかになり、避難住民への適切な食事指導が必要である。
119	Adachi T, Hayashi T	Evolutionarily conserved phosphorylation and palmitoylation-dependent regulation of dopamine D1-like receptors in vertebrates	Neurotransmitter 2016(3),e1434 - ,10,2016	脳の各種機能に重要な役割を果たすドーパミンD1様受容体のリン酸化およびパルミトイル化翻訳後修飾機構に関し、各動物種のD1様受容体ホモログのアミノ酸配列を比較解析し、脊椎動物亜門における分子進化上のリン酸化の特異的な獲得および保存性と各動物門を超えた動物界全般でのパルミトイル化の保存性を明らかにした。
120	Matson J. L., Matheis M, Burns C.O., Esposito G, Venuti P, Pisula E, Misiak A, Kalyva E, Tsakiris V, Kamio Y, Ishitobi M, & Goldin R.L.	Examining cross-cultural differences in autism spectrum disorder: a multinational comparison from Greece, Italy, Japan, Poland, and the United States	European Psychiatry 42,70 - 76,02,2017	自閉症スペクトラム障害は、神経発達障害の主要なもので、今日では世界共通の精神保健課題となっている。しかしながら、共通の評価尺度を用いた国際比較研究はほとんど報告されていない。ASD児の行動への気づきや解釈には文化的な影響が関連するため、比較文化的検討は重要である。本研究は、2さい児用が開発されたASD評価尺度(the Baby Infant Screen for Children with aUtism Traits (BISCUIT))を用いて、ギリシャ、イタリア、日本、ポーランド、米国間で親のASD症状重症度評価を比較し、類似点と相違点を見出した。これらの結果はそれぞれの文化にカスタマイズされた尺度の運用に有用となる。
121	Akasaka-Manyu K, Kawamura M, Tsumoto H, Saito Y, Tachida Y, Kitazume S, Hatsuta H, Miura Y, Hisanaga SI, Murayama S, Hashimoto Y, Manyu H, Endo T	Excess APP O-glycosylation by GalNAc-T6 decreases Aβ production	J Biochem 161(1),99 - 111,01,2017	剖検例の脳の解析より、GalNAc-T6による過剰APP O-グリコシル化は、Aβ産生を低下させることが明らかとなった。アルツハイマー病の病態機序として重要であり、創薬のヒントになると考えられる。
122	Ohara C, Komaki G, Yamagata Z, Hotta M, Kamo T, Ando T.	Factors associated with caregiving burden and mental health conditions in caregivers of patients with anorexia nervosa in Japan	BioPsychoSocial Medicine 10,21 - ,06,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
123	Kageyama M, Solomon P, Kita S, Nagata S, Yokoyama K, Nakamura Y, Kobayashi S, Fujii C	Factors related to physical violence experienced by parents of persons with schizophrenia in Japan	Psychiatry Research 25(243),439 - 445,06,2016	統合失調症患者による家族に対する暴力の実態を400名の患者家族への調査により明らかにした。身体的暴力は、患者の性別(男性に多い)、低収入、家族の批判的な対応に関連していた。家族および本人へのコミュニケーションスキルトレーニングは暴力を減らすための戦略となるかもしれない
124	Fujikawa M, Nishio Y, Kakisaka Y, Ogawa N, Iwasaki M, Nakasato N	Fantastic confabulation in right frontal lobe epilepsy	Epilepsy Behav Case Rep 6,55 - 57,08,2016	右前頭葉てんかんにて特徴的に観察された作話症状の2症例報告
125	Ishii M, Okumura Y, Sugiyama N, Hasegawa H, Noda T, Hirayasu Y, Ito H	Feasibility and efficacy of shared decision making for first-admission schizophrenia: a randomized clinical trial	BMC Psychiatry 17(52),1 - 7,02,2017	統合失調症患者のシェアードディシジョンメイキング(SDM)の運用については議論が続けられている。本研究の目的は、初回入院患者のSDMの実施可能性と効能を明らかにすることである。SDMプログラムの提供の有無を無作為に割り付け、満足度の違いを比較した。登録患者数が少ないために、研究は中止することになった。その時点で24名が対象となり、両群で満足度に有意な違いはなかった。今後は大規模な研究が必要である。
126	Tomizawa R, Shigeta M, Reeves S	Framework development for the assessment of interprofessional teamwork in mental health settings	J Interprof Care online journal,1 - 8,11,2016	多職種チームの質を測定するため、その構造を示す概念モデルを生成した。
127	Yoshimura A, Kawamata M, Yoshioka Y, Katsuda T, Kikuchi H, Nagai Y, Adachi N, Numakawa T, Kunugi H, Ochiya T, Tamai Y	Generation of a novel transgenic rat model for tracing extracellular vesicles in body fluids	Scientific Reports 6,31172 - ,08,2016	細胞外小胞の生体内における動態を明らかにするために、GFPタグ付きヒトCD63を発現するトランスジェニックラットを作製した。ヒトCD63-GFPは、血清、母乳、羊水中の細胞外小胞において検出された。血清から精製したCD63-GFP標識細胞外小胞は、in vitroにおいてラット胎児線維芽細胞内に取り込まれた。
128	Okubo M, Minami N, Goto K, Goto YI, Noguchi S, Mitsunashi S, Nishino I	Genetic diagnosis of Duchenne/ Becker muscular dystrophy using next-generation sequencing: validation analysis of DMD mutations	JOURNAL OF HUMAN GENETICS 61(6),483 - 489,06,2016	Duchenne/Becker型筋ジストロフィー(DMD/BMD)の原因遺伝子であるジストロフィン遺伝子異常の診断に次世代シーケンス法(IonPGMによるシーケンス)を用いた。欠失は全例診断可能であり、一方重複は7割が評価可能であった。微小変異は連続した塩基の挿入変異の検出が困難であった。現行のMLPA法よりも診断率が高く、治療が期待されるナンセンス変異の検出も一度に可能であり、今後次世代シーケンス法がDMD/BMD診断の第一選択となることが期待される。
129	Daimei Sasayama, Kotaro Hattori, Shintaro Ogawa, Yuuki Yokota,Ryo Matsumura, Toshiya Teraishi, Hiroaki Hori, Miho Ota, Sumiko Yoshida, Hiroshi Kunugi	Genome-wide quantitative trait loci mapping of the human cerebrospinal fluid proteome.	Human Molecular Genetic 26(1),44 - 51,01,2017	133名を対象とし、514,227の各一塩基多型(SNP)の遺伝子型と1,126種類の各タンパク質の髄液中濃度との関連をスピアマン相関係数を用いて調べた。cis SNP-タンパク質の組合せは421組、transでは25組がFDR 1%の有意水準で関連していた。cisの組合せのみでの解析ではさらに580組が有意となった。本研究により、遺伝子多型が中枢神経におけるタンパク質の発現に重要な役割を担うことが示唆された

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
130	Forouzanfar Mohammad H, Liu Patrick, Roth Gregory A, Ng Marie, Biryukov Stan, Marczak Laurie, Alexander Lily, Estep Kara, Hassen Abate Kalkidan, Akinyemiju Tomi F, Ali Raghieb, Alvis-Guzman Nelson, Azzopardi Peter, Banerjee Amitava, B?rnighausen Till, Basu Arindam, Bekele Tolesa, Bennett Derrick A, Biadgilign Sibhatu, Catal?-L?pez Ferr?n, Feigin Valery L, Fernandes Joao C, Fischer Florian, Gebru Alemseged Aregay, Gona Philimon, Gupta Rajeev, Hankey Graeme J, Jonas Jost B, Judd Suzanne E, Khang Young-Ho, Khosravi Ardeshtir, Kim Yun Jin, Kimokoti Ruth W, Kokubo Yoshihiro, Kolte Dhaval, Lopez Alan, Lotufo Paulo A, Malekzadeh Reza, Melaku Yohannes Adama, Mensah George A, Misganaw Awoke, Mokdad Ali H, Moran Andrew E, Nawaz Haseeb, Neal Bruce, Ngalesoni Frida Namnyak, Ohkubo Takayoshi, Pourmalek Farshad, Rafay Anwar, Rai Rajesh Kumar, Rojas-Rueda David, Sampson Uchechukwu K, Santos Itamar S, Sawhney Monika, Schutte Aletta E, Sepanlou Sadaf G, Shifa Girma Temam, Shiue Ivy, Tedla Bemnet Amare, Thrift Amanda G, Tonelli Marcello, Truelsen Thomas, Tsilimparis Nikolaos, Ukwaja Kingsley Nnanna, Uthman Olalekan A, Vasankari Tommi, Venketasubramanian Narayanaswamy, Vlassov Vasiliy Victorovich, Vos Theo, Westerman Ronny, Yan Lijing L, Yano Yuichiro, Yonemoto Naohiro, Zaki Maysaa El Sayed, Murray Christopher J L	Global Burden of Hypertension and Systolic Blood Pressure of at Least 110 to 115 mm Hg, 1990-2015.	JAMA 317(2),165 - 182,01,2017	
131	Fuminori Saitoh, Shuji Wakatsuki, Shinji Tokunaga, Hiroki Fujieda, Toshiyuki Araki	Glutamate signals through mGluR2 to control Schwann cell differentiation and proliferation.	Scientific Reports 6,29856 - 07,2016	我々は、この論文においてグルタミン酸は、末梢神経のシュワン細胞に対して脱分化フェノタイプを強め、増殖を促進する作用を持っていることを明らかにした。さらに我々は、この効果がシュワン細胞が発現する代謝型グルタミン酸受容体 (mGluR2サブタイプ) を介したシュワン細胞内のシグナルが、Neuregulin1によるErbB2のリン酸化シグナルを強めることによって生じていることを示した。また、マウス体内においても、グルタミン酸は正常な髄鞘形成型シュワン細胞を脱分化させること、mGluR2シグナルの阻害が髄鞘化促進作用を持つことを示し、mGluR2シグナルの阻害が末梢神経脱髄疾患の治療に有効である可能性を示した。
132	Soshi T, Nakajima H, Hagiwara H	Grammatical markers switch roles and elicit different electrophysiological responses under shallow and deep semantic requirements	Heliyon 2,10,2016	注意が語彙内容に向いている場合と、そうでない場合に、どのように言語脳活動が変動するかを調べた。注意が語彙内容に直接、向かう場合は、機能語の有無にかかわらず類似した脳活動を示し、そうでない場合は、脳活動が変化することが分かり、注意の有無により、同じ言語処理が異なったプロセスによりなされることが分かった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
133	Nakamura K, Hamaguchi T, Sakai K, Noto D, Ono K, Hayashi YK, Nishino I, Yamada M	Granuloma formation in a patient with GNE myopathy	NEUROMUSCULAR DISORDERS 27(2),183 - 184,02,2017	炎症細胞非乾酪性類上皮細胞肉芽腫を呈するGNEミオパチー患者を経験した。患者はGNE遺伝子にホモ接合型変異(c.1505-4G>A)を有し、60歳頃より進行性に四肢の筋力低下を自覚した。65歳時には前脛骨筋に著明な筋力低下と筋萎縮、遠位筋優位に中等度の筋力低下を認めた。筋生検では縁取り空胞を伴う筋線維の萎縮、炎症細胞浸潤と共に非乾酪性類上皮細胞肉芽腫を認めた。GNEミオパチーにおける肉芽腫形成の報告はこれまでになく、本症例が初めての報告例である。筋細胞内での異常な蛋白質の蓄積やオートファジーの過剰な活性化により肉芽腫が形成された可能性がある。
134	Sone D, Matsuda H, Ota M, Maikusa N, Kimura Y, Sumida K, Yokoyama K, Imabayashi E, Watanabe M, Watanabe Y, Okazaki M, Sato N.	Graph theoretical analysis of structural neuroimaging in temporal lobe epilepsy with and without psychosis.	PLoS One 11(7),e0158728 - .06,2016	精神病は、側頭葉てんかんにおける最も重要な精神医学的併存疾患の一つであり、その病態生理は依然として未解決である。片側性海馬硬化症(HS)を有する11人のTLE患者で精神病を呈しているか、または精神病の病歴を有する患者(TLE-P群)を募集した。対照として、精神病エピソードの既往のない片側HSのTLE患者15名も募集した(TLE-N群)。グラフ理論分析のために、両群の正規化された灰白質画像をGraph Analysis Toolbox(GAT)で解析した。二次解析として、各群を14人の年齢および性別が一致した健康な被験者と比較した。ハブノードの位置は、主にTLE-N群の同側半球において、一方、主にTLE-P群の対側半球に見出された。TLE-P群は、TLE-N群に比べて、特徴的経路長および移行性が有意に高く、全体的な効率およびランダムまたは標的攻撃に対する回復力が有意に低かった。媒介中心性は、TLE-P群における対側側頭葉、同側中前頭回、両側中心後回において減少していた。健康な被験者は、バランスのとれたノード/エッジ分布およびTLE-N群と同様の測定結果を示した。
135	Shimbo M, Kudo T, Hamada M, Jeon H, Imamura Y, Asano K, Okada R, Tsunakawa Y, Mizuno S, Yagami K, Ishikawa C, Li H, Shiga T, Ishida J, Hamada J, Murata K, Ishimaru T, Hashimoto M, Fukamizu A, Yamane M, Ikawa M, Morita H, Shinohara M, Asahara H, Akiyama T, Akiyama N, Sasanuma H, Yoshida N, Zhou R, Wang YY, Ito T, Kokubu Y, Noguchi TA, Ishimine H, Kurisaki A, Shiba D, Mizuno H, Shirakawa M, Ito N, Takeda S, Takahashi S	Ground-based assessment of JAXA mouse habitat cage unit by mouse phenotypic studies.	Exp Anim. 65(2),175 - 187,05,2016	国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」でマウスを用いた実験を行うため、宇宙航空研究開発機構(JAXA)はマウス軌道上飼育装置(HCU)を新規に開発した。本研究ではHCUでの飼育が、マウスにどのような影響を与えるかを解析した。いくつかの臓器ではHCUでの飼育による変化が認められたが、大きな影響は観察されなかった。HCU飼育によって起きる影響は宇宙実験において考慮されなければならないが、HCUはマウス飼育に十分な装置であることがわかった。
136	Wakatsuki S, Tokunaga S, Shibata M, Araki T	GSK3B-mediated phosphorylation of MCL1 regulates axonal autophagy to promote Wallerian degeneration.	The Journal of Cell Biology 216(2),477 - 493,01,2017	神経傷害後や一部の神経疾患において神経の突起構造が壊れていく際に、オートファジーが神経を積極的に壊す方向に寄与していることを示した。本研究の結果、神経軸索中で活性化されたオートファジーは、軸索構造の崩壊を促進するとともに、神経損傷部位に壊れた神経突起構造を貪食するマクロファージを呼び寄せて細胞の残骸を処理する働きを高めていることが明らかとなった。
137	Kadowaki, A., S. Miyake, R. Saga, A. Chiba, H. Mochizuk, and T. Yamamura	Gut environment-induced intraepithelial autoreactive CD4+ T cells suppress central nervous system autoimmunity via LAG-3	Nat Commun 7(11639),1 - 16,05,2016	腸管上皮リンパ球には、多発性硬化症の動物モデルEAEの脳に移行して、炎症を抑制する能力を有することを証明した。このリンパ球は、腸内細菌叢や食餌成分(AHRリガンド)の影響を受けるので、MSと食生活の関連を理解するうえで、大きな意義を持つと考えている。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
138	Takuro Sugai, Yutaro Suzuki, Manabu Yamazaki, Kazutaka Shimoda, Takao Mori, 10:56 2016/11/25 Yuji Ozeki, Hiroshi Matsuda, Norio Sugawara, Norio Yasui-Furukori, Yoshitake Minami, Kurefu Okamoto, Toyoaki Sagae, Toshiyuki Someya	High Prevalence of Obesity, Hypertension, Hyperlipidemia, and Diabetes Mellitus in Japanese Outpatients with Schizophrenia: A Nationwide Survey.	PLoS One 11(11),e0166429 - ,11,2016	統合失調症患者において、肥満、高血圧、脂質異常症、糖尿病の罹患率を調べるため、本邦において、大規模な疫学調査を行った。肥満、高血圧、脂質異常症、糖尿病の罹患率について、外来患者の罹患率が入院患者のそれに比べて、有意に高いことを認めた。年齢階層に分けた解析においても、外来患者の罹患率は入院患者よりも2から3倍ほど高い現状を確認した。
139	Yamauchi T, Inagaki M, Yonemoto N, Iwasaki M, Akechi T, Sawada N, Iso H, Noda M, Tsugane S,	History of diabetes and risk of suicide and accidental death in Japan: The Japan Public Health Centre-based Prospective Study, 1990-2012.	Diabetes & metabolism 42(3),184 - 91,06,2016	
140	Ohnuki Y, Suzuki S, Shiina T, Uruha A, Watanabe Y, Suzuki S, Izumi S, Nakahara J, Hamanaka K, Takayama K, Suzuki N, Nishino I	HLA-DRB1 alleles in Immune-mediated necrotizing myopathy	NEUROLOGY 87(18),1954 - 1955,11,2016	免疫介在性壊死性ミオパチー(IMNM)の危険因子としては、スタチン製剤、癌、結合組織病(CTD)があげられる。また、マーカーとしては、SRP、HMGCRに対する自己抗体があるが、病理学的にIMNMと診断された患者のすべてで検出できるわけではなく、IMNMの自己免疫機序はまだ解明されていない。今回、IMNM患者におけるヒト白血球抗原(HLA)-DRB1対立遺伝子型について調査した。DRB1*08:03は正常群と比較し、IMNM群で優位に多く、DRB1*11:01はIMNMの危険因子であった。さらにDRB1*08:03は抗SRP抗体関連IMNM患者に多く見られ、DRB1*11:01は抗HMGCR抗体関連IMNMに優位に多く検出された。IMNM患者の合計数が少なく、今後症例の蓄積は必要であるが、IMNMは特定のHLADRB1対立遺伝子と関連していると考えられる。
141	Morimoto S, Takao M, Hatsuta H, Nishina Y, Komiya T, Sengoku R, Nakano Y, Uchino A, Sumikura H, Saito Y, Kanemaru K, Murayama S.	Homovanillic acid and 5-hydroxyindole acetic acid as biomarkers for dementia with Lewy bodies and coincident Alzheimer's disease: An autopsy-confirmed study.	PLoS One 12(2),02,2017	ホウバビリン酸および5-ヒドロキシインドール酢酸は、レビー小体および一致アルツハイマー病の認知症のバイオマーカーとして重要であることを剖検脳の検索との対比で明らかにした。
142	Ito K, Matsuda H, Kubota K	Imaging Spectrum and Pitfalls of (11)C-Methionine Positron Emission Tomography in a Series of Patients with Intracranial Lesions.	Korean J Radiol. 17(3),424 - 434,06,2016	11C-メチオニン(Met)陽電子放射断層撮影(PET)は、脳腫瘍を評価するために最も一般的に使用されるPETトレーサーの1つである。しかし、11C-Met PETの読影のヒントや落とし穴を一般臨床医に説明した報告はほとんどない。11C-Met PET検査中の生理学的11C-Met摂取、解剖学的変化、血管障害、炎症または異形成などの非腫瘍性病変、良性脳腫瘍および患者状態は、画像解釈に潜在的に影響し、偽陽性および陰性を引き起こす可能性がある。11C-Met PET画像の解釈におけるこれらの落とし穴は、核医学医師だけでなく一般の放射線科医にとっても重要である。11C-Met画像のスペクトルおよび落とし穴に精通していると、誤診を防ぐことができる。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
143	Sone D, Matsuda H, Ota M, Maikusa N, Kimura Y, Sumida K, Yokoyama K, Imabayashi E, Watanabe M, Watanabe Y, Okazaki M, Sato N.	Impaired cerebral blood flow networks in temporal lobe epilepsy with hippocampal sclerosis: A graph theoretical approach.	Epilepsy Behav 62,239 – 245,08,2016	グラフ理論は、脳のネットワークを調べる新しい方法である。側頭葉てんかん(TLE)において、変化した脳血流(CBF)が頻りに報告されているが、CBFのグラフ理論的所見はあまり理解されていない。ここでは、動脈スピンドラッグイメージングを用いたTLEにおけるCBFのグラフ理論的ネットワークを調べた。TLEおよび片側性海馬硬化症(HS)(19人の左TLEおよび21人の右TLE)および20人の性別および年齢が一致した健常対照被験者を募集した。疑似連続動脈スピンドラッグイメージングを用いて参加者のCBFマップをすべて取得し、Graph Analysis Toolbox(GAT)ソフトウェアプログラムを使用して分析した。その結果、対照群と比較して、有意に低いクラスター係数( $p = 0.024$ )、局所効率( $p = 0.001$ )、全身効率( $p = 0.010$ )、および高い移行性( $p = 0.015$ )右TLEを有する患者は、有意に高い集積度( $p = 0.046$ )および移行性( $p = 0.011$ )を示した。右TLEを有するグループはまた、トレンドレベルで、特徴的な経路長値( $p = 0.085$ )、全体的な効率( $p = 0.078$ )、ターゲット攻撃に対する低反発力( $p = 0.101$ )を有していた。右TLEの正規化されたクラスター係数( $p = 0.081$ )と、正規TLEの正規化された特性パス長( $p = 0.089$ )は、トレンドレベルでも見られた。左右のTLEを有する患者の両方は、同様の領域、すなわち帯状回、鰓前葉および後頭葉において有意に減少したクラスター係数を示した。我々の知見は、左TLEにおけるCBFネットワークが非効率であり、右TLEにおける刺激に対する脆弱性が示唆される、異なる左右のネットワーク指標を明らかにした。地域的に減少したクラスター係数の左右共通の知見は、TLEにおけるデフォルトモードネットワークの障害を反映している可能性がある。
144	Ishizu N, Yui D, Hebisawa A, Aizawa H, Cui W, Fujita Y, Hashimoto K, Ajioka I, Mizusawa H, Yokota T, Watase K.	Impaired striatal dopamine release in homozygous Vps35 D620N knock-in mice.	Hum Mol Genet 25(20),4507 – 4517,08,2016	Vacuolar protein sorting 35 gene(VPC35)の変異はPark17を引き起こすが、CRISPR/Cas9ゲノム編集によるVPS35 D620Nノックインマウスを用いて線条体でのドパミン放出が障害されていることを証明した。
145	Takehara H, Nagaoka A, Noguchi J, Akagi T, Kasai H, Ichiki T	Implantable Microfluidic Device with Hydrogel Permeable Membrane for Delivering Chemical Compounds and Imaging Neural Cells in Living Mice	J Photopolym Sci Technol. 29(4),513 – 518,05,2016	
146	Soshi T, Noda T, Ando K, Nakazawa K, Tsumura H, Okada T	Impulsivity is associated with early sensory inhibition in neurophysiological processing of affective sounds.	Frontiers in Psychiatry 6,141 – 141,10,2016	衝動性と無意識的な感覚入力処理(感覚抑制)の関係を事象関連電位を用いて、健常者で調べた。純音では衝動性と相関が見られなかったが、情動価の高い白色ノイズで相関が見られ、情動音声刺激が衝動性評価に有効であることが示唆された。
147	Dai H, Goto Y, Itoh M	Insulin-like Growth Factor Binding Protein-3 Deficiency Leads to Behavior Impairment with Monoaminergic and Synaptic Dysfunction	Am J Pathol 187(2),390 – 400,01,2017	レット症候群原因遺伝子MECP2の下流遺伝子IGFBP3の欠損マウスを作成し、形態学的、分子生物学的解析を行った。その結果、シナプス形成の遅れと行動障害を呈した。レット症候群の病態の一因を解明した。
148	Iwata Y, Jono Y, Mizusawa H, Kinoshita A, Hiraoka K.	Interhemispheric Inhibition Induced by Transcranial Magnetic Stimulation Over Primary Sensory Cortex.	Front Hum Neurosci. 08,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
149	Maruo K, Yamaguchi Y, Noma H, Goshio M	Interpretable inference on the mixed effect model with the Box-Cox transformation.	Statistics in medicine Early View,03,2017	ランダム化比較試験において繰り返し測定される検査項目の最終観測値を主要評価項目とした場合に用いられる一般的な方法は、正規分布に基づくMMRM法である。しかし、データの形状が歪んでいる場合には効率の低下が懸念される。我々は、Box-Cox変換を用いた混合効果モデルの周辺モデルのパラメータ推測に関する漸近的結果を導出し、モデル誤特定を考慮したパラメータの最尤推定量のロバスト分散推定量を導出した。さらにこれらの結果に基づき、特定の時点におけるモデル中央値の群間差の推測法を開発した。シミュレーション及び事例検討に基づき、開発したモデル中央値の群間差の推測法が治療効果の解釈のしやすさと検出力の高さのいずれをも兼ね備えていることを示した。
150	Sumida K, Sato N, Ota M, Sakai K, Sone D, Yokoyama K, Kimura Y, Maikusa N, Imabayashi E, Matsuda H, Kunimatsu A, Ohtomo K.	Intraventricular temperature measured by diffusion-weighted imaging compared with brain parenchymal temperature measured by MRS in vivo.	NMR Biomed 29(7),890 - 895,07,2016	健康な被験者の鼓膜温度(Tt)を参照して、MRIを用いて脳室内脳脊髄液(Tv)と脳実質(Tp)の温度を調べ、比較した。35人の健康なボランティア(男性17人、女性18人、25-78歳)におけるMR拡散強調画像(DWI)およびMRSによって同時に収集されたデータからTvおよびTp値を推定した。また、各MR検査の直前にTt値を得て、3つの温度間の関係を評価した。TvとTpの間には有意な正の相関があった( $R = 0.611, p < 0.001$ )。相関はTtの補正後も有意であった( $R = 0.642, p < 0.001$ )。男性または女性のTvとTt、またはTpとTtの間に有意な相関はなかった。男性ではTvと年齢、Tpと年齢の間に負の相関がみられたが、女性では見られなかった。DWI体温計はMRS体温計と同じくらい正確に頭蓋内環境を反映している。おそらく加齢に伴う脳代謝の減少のために、年齢に依存した体温の低下が、DWIおよびMRS体温測定の両方によって男性被験者において明らかとなった。
151	Hirose N, Saitoh A, Kamei J	Involvement of glutamatergic N-methyl-d-aspartate receptors in the expression of increased head-dipping behaviors in the hole-board tests of olfactory bulbectomized mice.	Behav Brain Res 312,313 - 320,10,2016	嗅球摘出マウスは、ホールボード試験において、偽手術マウスと比較して、Head-dipping 行動の有意な増加を示した。嗅球摘出マウスで認められたHead-dipping 行動の増加は、興奮性グルタミン酸神経 NMDA 受容体の選択的拮抗薬であるMK-801により有意に抑制された。したがって、嗅球摘出マウスのHead-dipping行動の増加に、興奮性グルタミン酸神経 NMDA 受容体の関与が示唆された。
152	Ito, M., Okumura, Y., Horikoshi, M., Kato, N., Oe, Y., Miyamae, M., . . . Ono, Y.	Japan Unified Protocol Clinical Trial for Depressive and Anxiety Disorders (JUNP study): study protocol for a randomized controlled trial.	BMC Psychiatry 16(1),1 - 15,04,2016	本論文は、現在進行している、うつ病と不安症に対する認知行動療法の統一プロトコルのランダム化比較試験についてのプロトコル論文である。本臨床試験の意義、方法が具体的に記載されている。
153	Takayama K, Mitsuhashi S, Shin JY, Tanaka R, Fujii T, Tsuburaya R, Mukaida S, Noguchi S, Nonaka I, Nishino I	Japanese multiple epidermal growth factor 10 (MEGF10) myopathy with novel mutations: A phenotype-genotype correlation	NEUROMUSCULAR DISORDERS 26(9),604 - 609,09,2016	Multiple epidermal growth factor-like domains (MEGF10) 遺伝子の変異は、重症な腱反射消失、呼吸障害、嚥下障害を伴う早期発症型ミオパチー (EMARDD) と、比較的軽症なミニコアミオパチーの二つの表現型が報告されている。我々は、日本人患者でMEGF10遺伝子の変異によるEMARDDとミニコアミオパチーをそれぞれ発見し、遺伝子型と表現型の相関について考察を行った。これは、東アジアで初めてのMEGF10ミオパチーの報告である。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
154	Takayama K, Mitsuhashi S, Shin JY, Tanaka R, Fujii T, Tsuburaya R, Mukaida S, Noguchi S, Nonaka I, Nishino I	Japanese multiple epidermal growth factor 10 (MEGF10) myopathy with novel mutations: A phenotype-genotype correlation	NEUROMUSCULAR DISORDERS 26(9),604 - 609,09,2016	Multiple epidermal growth factor-like domains (MEGF10) 遺伝子の変異は、重症な腱反射消失、呼吸障害、嚥下障害を伴う早期発症型ミオパチー (EMARDD) と、比較的軽症なミニコアミオパチーの二つの表現型が報告されている。我々は、日本人患者で MEGF10 遺伝子の変異による EMARDD とミニコアミオパチーをそれぞれ発見し、遺伝子型と表現型の相関について考察を行った。これは、東アジアで初めての MEGF10 ミオパチーの報告である。
155	Masato Toyoshima, Yoshihiro Kaneko, Yutaka Motohashi	Leisure-time activities and psychological distress in a suburban community in Japan	Preventive Medicine Reports 4,1 - 5,12,2016	
156	Koike S, Yamaguchi S, Ojio Y, Shimada T, Watanabe KI, Ando S	Long-term effect of a name change for schizophrenia on reducing stigma	Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology 50(10),1519 - 1526,05,2016	本研究は、1985年-2013年までの4大新聞とNHKの記事における精神疾患に関する記事について検証した。2,316万9,092記事の見出しにおける検索において、5万1,789記事(4大新聞)と1,106記事(NHK)が精神疾患についての記事であった。テキストマイニング分析の結果、統合失調症に関する記事は他の疾患(うつ病や糖尿病)に関する記事と比較し、より否定的なワードが含まれやすい傾向にあった。
157	Goto M, Komaki H, Takeshita E, Abe Y, Ishiyama A, Sugai K, Sasaki M, Goto YI, Nonaka I.	Long-term outcomes of steroid therapy for Duchenne muscular dystrophy in Japan.	Brain Dev 38(9),785 - 791,10,2016	Duchenne型筋ジストロフィー (DMD) 患者のステロイド療法について、我が国では大規模な研究データはあまりない。後方視的にDMD多数例でステロイドの投与方法による効果と副作用の違いを調べた重要な研究である。
158	Mizuguchi Yuki, Hatakeyama Hideyuki, Sueoka Kou, Tanaka Mamoru, Goto Yu-Ichi	Low dose resveratrol ameliorates mitochondrial respiratory dysfunction and enhances cellular reprogramming.	Mitochondrion 01,2017	
159	Hyzewicz J, Tanihata J, Kuraoka M, Nitahara-Kasahara Y, Beylier T, Ruegg UT, Vater A, Takeda S	Low-Intensity Training and the C5a Complement Antagonist NOX-D21 Rescue the mdx Phenotype through Modulation of Inflammation.	Am J Pathol. 03,2017	デュシェンヌ型筋ジストロフィー (DMD) モデルのmdxマウスの骨格筋では、アナフィラトキシンである補体C5aの発現が上昇しており、軽い運動負荷あるいはC5aの拮抗剤NOX-D21投与は、いずれも骨格筋における chemokine ligand (CCL) 2発現レベルを低下させ、CD68陽性マクロファージ数の増加とM2マクロファージへの分化を促した。軽い運動負荷とNOX-D21は、抗炎症作用によりDMDの治療法になり得る。
160	Aizawa S, Contu VR, Fujiwara Y, Hase K, Kikuchi H, Kabuta C, Wada K, Kabuta T	Lysosomal membrane protein SIDT2 mediates the direct uptake of DNA by lysosomes	Autophagy 13(1),218 - 222,01,2017	以前私達は、新しいオートファジーシステムとしてRNautophagyおよびDNautophagyを見いだした。これらは、ATP依存的に直接RNAおよびDNAをリソソーム内に取り込み、分解する経路である。また、最近の論文で私達は、SIDT2がリソソームへのRNAの取り込みを仲介することを報告した。今回の研究では、SIDT2がリソソームへのDNAの取り込みも仲介することを明らかにした。
161	Hatanaka Y, Wada K, Kabuta T	Maternal high-fat diet leads to persistent synaptic instability in mouse offspring via oxidative stress during lactation	Neurochem Int. 97,99 - 108,07,2016	妊娠母体の肥満が産仔のシナプス発達に及ぼす影響を明らかにするため、高脂肪食を妊娠前から母マウスに投与し、肥満妊娠母マウスを作成した。仔マウスに関しては離乳後に通常食に戻した。仔マウスの解析の結果、コントロール群と比較して脳内シナプス形成や動態が異常であり未成熟であった。このように、妊娠母体の肥満は産仔のシナプス発達に成年まで持続的な悪影響を及ぼすことを初めて明らかにした。



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
162	Deguchi Y, Harada M, Shinohara R, Lazarus M, Cherasse Y, Urade Y, Yamada D, Sekiguchi M, Watanabe D, Furuyashiki T, Narumiya S	mDia and ROCK mediate actin-dependent presynaptic remodeling regulating synaptic efficacy and anxiety	Cell Rep, 17,2405 – 2417,11,2016	マウスの隔離飼育による不安の亢進に、腹側被外野のプレシナプス構造変化が関与することを示した。このプレシナプス構造の変化はmDiaやROCKといったアクチンネットワークの修飾分子を介して行われることが示された。
163	Suto M, Kita Y, Suzuki K, Inagaki I, Misago C	Mental health inventory for infants: Scale development and Japanese infants' characteristics	Journal of Child and Family Studies 03,2017	幼児の精神健康問題への早期対応は重要な課題である。この研究は、幼児のメンタルヘルスを把握するための適切な尺度の開発を目的とした。対象者は、2～6歳の幼児の主たる養育者で、24の項目を含む子どものメンタルヘルスに関する質問票に回答した。探索的因子分析と検証的因子分析を行い、Irritability(8項目)、somatic symptoms(6項目)、signs of insecurity(4項目)の3つの因子からなる尺度が特定された。
164	Koike S, Yamaguchi S, Ohta K, Ojio Y, Watanabe KI, Ando S	Mental health-related stigma among Japanese children and their parents and impact of renaming of schizophrenia	Psychiatry and Clinical Neurosciences 71(3),170 – 179,03,2017	本研究は東京都の20大学からリクルートした学生とその家族(主に母親が回答)を対象に、精神障害者に対するスティグマの程度を検証することを目的とした。調査の結果、大学生の家族は、大学生本人よりも、より統合失調症に対してより否定的な態度を持っていた。また、家族と大学生のスティグマの程度は相関していることを明らかにしていた
165	Fujii T, Hattori K, Miyakawa T, Ohashi Y, Sato H, Kunugi H	Metabolic profile alterations in the postmortem brains of patients with schizophrenia using capillary electrophoresis-mass spectrometry.	Schizophr Res pii: S0920-9964 (16),30504 – 30507,11,2016	
166	Nakajima Kazuyuki, Kanamatsu Tomoyuki, Koshimoto Maasa, Kohsaka Shinichi	Microglia derived from the axotomized adult rat facial nucleus uptake glutamate and metabolize it to glutamine in?vitro.	Neurochemistry international 102,1 – 12,01,2017	
167	Mathews Anitha, Ohsawa Keiko, Buckland Michael E, Kesavadas Chandrasekharan, Ratheesan Kuttan, Kusumakumary Parukuttyamma, Burger Peter C, Kohsaka Shinichi, Graeber Manuel B	Microglioma in a child – a further case in support of the microglioma entity and distinction from histiocytic sarcoma.	Clinical neuropathology 35(5),302 – 13,09,2016	
168	Iwama K, Sasaki M, Hirabayashi S, Ohba C, Iwabuchi E, Miyatake S, Nakashima M, Miyake N, Ito S, Saito H, Matsumoto N.	Milder progressive cerebellar atrophy caused by biallelic SEPSECS mutations.	J Hum Genet 61(6),527 – 531,06,2016	セレノスチン転移RNA合成酵素遺伝子(SEPSECS)の変異により軽症進行性小脳萎縮が引き起こされることを発見した。
169	Zhu W, Mitsuhashi S, Yonekawa T, Noguchi S, Huei JCY, Nalini A, Preethish-Kumar V, Yamamoto M, Murakata K, Mori-Yoshimura M, Kamada S, Yahikozawa H, Karasawa M, Kimura S, Yamashita F, Nishino I	Missing genetic variations in GNE myopathy: rearrangement hotspots encompassing 5' UTR and founder allele	JOURNAL OF HUMAN GENETICS 62(2),159 – 166,02,2017	DMRV患者さんの多くは、GNE遺伝子の、両方のアリルに遺伝子変異を持つことが知られていますが、通常のシーケンス法では一つしか変異が見つからないことがあります。これらの患者さんで、次世代シーケンサーを用いた詳細な解析をすることにより、もう一方のアリルに、GNE遺伝子内の大きな欠失が高率に見つかることを見いだしました。さらに興味深いことに、欠失断端の配列解析により、これらの欠失が、レトロトランスポゾン由来のAlu配列によって起きている可能性を指摘しました。Alu配列は全ゲノムの10%程度を占めるといわれておりますが、他の病気でも、ゲノム内の大きな欠失の原因となることが、報告されてきております。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
170	Zhu W, Mitsuhashi S, Yonekawa T, Noguchi S, Huei JCY, Nalini A, Preethish-Kumar V, Yamamoto M, Murakata K, Mori-Yoshimura M, Kamada S, Yahikozawa H, Karasawa M, Kimura S, Yamashita F, Nishino I	Missing genetic variations in GNE myopathy: rearrangement hotspots encompassing 5' UTR and founder allele	JOURNAL OF HUMAN GENETICS 62(2),159 - 166,02,2017	DMRV患者さんの多くは、GNE遺伝子の、両方のアレルに遺伝子変異を持つことが知られていますが、通常のシーケンス法では一つしか変異が見つからないことがあります。これらの患者さんで、次世代シーケンサーを用いた詳細な解析をすることにより、もう一方のアレルに、GNE遺伝子内の大きな欠失が高率に見つかることを見いだしました。さらに興味深いことに、欠失断端の配列解析により、これらの欠失が、レトロトランスポゾン由来のAlu配列によって起きている可能性を指摘しました。Alu配列は全ゲノムの10%程度を占めるといわれておりますが、他の病気でも、ゲノム内の大きな欠失の原因となることが、報告されてきております。
171	Vila MC, Rayavarapu S, Hogarth MW, Van der Meulen JH, Horn A, Defour A, Takeda S, Brown KJ, Hathout Y, Nagaraju K, Jaiswal JK	Mitochondria mediate cell membrane repair and contribute to Duchenne muscular dystrophy.	Cell Death Differ. 1 - 13,11,2016	Duchenne型筋ジストロフィーモデルであるmdxおよびmdx52マウスを対象に、ジストロフィン欠損筋のミトコンドリア機能異常は、細胞膜修復機構の破綻とジスフェルリンが介在する膜修復機構の代償的促進につながることを解明した。更に、mdxマウスを対象にエクソン・スキップを誘導し、細胞膜のジストロフィン発現を部分的に回復させると、ミトコンドリア機能は回復し、細胞膜修復機構も回復する可能性があることを示した。
172	Yokota M, Hatakeyama H, Ono Y, Kanazawa M, Goto Y.	Mitochondrial respiratory dysfunction disturbs neuronal and cardiac lineage commitment of human iPSCs.	Cell Death Dis 8,e2551 - ,02,2017	ミトコンドリアDNAの代表的な病的変異であるm.3243A>G変異を持つ患者由来の線維芽細胞からiPS細胞を作製し、神経細胞と心筋細胞への分化誘導を行い、変異率と誘導効率とを検討した。変異率の高い(90%以上の)iPS細胞は分化が阻害されるとともに、細胞死が誘導されることを示した。
173	Yamada D, Wada K, Sekiguchi M	Modulation of Long-Term Potentiation of Cortico-Amygdala Synaptic Responses and Auditory Fear Memory by Dietary Polyunsaturated Fatty Acid	Front Behav Neurosci 23(10),164 - 164,08,2016	オプトジェネティクスを用いて皮質?扁桃体経路のシナプス伝達を単離し(マウス)、このシナプス伝達の可塑的変化(LTP)が餌の不飽和脂肪酸構成により修飾されることを示した。不飽和脂肪酸による脳機能修飾に関わるメカニズムのひとつを提示する論文である
174	Otani, Y., Watanabe, S., Ohwada, T., Kitao, A.	Molecular dynamics study of nitrogen-pyramidalized bicyclic $\beta$ -proline oligomers. Length-dependent convergence to organized structures.	J. Phys. Chem. B 121(1),100 - 109,01,2017	プロリン型の2環性アミノ酸から構成されるペプチドについて、溶液中での構造解析を行い、これが長さ依存的に安定な構造をとることを明らかにした。
175	Ishiura H, Takahashi Y, Hayashi T, Saito K, Furuya H, Watanabe M, Murata M, Suzuki M, Sugiura A, Sawai S, Shibuya K, Ueda N, Ichikawa Y, Kanazawa I, Goto J, Tsuji S.	Molecular epidemiology and clinical spectrum of hereditary spastic paraplegia in the Japanese population based on comprehensive mutational analyses.	J Hum Genet. 61(4),363 - 364,04,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
176	Suzuki N, Mori-Yoshimura M, Yamashita S, Nakano S, Murata KY, Inamori Y, Matsui N, Kimura E, Kusaka H, Kondo T, Higuchi I, Kaji R, Tateyama M, Izumi R, Ono H, Kato M, Warita H, Takahashi T, Nishino I, Aoki M	Multicenter questionnaire survey for sporadic inclusion body myositis in Japan	ORPHANET JOURNAL OF RARE DISEASES 11(1),146 - 146,11,2016	<p>孤発性封入体筋炎(sIBM)は高齢患者の筋疾患で、最も一般的な疾患である。</p> <p>sIBMは、原因不明で治療抵抗性の難治性疾患である。病因はまだはっきりしていないが、遺伝素因、年齢、ライフスタイル、環境要因が関与している可能性がある。日本のsIBM患者の横断的調査を行い、その概観を明らかにする。</p> <p>多施設で診断された、146名の日本人患者のデータを集めた。さらに自然歴を詳細に調べるため、67名の患者または介護者にアンケート調査を行った。発症年齢は63.4±9.2歳で、発症から診断までの期間は、55.52±49.72ヶ月であった。これは疾患が治療に難渋し、診断するまでに時間がかかるためであると示唆される。73%はこの疾患に対する精神面の不安を訴えた。最も多い初期の介護者は配偶者で、57%の患者が金銭面の不安を訴えていた。これは高年齢の疾患であることが原因として考えられ、西洋諸国と同様のプロフィールを呈していると考えられた。</p>
177	Nichols B, Aoki Y, Kuraoka M, Lee JJ, Takeda S, Yokota T	Multi-exon Skipping Using Cocktail Antisense Oligonucleotides in the Canine X-linked Muscular Dystrophy.	J Vis Exp. 24(111),1 - 15,05,2016	<p>国立精神・神経医療研究センターは、世界有数のDuchenne型筋ジストロフィーモデル犬(筋ジス犬)コロニーの維持・管理をしている。本論文では、当センターで確立済の、筋ジス犬由来の初代細胞を用いたアンチセンス核酸のトランスフェクション実験、筋ジス犬を対象にした疼痛管理法・麻酔法・筋生検、細胞や骨格筋回収後の分子生物学的解析プロトコール等について、ビデオ形式で詳細に解説をした。</p> <p>Video Article</p>
178	Tomatsu S, Kim G, Confais J, Seki K	Muscle afferent excitability testing in spinal root-intact rats: Dissociating peripheral afferent and efferent volleys generated by intraspinal microstimulation	Journal of Neurophysiology 12,2016	
179	Noguchi S, Ogawa M, Malicdan MC, Nonaka I, Nishino I	Muscle Weakness and Fibrosis Due to Cell Autonomous and Non-cell Autonomous Events in Collagen VI Deficient Congenital Muscular Dystrophy	EBIOMEDICINE 15(2017),193 - 202,02,2017	<p>VI型コラーゲン欠損先天性筋ジストロフィーのモデルマウスを用いて病態の解明を行った。病態形成には以下の2つのイベントがあることがわかった。1つは、間質のVI型コラーゲンの欠損による生後発達期での筋線維の成長にともなう筋線維数増加での障害であり、筋線維数が増加できないために小さな骨格筋となっていた。もう1つは、VI型コラーゲンを産生する間質前駆細胞依存的な間質の線維化であった。さらに、人工的に間質前駆細胞を活性化すると、その形状はより変化し、線維化は著しく亢進した。以上の結果は、この疾患の病態形成には、VI型コラーゲンを産生する間質前駆細胞が極めて重要な働きをすることが示唆された。</p>
180	Van den Boogaard ML, Lemmers RJ, Balog J, Wohlgemuth M, Auranen M, Mitsuhashi S, van der Vliet PJ, Straasheijm KR, van den Akker RF, Kriek M, Laurence-Bik ME, Raz V, van Ostaijen-Ten, Dam MM, Hansson KB, van der Kooi EL, Kiuru-Enari S, Udd B, van Tol MJ, Nishino I, Tawil R, Tapscott SJ, van Engelen BG, van der Maarel SM	Mutations in DNMT3B Modify Epigenetic Repression of the D4Z4 Repeat and the Penetrance of Facioscapulohumeral Dystrophy	THE AMERICAN JOURNAL OF HUMAN GENETICS 98(5),1020 - 1029,05,2016	<p>FSHD(顔面肩甲上腕型ジストロフィー)発症には、D4Z4塩基配列のリピート数と、D4Z4内にコードされているDUX4という遺伝子発現抑制因子が深く関わっている。リピート配列が1~10個に減少すること(FSHD1)、または、SMCHD1遺伝子変異によって体細胞上のDUX4に結合し遺伝子発現抑制効果が減弱すること(FSHD2)が原因と考えられている。</p> <p>本論文では、DNMT3B(DNAメチルトランスフェラーゼ3B)のヘテロ接合変異では、D4Z4リピート数を減少させ、DUX4の抑制効果の減弱に影響し、FSHDの浸透率を高めることに関与していることを示した。また、DUX4の転写は、エピジェネティックな要素によって修飾されていることが示唆された。</p>

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
181	Ueki J, Nakamori M, Nakamura M, Nishikawa M, Yoshida Y, Tanaka A, Morizane A, Kamon M, Araki T, Takahashi MP, Watanabe A, Inagaki N, Sakurai H.	Myotonic dystrophy type 1 patient-derived iPSCs for the investigation of CTG repeat instability.	Scientific Reports 7,42522 – ,02,2017	筋強直性ジストロフィー I 型患者検体から作成したiPS細胞、ならびにそこから分化させた神経細胞・骨格筋細胞・心筋細胞における疾患関連遺伝子 変異 (CTGリピート) の変化を詳細に検討し、iPS細胞としての継代数の増加に伴うゲノムDNA上のCTGリピートの不安定性の増大が観察されることを見出した。
182	Saida, T., J.I. Kira, S. Kishida, T. Yamamura, N. Ohtsuka, Q. Dong, and J.T. Tibung	Natalizumab for achieving relapse-free, T1 gadolinium-enhancing-lesion-free, and T2 lesion-free status in Japanese multiple sclerosis patients: A phase 2 trial subanalysis	Neurol Ther 2017,1 – 7,01,2017	MS治療薬ナタリズマブ承認の基礎となった国内フェーズ2試験について、そのサブ解析の結果をまとめたものである。
183	Itani O, Kaneita Y, Munezawa T, Mishima K, Jike M, Nakagome S, Tokiya M, Ohida T	Nationwide epidemiological study of insomnia in Japan	Sleep Med 25,130 – 138,11,2016	国民代表性のある疫学調査データ(国民健康・栄養調査)を用いて、日本人の不眠と過眠の有病率を試算した。不眠症の有病率は男性12.2%、女性14.6%であること、過眠の有病率は男性3.2%、女性4.2%であることが明らかになった。また、不眠症状の内訳に関する詳細なデータが得られた。今回のデータは国内の今後の睡眠医療の政策立案に資すると期待される。
184	Yoshimura A, Numakawa T, Odaka H, Adachi N, Tamai Y, Kunugi H.	Negative regulation of microRNA-132 in expression of synaptic proteins in neuronal differentiation of embryonic neural stem cells.	Neurochem Int 97,26 – 33,04,2016	In vitroにおいて、ラット胎児由来神経幹細胞からニューロンへと分化する際に発現上昇するmicroRNAの機能解析を行ない、miR-132のニューロン分化・成熟への関与を明らかとした。
185	Takahashi M., Fukuoka M., Yoshioka K., and Hohjoh H.	Neighbors' death is required for surviving human adenocarcinoma PC-9 cells in an early stage of gefitinib treatment.	BBRC 479,393 – 397,09,2016	薬剤耐性獲得の初期に起こる新規サイババルシステムの発見
186	Joachim Confais, Geehee Kim, Saeka Tomatsu, Tomohiko Takei and Kazuhiko Seki	Nerve-specific input modulation to spinal neurons during a motor task in the monkey	Journal of Neuroscience 2561 – 2616,02,2017	
187	Tomoyo Morita, Hirotaka Kosaka, Daisuke N. Saito, Takeshi Fujii, Makoto Ishitobi, Toshio Munesue, Keisuke Inohara, Hidehiko Okazawa, Ryusuke Kakigi, and Norihiro Sadato.	Neural correlates of emotion processing during observed self-face recognition in individuals with autism spectrum disorders.	Research in Autism Spectrum Disorders 26,16 – 32,06,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
188	Ohki T, Gunji A, Takei Y, Takahashi H, Kaneko Y, Kita Y, Hironaga N, Tobimatsu S, Kamio Y, Hanakawa T, Inagaki M, Hiraki K	Neural oscillations in the temporal pole for temporally congruent audio-visual speech detection task	Sci Rep 6,37973 - ,11,2016	「五感」という言葉が指し示すように、脳には特定の感覚情報にのみ反応する領域があります。しかしながら、私達の感覚情報は時に組み合わせられて処理されます。例えば、友人の声を聞けば、その顔が思い浮かべられるように、私達の脳は様々な情報をやりとりし、時に組み合わせることで私達は脳磁図と呼ばれる装置を使って、ヒトの発話とその発話に関わる口の動きを組み合わせる事によって、初めてその内容が理解出来る課題を作成し、この時の脳の働きを調べました。その結果、「側頭極部」と呼ばれる脳領域が重要な役割を果たしている事を明らかにしました。更に、側頭極部がどのような仕組みを使って、情報を組み合わせているのかを調べたところ、大小異なった2つの脳波のタイミングと大きさ(デルタ波の位相とベータ波の振幅)を一定に保つPhase-amplitude couplingという仕組みを用いている事が、私達の研究で初めて明らかになりました。この研究成果は、これまで明らかにならなかった「側頭極部」の働きとその情報統合の仕組みを明らかにした初めての知見と言えます。
189	Beheshti I, Maikusa N, Matsuda H, Demirel H, Anbarjafari G; Japanese-Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative.	Neuroimaging Initiative.Histogram-based feature extraction from individual gray matter similarity-matrix for Alzheimer's disease classification.	J Alzheimers Dis 55(4),1571 - 1582,12,2016	アルツハイマー病(AD)に罹患している患者の分類には、自動コンピュータ支援診断(CAD)システムが広く使用されている。本稿では、構造磁気共鳴イメージング(MRI)データを用いて健常対照(HC)からAD患者を分類するための、単一対象灰白質類似性マトリクスからのヒストグラム特徴抽出に基づく自動CADシステムを提示する。提案されたCADシステムは5段階で構成されている。第1段階では、MRI画像の前処理を行い、ボクセルベースの形態計測ツールボックス手順を使用して、灰白質、白質、脳脊髄液にセグメント化する。第2段階では、灰白質MRIスキャンを用いて類似性マトリクスを構築する。第3段階では、個々の類似度行列のヒストグラムを利用して、異なるサイズおよび順序のそれぞれの類似行列の統計的パターンを固定サイズの特徴ベクトルに表現する、新規な統計的特徴生成処理が提案される。第4段階では、分類精度を向上させるためにMRI測定と神経心理学的検査である機能評価アンケート(FAQ)を組み合わせることを提案する。最後に、サポートベクターマシンを用いて分類を行い、10倍交差検定戦略で評価する。我々はJ-ADNIの99人のAD患者と102人のHC被験者について提案された方法を評価した。提案されたCADシステムは、MRI測定を使用して84.07%の分類精度を、MRI測定値をFAQスコアと組み合わせるために97.01%をそれぞれもたらす。実験結果は、提案されたシステムの性能が文献で報告された最先端の技術に関して競争力があることを示している。
190	Soshi T, Hagiwara H	Non-economical verbal information processing driven by a "look-ahead" strategy under poor availability of structural information	Interdisciplinary Information Sciences 22,123 - 141,11,2016	語構造の情報が少ない状況で、予測機能がどのように働くかを調べた。情報が欠如している状況でも、脳は先読み処理を積極的に行っていることが持続性陰性活動の特異的な出現により分かった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
191	Sone D, Ota M, Yokoyama K, Sumida K, Kimura Y, Imabayashi E, Matsuda H, Sato N	Noninvasive evaluation of the correlation between regional cerebral blood flow and intraventricular brain temperature in temporal lobe epilepsy.	Magn Reson Imaging 34(4),451 - 454,05,2016	側頭葉てんかん(TLE)では、脳血流(CBF)と代謝の非連動が示されている。この研究の目的は、脳室内の脳を調べることによってこの関係を明らかにすることである。非侵襲的MRI技術を用いてTLE中の温度(BT)およびCBFを測定する。38人の左TLE、39人の右TLE患者に対して、拡散強調イメージング(DWI)および疑似連続動脈スピラベリング(pCASL)を含むMRI検査を施行した。脳室内BTをDWI温度測定技術により計算し、局所CBFをpCASLから得た統計的パラメトリックマッピングソフトウェア(SPM8)を用いてそれらの関係を分析した。左TLE群のみにおいて、左下前頭回におけるCBFとBTとの間に有意な負の相関があった。左TLE群において正の相関の傾向が両側の後頭極みられた。右TLEの患者は有意な相関を示さなかった。これらの結果はTLEが脳内で異なる代謝調節系を有することを示している。
192	Moriguchi Sho, Yamada Makiko, Takano Harumasa, Nagashima Tomohisa, Takahata Keisuke, Yokokawa Keita, Ito Takehito, Ishii Tatsuya, Kimura Yasuyuki, Zhang Ming-Rong, Mimura Masaru, Suhara Tetsuya	Norepinephrine Transporter in Major Depressive Disorder: A PET Study.	The American journal of psychiatry 174(1),36 - 41,01,2017	
193	Baba S, Saito T, Yamada Y, Takeshita E, Nomura N, Yamada K, Wakamatsu N, Sasaki M.	Novel mutation in HPRT1 causing a splicing error with multiple variations.	Nucleosides Nucleotides Nucleic Acids. 36(1),1 - 6,01,2017	Lesch-Nyhan症候群はX染色体劣性遺伝を示す疾患で、HPRT1遺伝子の様々な変異により発症することが知られている。しかし重複変異は少ない。本例はスプライスエラーを呈する重複変異が原因の本症候群3例目であった
194	Shimajima K, Maruyama K, Kikuchi M, Imai A, Inoue K, Yamamoto T	Novel SLC16A2 mutations in patients with Allan-Herndon-Dudley syndrome.	Intractable Rare Dis Res 5(3),214 - 217,08,2016	2家系のAllan-Herndon-Dudley症候群の家系に新規のSLC16A2変異をそれぞれ見出した。
195	Termglinchan T, Hisamatsu S, Ohmori J, Suzumura H, Sumitomo N, Imataka G, Arisaka O, Murakami N, Minami N, Ishiyama A, Sasaki M, Goto Y, Noguchi S, Nonaka I, Mitsuhashi S, Nishino I	Novel TK2 mutations as a cause of delayed muscle maturation in mtDNA depletion syndrome	NEUROLOGY GENETICS 2 (5),e95 - e95,10,2016	乳児期早期に重度のミオパチーを発症するミトコンドリア枯渇症候群は、TK2遺伝子変異の劣性遺伝によって生じる。近年の報告では、ミトコンドリア脳筋症を含む、より幅広いスペクトラムが示唆されている。 乳児期発症のミトコンドリア脳筋症で、筋が著明に未発達な症例を経験したので報告する。 症例は、日本人の女児で、出生後すぐに、けいれんと呼吸不全を認め、抗てんかん薬を投与し、人工呼吸器管理を要した。低緊張と筋力低下を認め、生後2日のCK値は7709IU/Lだったが、血中乳酸値は正常であった。筋CTでは、全身の筋萎縮と脂肪置換を認めた。また、頭部CTでは、生後1か月の短期間に、著明な脳室拡大を伴った脳の急速な萎縮を認めた。生後10か月、うっ血性心不全にて、死亡した。 生後4か月時に施行した筋生検では、ほぼ全ての筋線維が直径4~6μmと著明に小さく、壊死・再生線維はなく、著明な筋束周囲の線維化を認めた。チトクロームCオキシダーゼ活性はびまん性に低下していた。電顕所見では、脂肪滴を含むミトコンドリアを多量に認め、高密度なヘテロクロマチンを持つ大きな衛星細胞を14%に認めた。 全エキソーム解析では、TK2遺伝子のイントロン1のc.125G>Cと、c.574A>G, p.P192Gの2つの新規の遺伝子変異を認めた。 これは、TK2遺伝子に関連した、ミトコンドリア脳筋症で筋の発達が著明に未発達である稀な症例であり、この疾患の幅広いスペクトラムが示唆された。TK2遺伝子変異を持つMDSは、急速に進行する脳萎縮と骨格筋の成熟遅延が特徴であることが示された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
196	Matsubara S, Shimizu T, Komori T, Mori-Yoshimura M, Minami N, Hayashi YK	Nuclear inclusions mimicking poly (A)-binding protein nuclear 1 inclusions in a case of inclusion body myopathy associated with Paget disease of bone and frontotemporal dementia with a novel mutation in the valosin-containing protein gene	NEUROMUSCULAR DISORDERS 26(7),436 - 440,07,2016	骨パジェット病および前頭側頭型痴呆を伴う封入体ミオパチー (IBMPFD) であるにも関わらず、眼咽頭型筋ジストロフィー (OPMD) に特有な核内封入体が存在する症例を報告した。常染色体優性遺伝を示唆する家族歴があり、緩徐進行性で非対称な四肢遠位筋力低下を示し、眼瞼下垂や嚥下障害はない。筋病理では、神経原性萎縮とミオパチーの混合所見を示し、縁取り空胞が見られた。核内封入体はOPMD特有なものに類似する微細構造を持ち、免疫染色でPABPN1タンパク質陽性であった。臨床的特徴と遺伝子解析からOPMDが否定される一方、VCPタンパク質に c.376A> T (p.Ile126Phe) 変異が見つかった。
197	Nishi D, Su KP, Usuda K, Chiang YJ, Guu TW, Hamazaki K, Nakaya N, Sone T, Sano Y, Ito H, Isaka K, Hashimoto K, Hamazaki T, Matsuoka YJ	Omega-3 fatty acid supplementation for expectant mothers with depressive symptoms in Japan and Taiwan: an open-label trial	Psychiatry and Clinical Neurosciences 70(6),253 - 254,06,2016	妊娠中の抑うつ症状に対するオメガ3系脂肪酸の安全性と潜在的有効性を評価するオープン研究をわが国で初めて実施した。日本8人、台湾5人、計13人の妊婦が研究に参加し、主要評価項目であるHamilton's Rating Scale for Depressionの得点は、介入前の平均12.1点 (SD 3.7)と比較して介入12週後は平均4.8点 (SD 4.9)と有意に低下していた。安全性に関してもオメガ3系脂肪酸に起因する重篤な有害事象はなく、すべての研究参加者が無事に出産した。食事からのオメガ3系脂肪酸の摂取量が諸外国より多いわが国においても、オメガ3系脂肪酸がうつ病・うつ症状に対して有効である可能性が初めて示唆された。
198	Yamamura T, Ashtamker N, Ladkani D, Fukazawa T, Houzen H, Tanaka M, Miura T, and Knappertz V	Once-daily glatiramer acetate decreases MRI disease activity in Japanese patients with relapsing-remitting multiple sclerosis.	Clin Exp Neuroimmunol 03,2017	
199	Hashimoto R, Hori K, Owa T, Miyashita S, Dewa K, Masuyama N, Sakai K, Hayase Y, Seto Y, Inoue YU, Inoue T, Ichinohe N, Kawaguchi Y, Akiyama H, Koizumi S, Hoshino M	Origins of oligodendrocytes in the cerebellum, whose development is controlled by the transcription factor, Sox9	Mechanism of Development 140,25 - 40,05,2016	マウス小脳におけるオリゴデンドロサイトの発生源をSox9遺伝子機能に沿って明確にした。
200	Kosaka H, Okamoto Y, Munesue T, Yamasue H, Inohara K, Fujioka T, Anme T, Orisaka M, Ishitobi M, Jung M, Fujisawa TX, Tanaka S, Arai S, Asano M, Saito DN, Sadato N, Tomoda A, Omori M, Sato M, Okazawa H, Higashida H, Wada Y.	Oxytocin efficacy is modulated by dosage and oxytocin receptor genotype in young adults with high-functioning autism: a 24-week randomized clinical trial.	Transl Psychiatry 23(6),872 - 08,2016	オキシトシン受容体の遺伝的背景がオキシトシン投与量による効果に影響を与えるか、高機能自閉スペクトラム症の若年成人を対象に予備的な無作為化二重盲検プラセボ対照並行群間臨床試験を行った。60名を鼻腔内投与オキシトシンの量で無作為に割り付け、オキシトシン受容体遺伝子 (OXTR) の一塩基多型 (SNP) を測定した。1日あたりのオキシトシン投与量が21IU以上では21IU以下より有効であり、21IU以下の投与ではOXTRのSNPが臨床全般印象改善度スコアを予測することを見出した。オキシトシンの有効性は、オキシトシン投与量及びオキシトシン受容体の遺伝的背景に依存することを示唆する。(267文字)
201	Risa Niwayama MA, Shota Nishitani PhD, Tsunehiko Takamura PhD, Kazuyuki Shinohara MD, PhD, Sumihisa Honda PhD, Tsunetake Miyamura MD, PhD, Yuko Nakao PhD, Kazuyo Ooishi PhD, Miyuki Araki-Nagahashi PhD	Oxytocin Mediates a Calming Effect on Postpartum Mood in Primiparous Mothers	Breastfeeding Medicine 103 - 109,01,2017	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
202	Liang WC, Uruha A, Suzuki S, Murakami N, Takeshita E, Chen WZ, Jong YJ, Endo Y, Komaki H, Fujii T, Kawano Y, Mori-Yoshimura M, Oya Y, Xi J, Zhu W, Zhao C, Watanabe Y, Ikemoto K, Nishikawa A, Hamanaka K, Mitsuhashi S, Suzuki N, Nishino I	Pediatric necrotizing myopathy associated with anti-3-hydroxy-3-methylglutaryl-coenzyme A reductase antibodies	RHEUMATOLOGY 56(2),287 - 293,02,2017	抗3-ヒドロキシ-3-メチルグルタリルCoA還元酵素抗体(抗HMGCR抗体)は自己免疫介在性壊死性ミオパチー(IMNM)の病因自己抗体の一つである。当初、高脂血症治療薬であるスタチン製剤との関連が注目され、抗HMGCR抗体陽性IMNMの報告は成人症例にほぼ限られ、小児例の実態は明らかでなかった。本研究は小児抗HMGCR抗体陽性IMNMの臨床・病理学的特徴を明らかにすることを目的に行われた。2010 - 2015年に筋炎統合的診断研究プロジェクトに登録された炎症性筋疾患疑いの小児患者62例において抗HMGCR抗体を解析し、同抗体は9例(15%)で検出された。これら9例のうち5例は慢性的な臨床経過をたどり、筋ジストロフィーと暫定診断されていた。筋病理学的にも半数の症例で筋ジストロフィー様の中等度ないし高度の筋内鞘線維化と脂肪浸潤を伴う壊死・再生像が観察された。治療に関しては、副腎皮質ステロイド薬や免疫抑制剤、免疫グロブリンなどが使用され、特に発症早期に治療を開始した症例でより良好な反応が見られる傾向があった。本研究で抗HMGCR抗体陽性IMNMの小児例は少なからず存在することが示された。また臨床病理学的に筋ジストロフィーと類似する点がある一方、IMNMには免疫修飾療法の有効性が見込まれるため、筋炎が鑑別診断として第一に考えられる患者だけでなく、小児期発症の病因未確定の筋ジストロフィー疑い患者においても、抗HMGCR抗体を含む自己抗体測定を積極的に行うことが望ましいと考えられた。
203	Uruha A, Suzuki S, Suzuki N, Nishino I	Perifascicular necrosis in anti-synthetase syndrome beyond anti-Jo-1	BRAIN 139(Pt 9),e50 - e50,09,2016	Mescam-Manciniらは「perifascicular necrosis」という筋病理所見が抗Jo-1抗体を伴う筋炎に特徴的に観られることをBrain誌上に報告した。しかしこの報告では抗Jo-1抗体以外の抗ARS抗体でもperifascicular necrosisが観られるかどうかは検討されていなかった。そこで我々は、抗Jo-1抗体以外の抗ARS抗体陽性症例を含めたコホートで解析を行い、perifascicular necrosisが抗Jo-1抗体のみならず他の抗ARS抗体にも共通して観られる筋病理所見であることを追加報告した。近年、抗ARS抗体を伴う筋炎は、多発筋炎や皮膚筋炎とは異なる病態を有することが示唆されているが、我々の報告はその考えを支持するものである。
204	Nishi D, Suzuki Y, Nishida J, Mishima K, Yamanouchi Y.	Personal lifestyle as a resource for work engagement	Journal of Occupational Health 59(1),17 - 23,01,2017	健診機関で特定健診を受診した者のなかで仕事に就いていた592人を対象として、生活習慣とワーク・エンゲイジメントとの関連を調べた。重回帰分析の結果、魚の摂取頻度が高いこと、日常生活において歩行又は同等の身体活動を1日1時間以上実施していること、睡眠で休養が十分取れていること、習慣的に喫煙をしていないことがワーク・エンゲイジメントと関連しており、魚の摂取頻度とワーク・エンゲイジメントの間には量反応関係が認められた。生活習慣が、疾病予防や健康増進だけでなく、労働生産性にも寄与している可能性が示唆された。
205	Asai M, Kinjo A, Kimura S, Mori R, Kawakubo T, Shirota K, Yagishita S, Maruyama K, Iwata N.	Perturbed Calcineurin-NFAT Signaling Is Associated with the Development of Alzheimer's Disease.	Biol Pharm Bull. 39(10),1646 - 1652,10,2016	ダウン症は第21番染色体のトリソミーによって起きる。第21番染色体上に存在するDYRK1AおよびRCAN1の過剰発現に依って、カルシニューリン?NFATシグナリングが活性化することが知られている。本研究では、カルシニューリン?NFATシグナリングとアルツハイマー病との関係を神経系細胞を用いて調べた。その結果、短期間の薬理的なこの経路の刺激により、タウおよびネプリライシンの発現が減少した。一方、長期的な投与によって、アミロイド前駆体タンパク質が減少した。さらに、カルシニューリン阻害剤によって、ネプリライシンの活性が下がり、アミロイドβタンパク質が増加した。これらのことから、カルシニューリン?NFATシグナリングがアルツハイマー病の発症に関与していると考察された。



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
206	Moriguchi Sho, Kimura Yasuyuki, Ichise Masanori, Arakawa Ryosuke, Takano Harumasa, Seki Chie, Ikoma Yoko, Takahata Keisuke, Nagashima Tomohisa, Yamada Makiko, Mimura Masaru, Suhara Tetsuya	PET quantification of the norepinephrine transporter in human brain with (S,S)-18F-FMeNER-D2.	Journal of nuclear medicine : official publication, Society of Nuclear Medicine 12,2016	
207	Watanabe, S., Hirono, M.	Phase-dependent modulation of oscillatory phase and synchrony by long-lasting depolarizing inputs in central neurons.	eNeuro 3(5),10,2016	周期的に発火しているニューロンにおいて、長く持続するシナプス入力位相依存性の応答特性を生じることを明らかにした。また感覚情報処理を担う神経回路が、特定の応答を引き起こす位相の入力を選択する働きを持つことを示した。
208	Inada S, Yoshiuchi K, Iizuka Y, Ohashi K, Kikuchi H, Yamamoto Y, Kadowaki T, Akabayashi A	Pilot Study for the Development of a Self-Care System for Type 2 Diabetes Patients Using a Personal Digital Assistant (PDA)	International Journal of Behavioral Medicine 23(3),295 - 299,06,2016	本研究は、新規開発した携帯情報端末によるセルフケアシステムの2型糖尿病患者における実用可能性・許容性を検討することが第1の目的であり、また本システムを6か月使用後の摂取カロリー量、体重、HbA1cの変化を検討することを第2の目的とした。対象は2型糖尿病患者9名(34~72歳)であり、セルフケアシステムにより食事記録を行い、グラフ化される毎日のエネルギー摂取量を見て各自の目標値以下になるよう食事摂取を調整するよう教示した。6か月間の使用後、食事記録のアドヒアランスにより実用可能性を、また6件法(1最も悪い~6最もよい)による自己評価により許容性を評価した。研究期間を完遂したのは9名中7名であり、アドヒアランスの中央値は80.6%であった。許容性は7名中6名が6、1名が5と回答した。ただし摂取カロリー量、体重、HbA1cは有意な変化を認めなかった。以上から新規開発されたセルフケアシステムは糖尿病患者で実用可能かつ許容されるものであろうと考えられた。
209	Daiki Setoyama, Takahiro A. Kato*, Ryota Hashimoto, Hiroshi Kunugi, Kotaro Hattori, Kohei Hayakawa, Mina Sato-Kasai, Norihiro Shimokawa, Sachie Kaneko, Sumiko Yoshida, Yu-ichi Goto, Yuka Yasuda, Hidenaga Yamamori, Masahiro Ohgidani, Noriaki Sagata, Daisuke Miura, Dongchon Kang, Shigenobu Kanba	Plasma metabolites predict severity of depression and suicidal ideation in psychiatric patients-A multicenter pilot analysis	PLOS ONE 11(12),12,2016	血中代謝物と抑うつ重症度(HAM-DおよびPHQ-9の値)の相関を調べたところ、抑うつ重症度に関連する血中代謝物を20種類同定することに成功した。3-ヒドロキシ酪酸、ベタインなど5つの代謝物は、共通して抑うつ重症度に強く関連することがわかった。 さらに、抑うつ気分、罪悪感、自殺念慮などそれぞれの症状毎に関連する代謝物が異なることを発見した。自殺念慮に関しては、脳内免疫細胞ミクログリアとの関連が示唆されるキヌレン経路の代謝物が強く関連していた。人工知能などで活用されている解析技術である機械学習を導入して、数種類の代謝物情報から自殺念慮の有無やその程度を客観的に予測するためのアルゴリズムを開発した。
210	Aizawa E, Tsuji H, Asahara T, Takahashi T, Teraishi T, Yoshida S, Ota M, Koga N, Hattori K, Kunugi H	Possible association of Bifidobacterium and Lactobacillus in the gut microbiota of patients with major depressive disorder.	J Affect Disord 202,254 - 257,09,2016	うつ病患者と健常者において、腸内細菌ビフィズス菌とラクトバチルス菌の菌量の比較を行った。
211	Kawashima Y, Nishi D, Noguchi H, Usuki M, Yamashita A, Koido Y, Matsuoka YJ.	Post-traumatic Stress Symptoms and Burnout Among Medical Rescue Workers 4 Years after the Great East Japan Earthquake: A Longitudinal Study.	Disaster Medicine and Public Health Preparedness 10(6),848 - 853,12,2016	我々は東日本大震災の急性期救援活動に従事した災害派遣医療チーム(DMAT)隊員を対象として2011年に行った研究で、救援活動直後の精神的苦痛が震災4ヶ月後のPTSD症状を予測することを既に報告した(Nishi D et al, PLoS One, 2012)。今回は2011年の研究参加者の震災4年後のPTSD症状および燃え尽きの予測因子を縦断的に検討した。2011年の研究参加者254名のうち188名(回収率74%)が今回の研究に参加した。重回帰分析の結果、救援活動直後の精神的苦痛は、震災4年後のPTSD症状および燃え尽きも予測していた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
212	Kaoru Arai, Ayumi Takano, Takako Nagata and Naotsugu Hirabayashi	Predictive accuracy of the Historical-Clinical-Risk Management-20 for violence in forensic psychiatric wards in Japan	Criminal Behaviour and Mental Health 1 - 12,06,2016	我が国の医療観察法病棟において、HCR-20の暴力の予測力を明らかにした。
213	Oe M, Maeda M, Nagai M, Yasumura S, Yabe H, Suzuki Y, Harigane M, Ohira T, Abe M	Predictors of severe psychological distress trajectory after nuclear disaster: evidence from the Fukushima Health Management Survey.	BMJ Open 6,e013400 - ,10,2016	福島第一原子力発電所の避難地域の住民の心理的不調の軌跡について、2012-2014年に行われた県民健康調査のデータを用いて検討した。12,371人を解析対象とし、4つの軌跡パターンを同定した。3年間継続して重度の心理的不調だったグループに関連していたのは、主観的睡眠不足、問題飲酒、ソーシャルサポートの乏しさ、3年後の放射線の健康影響に関するリスク認知であった。上記の要因を考慮にいれた長期的支援が有用かもしれない。
214	Usuda K, Nishi D, Makino M, Tachimori H, Matsoka Y, Sano Y, Konishi T, Takeshima T	Prevalence and related factors of common mental disorders during pregnancy in Japan: a cross-sectional study	BioPsychoSocial Medicine. published online 05,2016	妊娠中のうつ病は母子双方へ影響を与えうる重要な課題であるが、日本では非大学病院における妊婦の精神疾患有病率やその関連因子を調べた先行研究はなかった。本研究では市中産院に妊娠12-24週で受診した妊婦を連続サンプリングし、構造化面接Mini-International Neuropsychiatric Interview (MINI)を用いて、精神疾患の有病率とその関連要因を横断的に調べた。その結果、頻度の高い精神疾患 (Common Mental Disorders: CMD) の市中産院における有病率は6.2%であり、若年であること、精神科の既往歴があること、「子どもを産まなくてはならない」というプレッシャーを感じていること、そして過去の対人トラウマ体験が妊婦のCMDIに関連していることが示唆された。
215	Tomita T, Yasui-Furukori N, Sugawara N, Ogasawara K, Katagai K, Saito H, Sawada K, Takahashi I, Nakamura K.	Prevalence of major depressive disorder among hemodialysis patients compared with healthy people in Japan using the Structured Clinical Interview for DSM-IV.	Neuropsychiatr Dis Treat 12,2503 - 2508,09,2016	血液透析を実施している患者におけるうつ病の罹患率を評価するため、DSM-IVのための構造化面接(SCID)を実施した。99人の患者がSCIDを完遂し、12人がうつ病と診断された。年齢、性別をマッチングさせた404人の対照群においては4人のうつ病を認め、患者群よりも高い罹患率であった。しかし、疫学的抑うつ尺度(GES-D)で評価した場合は、群間に差を認めなかった。
216	Sanjo N, Kina S, Shishido-Hara Y, Nose Y, Ishibashi S, Fukuda T, Maehara T, Eishi Y, Mizusawa H, Yokota T	Progressive multifocal leukoencephalopathy with balanced CD4/CD8 T-Cell infiltration and good response to mefloquine treatment.	Intern Med 55(12),1631 - 1635,06,2016	本論文は、これまで殆ど致死性であった進行性多巣性白質脳症(PML)症例を、メフロキン等の治療により寛解させた極めて重要な症例報告である。その背景として、組織の免疫系が比較的保たれていることを明らかにした点でも特筆に値する。
217	Koshiba M1, Karino G, Mimura K, Nakamura S, Yui K, Kunikata T, Yamanouchi H	Psycho-Cognitive Intervention for ASD from Cross-Species Behavioral Analyses of Infants, Chicks and Common Marmosets.	CNS Neurol Disord Drug Targets. 15(5),578 - 586,05,2016	
218	Iwasa H, Suzuki Y, Shiga T, Maeda M, Yabe H, Yasumura S	Psychometric Evaluation of the Japanese Version of the Posttraumatic Stress Disorder Checklist in Community Dwellers Following the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Incident-The Fukushima Health Management Survey.	SAGE Open 1 - 11,06,2016	PTSDチェックリスト(PCL)日本語版の心理測定特性を、福島県民健康調査のデータを用いて検討した。因子分析では、5因子モデルの当てはまりが良く、PCL総得点およびサブスケールの内的一貫性は高かった。心理的不調との相関は高かったが、精神疾患の既往、東日本大震災の被災等との相関は弱いか中程度であった。性、年齢でPCL得点の分布に有意差がみられた。PTSDチェックリスト(PCL)日本語版の心理測定特性、信頼性、妥当性が確認された

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
219	Inoue T, Murakami N, Ayabe T, Oto Y, Nishino I, Goto YI, Koga Y, Sakuta R	Pyruvate improved insulin secretion status in a mitochondrial diabetes mellitus patient	THE JOURNAL OF CLINICAL ENDOCRINOLOGY & METABOLISM 101 (5),1924 – 1926,05,2016	ミトコンドリア遺伝子異常による糖尿病患者に対して、ピルビン酸塩を経口投与(0.5/kg/day)し治療効果の評価を行った。患者は32歳 日本人男性で、20歳の時にミトコンドリア異常性糖尿病と診断された。治療効果は血液、髄液中の乳酸、ピルビン酸、Cペプチド、糖化ヘモグロビン、糖化アルブミン、そして1日の総インスリン投与量(TDD)で評価した。治療開始1日後、Cペプチドは4.3から17.2ug/dayに増加し、6か月後では30.2ug/dayまで増加し、TDDは33から20units/dayまで減量することができた。しかし、血中、髄液中ともに乳酸/ピルビン酸比の改善は認められなかった。このようにミトコンドリア異常による糖尿病患者に対して、ピルビン酸は有用な治療の可能性が見込まれるが、さらに多くの患者で長期にわたる臨床試験による評価が必要となるだろう。
220	Ling P, Rong N, Hatakeyama H, Goto Y, Shibata T, Yoshida M	Reactive oxygen species stimulate mitochondrial allele segregation toward homoplasmy in human cells	Mol Biol Cell 27(5),1684 – 1693,05,2016	ヘテロプラスミー状態にあるミトコンドリア病患者由来のヒト細胞において、細胞内で自然に生じた適度な濃度のROSがコンカテマーを形成するローリングサークル型複製を誘発し、mtDNAのホモプラスミー化を導くことを示した。
221	Matsumoto T, Tachimori H, Takano A, Tanibuchi Y, Funada D, Wada K.	Recent Changes in the Clinical Features of Patients with New Psychoactive Substances-Related Disorders in Japan: Comparison of the Nationwide Mental Hospital Surveys on Drug-related Psychiatric Disorders undertaken in 2012 and 2014	Psychiatry Clin Neurosci 70 (12),560 – 566,12,2016	本論文は、新規向精神薬(NPS)に関連する精神障害を有する患者の社会心理的背景と臨床的な特徴に関して2012年と14年の間の変化を調査した。本研究結果は、2012年から14年の間に新規向精神薬依存患者数と社会的な機能障害を呈する者の数が増えていることを示唆した。
222	Takahashi H, Nakahachi T, Stickley A, Ishitobi M, Kamio Y.	Relationship between physiological and parent-observed auditory over-responsiveness in children with typical development and those with autism spectrum disorders	Autism 12,2016	自閉スペクトラム児と定型発達児の感覚処理に関わる神経生理学的エンドフェノタイプと感覚処理特性の表現型との関連について調べるために、自閉スペクトラム児15名ならびに定型発達児28名を対象に、聴覚性驚愕反射の潜時、65～105dBまで10dBきざみの音圧の聴覚刺激に対する聴覚性驚愕反射の大きさ、そして聴覚性驚愕反射の制御機構として、馴化および65、70、75dBの3種類の音圧のプレパルスに対するprepulse inhibition (PPI)といった指標を評価し、これらの指標と、保護者により評価された日本語版感覚プロファイル(Sensory Profile: SP)のスコアとの関連について検討した。聴覚性驚愕反射の潜時や65-75dBの微弱な刺激に対する聴覚性驚愕反射の大きさは、SPの総得点および4つの象限(低登録・感覚探求・感覚過敏・感覚回避)のほとんどと有意な相関を認めた。聴覚性驚愕反射の潜時や微弱な刺激に対する反応の大きさは、感覚処理特性の表現型の様々な側面と関連する可能性が考えられた。疾患多様性の大きい自閉スペクトラム児の病態解明のためには、神経生理学的エンドフェノタイプを用いたアプローチが有用である可能性が示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
223	Kubo K, Sugawara N, Kaneda A, Takahashi I, Nakamura K, Nakaji S, Yasui-Furukori N.	Relationship between quality of life and restless legs syndrome among a community-dwelling population in Japan.	Neuropsychiatric Disease and Treatment 12,809 – 815,04,2016	<p>目的 本研究では、一般住民におけるRLS症状と生活の質(QOL)の関連性を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法 この横断的研究では岩木健康増進プロジェクト2013に参加した985名を対象とした。RLS症状は、国際RLS研究班(IRLSG)の診断基準を用いて評価した。また、健康関連QOLについてはSF-36v2、抑うつ症状には疫学的抑うつ尺度(CES-D)、睡眠状態はピッツバーグ睡眠質問票を用いて測定した。</p> <p>結果 対象者におけるRLSの有病率は1.0%であった。また、RLS症状と身体機能、日常役割機能(身体)、体の痛み、社会生活機能、身体的側面サマリースコアとの間に負の関連性を認めた。</p> <p>結論 交絡要因を調整後、RLSの負荷は主に身体的な側面に現れており、RLS症状の診断と治療が必要である。</p>
224	Metoki N, Sugawara N, Hagii J, Saito S, Shiroto H, Tomita T, Yasujima M, Okumura K, Yasui-Furukori N.	Relationship between the lesion location of acute ischemic stroke and early depressive symptoms in Japanese patients.	Annals of General Psychiatry 15,12 – 12,04,2016	<p>目的 本邦の急性期脳卒中患者における脳損傷部位と早期の抑うつ症状との関連性を明らかにすること。</p> <p>方法 虚血性脳血管障害に罹患した421名の患者を対象とした。入院日に核磁気共鳴画像法(MRI)により脳損傷部位を同定し、臨床症状の重症度については入院後7日目にNIH脳卒中スケール(NIHSS)を、10日目には脳卒中うつスケール(JSS-D)により抑うつ症状を、機能的自立度評価法(FIM)により自立度を評価した。</p> <p>結果 対象者のうち71名(16.9%)がJSS-Dによりうつ評価された。ロジスティック回帰分析により、前頭葉と側頭葉の損傷が脳卒中急性期における抑うつ症状と関連した。</p> <p>結論 脳卒中急性期の患者において、特に前頭葉と側頭葉の損傷を有する患者においては、早期抑うつ症状の診断治療を行うために注意深く評価を行うべきである。</p>
225	Nishikura N, Takano T, Ryujin F, Yoshioka S, Maruo Y, Takeuchi Y, Tamura K, Sakakibara T, Ito M	Remitted epilepsy with dysembryoplastic neuroepithelial tumor involving the thalamus	Pediatr Int 58,496 – 500,06,2016	難治性てんかんを伴うDNTを発見、報告した。これまで、DNTは比較的良性であるが、視床への浸潤があり、異型性がみられた稀な病型であり、新しい脳腫瘍の概念を提起する報告である。
226	Matsumura Tsuyoshi, Saito Toshio, Yonemoto Naohiro, Nakamori Masayuki, Sugiura Toshihiro, Nakamori Aya, Fujimura Harutoshi, Sakoda Saburo	Renal dysfunction can be a common complication in patients with myotonic dystrophy 1.	Journal of the neurological sciences 368,266 – 71,09,2016	
227	Watanabe H, Ishii K, Hosono M, Imabayashi E, Abe K, Inubushi M, Ohno K, Magata Y, Ono K, Kikuchi K, Wagatsuma K, Takase T, Saito K, Takahashi Y	Report of a nationwide survey on actual administered radioactivities of radiopharmaceuticals for diagnostic reference levels in Japan	Ann Nucl Med 05,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
228	Hiroshi Yamada, Hiroaki Yaguchi, Saeka Tomatsu, Tomohiko Takei, Tomomichi Oya, Kazuhiko Seki	Representation of afferent signals from forearm muscle and cutaneous nerves in the primary somatosensory cortex of the macaque monkey	PLOS ONE 11(10),e0163948 – ,10,2016	大脳皮質における体性感覚入力の一次中継領域であるBroadmanの3a野を覚醒サルにおいて同定する方法を開発した。そして、3a野にはこれまで想定されてきた筋固有感覚入力だけでなく、弱い皮膚感覚入力も表現されている事が明らかになった。
229	Miyakawa N, Banno T, Abe H, Tani T, Suzuki W, Ichinohe N	Representation of Glossy Material Surface in Ventral Superior Temporal Sulcal Area of Common Marmosets	Front. Neural Circuits 11,03,2017	
230	Horikoshi N, Iwasa H, Kawakami N, Suzuki Y, Yasumura S	Residence-related factors and psychological distress among evacuees after the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident: a cross-sectional study.	BMC Psychiatry 16(1),420 – ,11,2016	福島第一原子力発電所の被災者において仮設住宅で生活している人びとに面接調査を行い(n=418)、精神健康と転居の関連を検討した。頻回の転居、住居への不満足が精神健康不良(K6≥5)と関連していた。特に女性では、恒久的な住宅への転居の計画が、精神健康不良と関連していた。被災住民の精神健康の支援として、快適な住環境、特に女性では恒久的な住宅への転居計画を考慮する必要がある。
231	Nishi D, Kawashima Y, Noguchi H, Usuki M, Yamashita A, Koido Y, Matsuoka YJ	Resilience, posttraumatic growth and work engagement among health care professionals after the Great East Japan Earthquake: A 4-year prospective follow-up study	Journal of Occupational Health 58(4),347 – 353,07,2016	東日本大震災の救援活動に従事した医療者を対象に、救援活動時の苦痛、レジリエンス、そして救援活動後の外傷後成長が、震災4年後のワーク・エンゲイジメントにどのような影響を与えているかについて調べた。2011年4月の初回調査に参加していた254人の医療救護者のうち、191人(75.2%)が震災4年後の調査に参加した。研究の結果、初回調査時のレジリエンスと、救援活動後の外傷後成長がワーク・エンゲイジメントに関連しており、大規模災害後に救援活動に従事する医療者のサポート体制の整備やストレス軽減につながる知見が示された。
232	Hatakeyama Hideyuki, Goto Yu-Ichi	Respiratory Chain Complex Disorganization Impairs Mitochondrial and Cellular Integrity: Phenotypic Variation in Cytochrome c Oxidase Deficiency.	The American journal of pathology 187(1),110 – 121,01,2017	
233	Goto T, Ishitobi M, Takahashi T, Higashima M, Wada Y.	Reversible Splenial Lesion Related to Acute Lithium Intoxication in a Bipolar Patient: A Case Report.	J Clin Psychopharmacol 36(5),528 – 529,10,2016	一過性脳梁膨大部病変(RSLs)は、てんかんや、抗てんかん薬の投与、感染、低ナトリウム血症、低血糖、過剰なアルコール摂取などとの関連が指摘されているが、双極性障害(MDI)のRSLsに関する報告は少ない。そこで、急性リチウム中毒を呈したMDI患者に認められたRSLsに関して報告する。症例は55歳男性、同診断でリチウムの投与が開始された。投与開始16日目、振戦と構音障害が出現。22日目には腎機能障害が認められ、MRIを実施したところRSLsが認められた。投与中止により有害事象は消退し、46日目にはRSLsの消失が確認された。臨床医は、リチウムの投与にRSLsのリスクがあることを意識すべきである。
234	Ando K, Soshi T, Nakazawa K, Noda T, Okada T	Risk factors for problematic behaviors among forensic outpatients under the Medical Treatment and Supervision Act in Japan	Front. Psychiatry. Public Mental Health. 7(144),08,2016	医療観察法の通院データを用いて、問題行動全般のリスク要因を調べた。ICD10におけるF1診断と通院処遇前の入院履歴がある場合、そうでない場合に比べ、リスクが高くなっていた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
235	Okumura Y, Nishi D.	Risk of recurrent overdose associated with prescribing patterns of psychotropic medications after nonfatal overdose.	Neuropsychiatric Disease and Treatment (13),653 - 665,03,2017	非致死的な過量服薬入院中におけるリエゾン・コンサルテーションと退院後の向精神薬処方、過量服薬の再発リスクと関連する程度を検討した。レセプト情報・特定健診等情報データベースを活用し、2012年10月から2013年9月の間に非致死的な過量服薬により入院した19～64歳の患者を、過量服薬による入院以前に精神科通院歴があるコホート (n = 6,790) と、精神科通院歴がないコホート (n = 4,950) に分類して入院90日以前から退院後365日間追跡した。研究の結果、両コホートにおいて入院中のリエゾン・コンサルテーションは過量服薬の再発と関連せず、退院後のベンゾジアゼピン受容体作動薬と過量服薬の再発は用量反応関係が認められた。過量服薬後のベンゾジアゼピンが低用量であるほど過量服薬の再発リスクが低減することが示された。
236	Saida, T., J.I. Kira, S. Kishida, T. Yamamura, N. Ohtsuka, Y. Ling, S. Torii, N. Lucas, G. Kuesters, D. Steriner, and J.T. Tibung	Safety and efficacy of natalizumab in Japanese patients with relapsing-remitting multiple sclerosis: Open-label extension study of a phase 2 trial	Neurol Ther 2016,1 - 17,12,2016	MS治療薬ナタリズマブ承認の基礎となった国内治験において、実薬を用いた延長試験が実施された。そのデータ(安全性と有効性)をまとめて、専門誌に発表したものである。
237	Fujishima M, Kawaguchi A, Maikusa N, Kuwano R, Asada T, Arai H, Iwatsubo T, Matsuda H.	Sample size estimation for a future clinical trial of Alzheimer's disease-modifying treatment using brain atrophic changes using serial MRI: the Japanese ADNI study.	J Alzheimers Dis 56(1),75 - 88,01,2017	日本人集団における連続脳磁気共鳴画像法(MRI)による萎縮測定を用いたアルツハイマー病(AD)修飾治療の臨床試験に必要なサンプルサイズはほとんど知られていない。本研究の第一の目的は、代謝バイオマーカーとしての脳の萎縮測定を用いて、日本におけるAD修飾治療のための将来の臨床試験にどれくらいのサンプルサイズが必要であるかを推定することであった。サンプルサイズは、線形の537人のアルツハイマー型神経イメージングゲイニシアティブ(J-ADNI)参加者のデータを用いて、k平均正規化境界シフト積分(KN-BSI)および認知尺度による全脳および海馬の変化率から推定した混合効果モデル。また、ApoEステータスの試行濃縮戦略としての可能性を検討した。海馬の萎縮速度は、ADおよび軽度認知障害(MCI)の認知尺度よりも小さいサンプルサイズを必要とした。ApoE状態の包含は、萎縮処置におけるADおよびMCI患者のサンプルサイズを減少させた。これらの結果は、日本人におけるAD修飾治療の臨床試験において、進行性バイオマーカーとして自動画像分析を用いた縦方向海馬萎縮測定の可能性を示し、試験濃縮法としてのApoE状態を示す
238	Uruha A, Nishikawa A, Tsuburaya RS, Hamanaka K, Kuwana M, Watanabe Y, Suzuki S, Suzuki N, Nishino I	Sarcoplasmic MxA expression: A valuable marker of dermatomyositis	NEUROLOGY 88(5),493 - 500,01,2017	厚生労働省指定難病の一つである皮膚筋炎の診断において、筋細胞上に発現するMxA(ミクソウイルス抵抗蛋白質A)が、従来のものと比較して最も優れた診断バイオマーカーになることを明らかにしました。皮膚筋炎は筋肉と皮膚に炎症をきたし、筋力低下や皮膚の発疹を起す疾患です。間質性肺炎やがんといった生命に関わる合併症を伴うことから、より早期からの正確な診断が求められます。研究グループは、皮膚筋炎患者の筋細胞上に発現するMxAを検出することで、従来の診断方法に比べて高感度で診断できることを発見しました。この研究成果は、今後の皮膚筋炎の診断精度の向上に大きく貢献するものと期待されます。本論文は当該号の表紙を飾りました。
239	Hara N, Kikuchi M, Miyashita A, Hatsuta H, Saito Y, Kasuga K, Murayama S, Ikeuchi T, Kuwano R	Serum microRNA miR-501-3p as a potential biomarker related to the progression of Alzheimer's disease	Acta Neuropathol Commun 31(5),01,2017	アルツハイマー病の進行に関連するバイオマーカーとしての血清マイクロRNA miR-501-3pが候補として需要であることを、様々なアルツハイマー病病理の段階にある多数例の剖検脳の解析より明らかにした

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
240	Kuraoka M, Kimura E, Nagata T, Okada T, Aoki Y, Tachimori H, Yonemoto N, Imamura M, Takeda S	Serum Osteopontin as a Novel Biomarker for Muscle Regeneration in Duchenne Muscular Dystrophy.	Am J Pathol. 186(5),1302 – 1312,05,2016	デュシェンヌ型筋ジストロフィー(DMD)イヌモデルCXMDJの血清オステオポンチン(OPN)を経齢的に測定し、筋障害マーカーの血清CKとは異なる推移で増加する傾向を見出した。筋組織におけるOPN発現は、血清値が高い時期に炎症細胞と再生筋線維で顕著に認められることがわかり、血清OPNが筋再生を指示する特徴的な新規バイオマーカーとなる可能性が示唆された。
241	Kunii Y, Suzuki Y, Shiga T, et al	Severe Psychological Distress of Evacuees in Evacuation Zone Caused by the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident: The Fukushima Health Management Survey.	PLoS ONE 11(7),e0158821 – ,07,2016	東日本大震災後の福島第一原子力発電所事故による避難住民の精神健康状態を疫学的に記述した。精神健康はK6で測定し、基本属性、社会経済状況、震災関連要因との関係を検討した。なかでも、精神健康の不調は、放射線の空間線量が高かった自治体の居住と関連していた。災害後の精神健康には、災害に関連する既知の危険因子に加え、放射線の空間線量を考慮する必要があることが示唆された。
242	Matsuo J, Ota M, Hidese S, Hori H, Teraishi T, Ishida I, Hiraishi M, Kunugi H.	Sexually dimorphic deficits of prepulse inhibition in patients with major depressive disorder and their relationship to symptoms: A large single ethnicity study.	J Affect Disord 211,75 – 82,01,2017	うつ病の感覚情報処理機能をプレパルス抑制(PPI)検査によって調べた結果、健常者と比べ、男性でのみPPIが有意に低く、うつ症状との間に負の相関が見られた。男性うつ病患者においては感覚フィルター機能がうつ症状に応じて変化することが示唆された。
243	Takahashi K, Tachimori H, Kan C, Nishi D, Okumura Y, Kato N, Takeshima T	Spatial analysis for regional behavior of patients with mental disorders in Japan	Psychiatry Clin Neurosci 12,2016	本研究の目的は、精神科の施設で治療された患者の地理的な動きを明らかにし、精神科のサービスの資源と医療システムに関する重要な情報を提供することである。2014年の従来の「630調査」の追加調査として収集された精神病患者の全国データを分析した。6ヶ月間に新たに入院した入院患者151,848人と特定日の外来患者144,401人について、患者の住居と精神科施設の所在地が所属する二次医療圏をを同定した。「患者の居住地が含まれる二次医療圏」とその患者が受診した「医療機関が所属する二次医療圏」が同じか異なるかを同定し、「同じ二次医療圏からの受診者の割合」と「二次医療圏が所属する県と同じ県からの受診者の割合」をベイズ統計モデルを利用してそれぞれ推定した。入院患者は、外来患者より広い地域を移動する。ほとんどすべての入院患者と外来患者は、彼らが住んでいる県内の病院/診療所で治療を受けていた。
244	Ohi Y, Kita Y, Suzuki K, Okumura Y, Okuzumi H, Shinoda H, Inagaki M	Spatial working memory encoding type modulates prefrontal cortical activity	Neuro Report 03,2017	本研究は空間性ワーキングメモリの符号化の種類に関与する前頭皮質の活動と、視空間能力の個人差による脳活動パターンの違いについて検討した。39名の健常成人を対象に、空間性ワーキングメモリ課題遂行時の脳血流動態を近赤外線スペクトロスコピーにより計測した。その結果、継次的符号化を求めた場合、両側の背外側前頭前野(DLPFC)の活動上昇が認められた。また、同時的符号化を求めた場合、視空間能力が高い者では右側DLPFCの活動が減弱していた。以上の結果から、空間性ワーキングメモリに関与する前頭皮質の活動は符号化の種類によって変容することが示唆された。
245	Wakatsuki S, Araki T	Specific phospholipid scramblases are involved in exposure of phosphatidylserine, an “eat-me” signal for phagocytes, on degenerating axons.	Communicative & Integrative Biology 10(2),e1296615 – ,02,2017	神経軸索の傷害後変性の際に、変性軸索が貪食を受けるのに必要なphosphatidylserineが変性軸索の細胞膜表面に表出するのは、phospholipid scramblase、特にABC1、XKR1の作用によるものであることを示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
246	Takahashi H, Nakahachi T, Stickley A, Ishitobi M, Kamio Y.	Stability of the acoustic startle response and its modulation in children with typical development and those with autism spectrum disorders: a one-year follow-up. (in press)	Autism Research 10,2016	自閉スペクトラム症(ASD)児12名・定型発達児24名の聴覚性驚愕反射(ASR)とその制御機構を評価し、1年後再評価した。両時期でASDは定型発達に比べ、ASRの潜時が延長し、小さな音刺激に対するASRが大きかった。これらの指標は1年間で有意に変化せず、級内相関は概ね中等度に一致した。ASRの潜時の延長と小さな音刺激に対するASRの大きさは、中等度に安定したASDの神経生理学的指標と考えられた。
247	Noguchi J, Hayama T, Watanabe S, Ucar H, Yagishita S, Takahashi N, Kasai H	State-dependent diffusion of actin-depolymerizing factor/cofilin underlies the enlargement and shrinkage of dendritic spines.	Scientific Reports 6,32897 - ,09,2016	
248	Hattori T, Ito K, Nakazawa C, Numasawa Y, Watanabe M, Aoki S, Mizusawa H, Ishiai S, Yokota T	Structural connectivity in spatial attention network: reconstruction from left hemispatial neglect.	Brain Imaging Behav. - online,03,2017	左半側空間無視は、59例の脳梗塞患者の解析から上縦束I,上縦束II、上縦束III(弓状束)あるいは視床から下頭頂小葉、側頭頭頂結合部、上側頭回への放線の障害によって生ずると考えられた。
249	Ota M, Sato N, Hidese S, Teraishi T, Maikusa N, Matsuda H, Hattori K, Kunugi H.	Structural differences in hippocampal subfields among schizophrenia patients, major depressive disorder patients, and healthy subjects	Psychiatry Res 259,54 - 59,01,2017	多くのMRI研究は、精神医学的疾患における海馬の体積減少を報告している。しかしながら、海馬サブフィールドにおける疾患関連の容積の差異は依然として不明である。ここでは、統合失調症患者、大うつ病性障害患者(MDD)、および健康な被験者の対照としての海馬サブフィールドの量を比較した。T2強調画像は、統合失調症患者20人、MDD患者36人、健康なボランティア35人が3-Tesla MRIによって獲得された。海馬のサブフィールドは、自動アルゴリズム、海馬のサブフィールド(ASHS)の自動セグメント化を使用してセグメント化された。統合失調症患者は、コントロールおよびMDD患者と比較して、対照と比較してCA1および歯状回において有意な容積減少を示したが、MDD患者と対照との間に有意差はなかった。薬物投与を受けていないMDD患者では、嗅周皮質の容積とうつ病の重症度との間には負の相関関係があったが、統合失調症患者ではCA2容積と負の症状および病気の持続期間との間に負の相関があった。我々は、海馬のサブフィールドの異なるボリュームの減少と、疾患の重症度とサブフィールドのボリュームとの間の様々な相関を診断によって特定し、海馬のサブフィールドの体積の差が統合失調症およびMDDの病態生理学に関する重要な情報を提供し得ることを示唆した。



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
250	Beheshti I, Demirel H, Farokhian F, Yang C, Matsuda H.	Structural MRI-based detection of Alzheimer's disease using feature ranking and classification error.	Computer methods and programs in biomedicine 137,177 - 193,09,2016	本稿では、構造磁気共鳴イメージング (sMRI) データを用いたアルツハイマー病 (AD) 検出のための特徴ランキングに基づく自動コンピュータ支援診断 (CAD) システムを紹介する。提案されたCADシステムは、4つの系統的段階から構成されている。第1に、健常対照 (HC) のGMと比較したAD患者の灰白質 (GM) における全体的および局所的な相違を、ボクセルベースの形態計測技術を用いて分析する。その目的は、GMのボリュームにおける重要な地方の違いを関心ボリューム (VOI) として特定することである。第2に、VOIのボクセル強度値は生の特徴として抽出される。第3に、統計的依存性 (SD)、相互情報量 (MI)、情報利得 (IG)、ピアソン相関係数 (PCC)、t検定スコア (TS) フィッシャー基準 (FC)、およびジニ指数 (GI) が含まれます。スコアの高い機能は、より差別的で、トップフィーチャの数を決定するために、ADグループとHCグループからなるトレーニングセットに基づいて推定された分類エラーが計算され、このエラーを最小化したベクトルサイズが最上位の識別特徴として選択される。第4に、SVM (Support Vector Machine) を用いて分類を行う。さらに、分類性能を向上させるために、特徴ランキング方法間のデータ融合アプローチが導入されている。提案された方法は、ADNI (130 ADおよび130 HC) からのデータセットを用いて10倍交差検定を用いて評価される。提案された自動システムの分類精度は、sMRIデータを用いて最大92.48%である。特徴量ランキング法と分類誤差に基づくAD分類のための自動CADシステムを提案する。これに関して、7つの特徴のランキング方法 (すなわち、SD、MI、IG、PCC、TS、FC、およびGI) が評価される。上位識別特性の最適サイズは、トレーニングフェーズにおける分類誤差推定によって決定される。実験結果は、提案されたシステムの性能が最先端の分類モデルの性能と比較されることを示している。
251	aito T, Kawai M, Kimura E, Ogata K, Takahashi T, Kobayashi M, Takada H, Kuru S, Mikata T, Matsumura T, Yonemoto N, Fujimura H, Sakoda S	Study of Duchenne muscular dystrophy long-term survivors aged 40 years and older living in specialized institutions in Japan	NEUROMUSCULAR DISORDERS 27(2),107 - 114,02,2017	
252	Ohyagi M, Ishibashi S, Ohkubo T, Kobayashi Z, Emoto H, Kiyosawa M, Mizusawa H, Yokota T	Subacute supranuclear palsy in anti-hu paraneoplastic encephalitis	The Canadian Jour Neuro Scie. 00 (0),01,2017	57歳の肺小細胞癌患者が核上性眼球運動障害と認知機能障害MRI FLAIRでの高信号病変を呈し、抗がん治療と免疫治療により腫瘍は縮小し画像所見は消失したが、症候は継続した。
253	Narita Z, Takano H, Sumiyoshi T	Successful Treatment of Psychomotor Agitation in Neuromyelitis Optica Spectrum Disorder with Trazodone-Risperidone Combination: A Case Report	Neuropsychiatric Disease and Treatment 13,775 - 777,03,2017	Neuromyelitis optica(NMO)は、脊髄および眼神経が侵される神経変性疾患である。本論文では、NMOに罹患した高齢患者が精神運動興奮を呈し、抗うつ薬トラゾドンと抗精神病薬リスペリドンの併用投与により改善した一例を報告した。
254	Otsuki Taisuke, Kim Heung-Dong, Luan Guoming, Inoue Yushi, Baba Hiroshi, Oguni Hirokazu, Hong Seung-Chyul, Kameyama Shigeki, Kobayashi Katsuhiro, Hirose Shinichi, Yamamoto Hitoshi, Hamano Shin-ichiro, Sugai Kenji,	Surgical versus medical treatment for children with epileptic encephalopathy in infancy and early childhood: Results of an international multicenter cohort study in Far-East Asia (the FACE study).	Brain & development 38(5),449 - 60,05,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
255	Nishikawa A, Mitsuhashi S, Miyata N, Nishino I	Targeted massively parallel sequencing and histological assessment of skeletal muscles for the molecular diagnosis of inherited muscle disorders	JOURNAL OF MEDICAL GENETICS 54(2),104 - 110,02,2017	2014-2015年に筋病理診断目的で国立精神・神経医療研究センターに筋検体、血液検体が送付され、遺伝性筋疾患が疑われたものの原因遺伝子が未確定の孤発例188例を、筋病理所見に基づき筋ジストロフィー(MD,65例)、先天性ミオパチー/先天性筋無力症候群(CMP/CMS, 65例)、代謝性ミオパチー(MM, 10例)、筋原線維性ミオパチー/縁取り空胞を伴うミオパチー(MFM, 48例)の4グループに分類した。各疾患群に関連した遺伝子のエクソン、エクソン・イントロン境界をカバーする4つのターゲット遺伝子パネルを作製し、それらを用いてIonPGM次世代シーケンサーで遺伝子解析を行った。また、MDが疑われた患者では、主要なMDの原因蛋白について免疫組織化学を行った。更に、スプライス部位の変異については、筋由来のcDNAを用いてスプライシング異常の評価を行った。各パネルで解析を行ったところ、MD 30例(46.2%)、CMP 17例(26.2%)、MM 3例(30%)、MFM 12例(25%)で候補遺伝子変異を見出した。全118患者での診断率は33.0%であった。機能喪失型の機序が想定される遺伝子に変異を認めた筋ジストロフィー患者の免疫組織化学では、蛋白の欠失や局在異常が確認された。また、イントロン領域に変異を認めた患者では、cDNA解析にて異常なスプライシングが起こっていることを確認した。我々の筋病理、mRNA、蛋白解析を併用した遺伝子診断法は、筋疾患患者における病的バリエーションのスクリーニングに有用かつ効率が良い方法と考えられた。今回の研究の結果は、包括的な疾患関連の遺伝子変異データベースを発展させること、臨床、病理、分子学的実験など、多面的な評価が重要であることを示している。
256	Mao Y, Chen X, Xu M, Fujita K, Motoki K, Sasabe T, Homma H, Murata M, Tagawa K, Tamura T, Kaye J, Finkbeiner S, Blandino G, Sudol M, Okazawa H.	Targeting TEAD/YAP-transcription-dependent necrosis, TRIAD, ameliorates Huntington's disease pathology.	Hum Mol Genet. 25(21),4749 - 4770,11,2016	
257	Sone D, Watanabe M, Ota M, Kimura Y, Sugiyama A, Maekawa T, Okura M, Enokizono M, Imabayashi E, Sato N, Matsuda H	Thalamic hypoperfusion and disrupted cerebral blood flow networks in idiopathic generalized epilepsy: Arterial spin labeling and graph theoretical analysis.	Epilepsy Res 129,95 - 100,12,2016	この研究の目的は、動脈スピラベリング(ASL)イメージングおよびグラフ理論分析の解剖学的共分散法を用いて、特発性全身性てんかん(IGE)における間質性脳血流(CBF)分布およびグラフ理論ネットワークを調べることであった。19人のIGE患者と19人の年齢/性別が一致する健常対照を募集した。それらのCBF画像は、疑似連続ASL画像によって得られ、統計的パラメトリックマッピングソフトウェア(SPM8)およびグラフ解析ツールボックス(GAT)を用いて比較された。ASLイメージングは、IGEの視床、上中脳、および左小脳における発作間欠的低灌流を検出することができた。さらに、グラフ理論分析は、特に両側頭側 - 後頭部領域および側方前頭葉における局所的クラスタリングの変化および攻撃に対する回復力の著しい低下を含むIGEのCBFネットワークの特徴的な知見を明らかにした。ネットワークメトリクスの比較には有意性はなかった。これらの知見は、IGEの病態生理学のより良い理解に貢献する可能性がある。
258	Sugiyama A, Sato N, Kimura Y, Maekawa T, Wakasugi N, Sone D, Enokizono M, Takahashi Y, Murata M, Mizusawa H, Matsuda H	Thalamic involvement determined by VSRAD advance on MRI and easy Z-score analysis of (99m)Tc-ECD-SPECT in Gerstmann-Strussler-Scheinker syndrome with P102L mutation	J Neurol Sci 373,27 - 30,02,2017	GSS二症例の脳画像についての症例報告

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
259	Sugiyama A, Sato N, Kimura Y, Maekawa T, Wakasugi N, Sone D, Enokizono M, Takahashi Y, Murata M, Mizusawa H, Matsuda H	Thalamic involvement determined using VSRAD advance on MRI and easy Z-score analysis of 99mTc-ECD-SPECT in Gerstmann-Strussler-Scheinker syndrome with P102L mutation.	J Neurol Sci 373,27 - 30,02,2017	プリオンタンパク質遺伝子(GSS102)におけるP102L突然変異によって引き起こされるGerstmann-Strussler-Scheinker症候群は、通常、徐々に進行する小脳性運動失調症の発症を特徴とし、痴呆は後に起こる。初期段階で比較的長い疾患経過および進行性小脳性運動失調症の顕著性のために、GSS102はしばしば他の神経変性疾患として誤診される。我々は、遺伝的に証明されたGSS102Lの2つの症例を提示しており、両方ともボクセルに基づくアルツハイマー病(VSRAD)前進ソフトウェアの特定の地域分析システムおよび99mTc-エチルについての容易なZスコア分析によって決定される視床の萎縮および血流の減少を示すシステイン二量体SPECTである。これらの視床異常は今日まで完全に評価されておらず、それらを検出することは、GSS102を他の神経変性疾患と区別するのに有用であり得る。
260	Pu S, Nakagome K, Itakura M, Iwata M, Nagata I, Kaneko K.	The association between cognitive deficits and prefrontal hemodynamic responses during performance of working memory task in patients with schizophrenia.	Schizophr Res, 172(1-3),114 - 122,04,2016	統合失調症における認知機能障害と前頭前皮質機能との関連性について、作業記憶課題遂行中の光トポグラフィーを用いて、統合失調症患者87名と健常対照群50名を対象に検討した。その結果、光トポグラフィーにおける血液量変化と神経心理検査であるBACS(Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia)の総計点と下位項目得点との関連性が認められた。その関連性は、とくに右背外側前頭前皮質、左右腹外側前頭前皮質、右前頭極部で有意であった。統合失調症における認知機能障害は、これらの領域における神経活動の異常が影響している可能性が示唆された。
261	Imabayashi E, Yokoyama K, Tsukamoto T, Sone D, Sumida K, Kimura Y, Sato N, Murata M, Matsuda H.	The cingulate island sign within early Alzheimer's disease-specific hypoperfusion volumes of interest is useful for differentiating Alzheimer's disease from dementia with Lewy bodies.	EJNMMI Res 6(1),67 - ,12,2016	後頭葉血流低下に加えて楔前部に対する後部帯状回(PCG)の保存された代謝は、レヴィー小体(DLB)を有する認知症患者の帯状回島サイン(CIS)として知られている。CISは、[18 F]フルオロデオキシグルコース陽電子放出断層撮影法を用いて検出されたが、脳血流単一光子放出コンピュータ断層撮影法(SPECT)を用いて検出されていない。この研究の目的は、脳灌流SPECTを最適化して、CISおよび後頭部低血流を用いたアルツハイマー病(AD)からのDLBの鑑別を可能にすることである。DLBの疑いのある18人の患者および年齢が一致したアミロイドPET陽性のAD患者に99mTc-ECDによる脳血流SPECTを施行した。SPECT Zスコアマップは、Z-scoreイメージングシステム(eZIS)を用いた簡単なZスコア画像を用いて作成した。eZISはAD患者と認知機能正常な被験者との群比較が有意な相対的な低血流を明らかにした関心領域(VOI)を含んでいる。この関心領域を2つの部分、PCGおよび楔前部に分割した。PCG、楔前部、および後頭葉領域のZスコアおよび比率を分析し、レシーバ動作特性(ROC)曲線分析と比較した。PCG対内側後頭葉の比でADからDLBを区別する際に使用する曲線下面積(AUC)の最大値は0.87であり、感度は85.7%、感度は88.9%、特異度は82.4%であった。PCGと楔前部との比を有するAUCはより小さく、これらの2つのAUCの間に有意差は観察されなかったが、0.85であった。早期AD特異的VOI対内側後頭部領域内のPCGのZスコア比は、DLBを有する認知症患者をAD患者と鑑別するのに臨床的に有用である。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
262	Harris E, Bladen CL, Mayhew A, James M, Bettinson K, Moore Y, Smith FE, Rufibach L, Cnaan A, Bharucha-Goebel DX, Blamire AM, Bravver E, Carlier PG, Day JW, Diaz-Manera J, Eagle M, Grieben U, Harms M, Jones KJ, Lochm?ller H, Mendell JR, Mori-Yoshimura M, Paradas C, Pegoraro E, Pestronk A, Salort-Campana E, Schreiber-Katz O, Semplicini C, Spuler S, Stojkovic T, Straub V, Takeda S, Rocha CT, Walter MC, Bushby K; Jain COS Consortium	The Clinical Outcome Study for dysferlinopathy : An international multicenter study.	Neurol Genet. 2(4),89 - ,08,2016	
263	Harris E, Bladen CL, Mayhew A, James M, Bettinson K, Moore U, Smith FE, Rufibach L, Cnaan A, Bharucha-Goebel DX, Blamire AM, Bravver E, Carlier PG, Day JW, Diaz-Manera J, Eagle M, Grieben U, Harms M, Jones KJ, Lochm?ller H, Mendell JR, Mori-Yoshimura M, Paradas C, Pegoraro E, Pestronk A, Salort-Campana E, Schreiber-Katz O, Semplicini C, Spuler S1, Stojkovic T, Straub V, Takeda S, Rocha CT, Walter MC, Bushby K ; Jain COS Consortium	The Clinical Outcome Study for dysferlinopathy.	Neurol Genet. 2(4),e89 - ,08,2016	国際共同研究として実施中のThe Clinical Outcome Study for dysferlinopathy (COS)に登録された、遺伝子検査により診断確定済の193名のディスファーリンopathy患者を対象に、自然歴を3年間追跡し、本疾患の多様な発症時期、筋力低下のパターン、病状進行の程度について明らかにした。
264	Scott KM, Lim CC, Hwang I, Adamowski T, Al-Hamzawi A, Bromet E, Bunting B, Ferrand MP, Florescu S, Gureje O, Hinkov H, Hu C, Karam E, Lee S, Posada-Villa J, Stein D, Tachimori H, Viana MC, Xavier M, Kessler RC	The cross-national epidemiology of DSM-IV intermittent explosive disorder	Psychol Med 46(15),3161 - 3172,11,2016	本論文は世界初の間歇性爆発性障害(IED)についての国際比較研究である。控えめに言っても、IEDは有病率の低い障害であるが、IDEの真の社会的コストは、家族や親族に対する爆発的な怒りの発作の影響の観点から誤って伝えられてきた。IEDは男性、若者、社会的に不利な立場の人々、およびIEDの発症に先立って(特に幼少期に)暴力に曝露した者により多くみられた。
265	Fayyad J, Sampson NA, Hwang I, Adamowski T, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Andrade LH, Borges G, de Girolamo G, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Hu C, Karam EG, Lee S, Navarro-Mateu F, O'Neill S, Pennell BE, Piazza M, Posada-Villa J, Ten Have M, Torres Y, Xavier M, Zaslavsky AM, Kessler RC, WHO World Mental Health Survey Collaborators	The descriptive epidemiology of DSM-IV Adult ADHD in the World Health Organization World Mental Health Surveys	Atten Defic Hyperact Disord 9(1), 47-65. 2016	WHO世界精神保健(WMH)調査ではADHDの疫学について最初に10カ国からのデータに基づいて報告した。今回の報告は、それを成人のADHDに関するデータを収集した20の国または地域を代表するデータに基づいて更新したものである。高所得国、中高所得国、低・中低所得国、(平均回答率は68.5%)の調査では、26,744人の回答者に対して統合国際診断面接(CIDI)が実施された。現在のDSM-IV / CIDIの成人ADHD有病率は平均2.8%で、低・中低所得国(1.4%)よりも高(3.6%)および中高所得国(3.0%)で高かった。成人ADHDは男性、既婚者、低学歴と有意に関連していた。成人ADHDは、DSM-IV / CIDIの不安、気分、行動、および物質障害と高度に併存し、併存疾患を管理する際の役割障害(役割から外れた日、認知障害および社会的相互作用)と有意に関連していた。治療希求率はすべての国で低かったし、主にADHDそのものではなく併存した状態への治療に集中していた。
266	Matsunaga A, Kitamura T	The effects of symptoms, diagnostic labels, and education in psychiatry on the stigmatization towards schizophrenia: a questionnaire survey among a lay population in Japan	Mental Illness 8(1),16 - 20,05,2016	統合失調症の症状、診断、および精神医学の教育を受けた経験の統合失調症のスティグマへの影響を、一般集団を対象としたcase vignetteを用いた質問紙調査で検討した。症状と診断はそれぞれ独立してスティグマに影響し、また精神医学の教育を受けた経験がある方がスティグマの程度が強かった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
267	Aoki Y, Yamaguchi S, Ando S, Sasaki N, Bernick PJ, Akiyama T	The experience of electroconvulsive therapy and its impact on associated stigma: A meta-analysis	International Journal of Social Psychiatry 62(8),708 - 718,10,2016	本研究は、電気痙攣療法の経験が治療に関する知識や態度の改善に関係しているかを検証したメタ分析であった。研究の結果、電気痙攣療法の経験はその治療に対する態度の改善と関係していた
268	Sasaki K, Maikusa N, Imabayashi E, Yuasa T, Matsuda H	The feasibility of 11C-PIB-PET/CT for amyloid plaque burden: validation of the effectiveness of CT-based partial volume correction.	Brain Behav 6(10),e00532 - .08,2016	11C-ピッツバーグ化合物B(PiB)によるアミロイド陽電子放射断層撮影法(PET)イメージングは、脳アミロイド沈着物を評価するための有効なツールである。しかしながら、PET画像化は部分体積効果(PVE)に影響される可能性がある。PVEは、MRI(磁気共鳴画像)画像データを用いて補正されている。しかしながら、MRIを用いたPETのPVEの補正は、通常、2つの別個の手順を必要とし、患者に負担をかけ、スループットが低く、診断が効率的ではない。PET / CTの出現は、これらの問題を潜在的に克服し、より高いスループットおよびアミロイド斑の確実な定量化およびアルツハイマー病(AD)の評価を提供し得る。我々はMRIの代わりにPET / CTで得られたCTを用いてアミロイドPETのPVEを補正する可能性を検討した。我々は、AD患者および対照から取得した画像を用いて、CTに基づくPVCの結果とMRIに基づくPVCの結果とを比較することにより、CTに基づく部分体積矯正(partial volume correction)(PVC)の有効性を実証した。どちらの方法もPVCを実行することができた。2つのモダリティの間で、標準的な取り込み比(SUVr)値の間にわずかではあるが有意差が認められた。これらは一定の乗算によって減衰した。CTは、PVCにおいてMRIに取って代わる可能性があり、単一のPET / CTスキャナをアミロイドプラーク定量に使用することを可能にする。
269	Otowa T, Kawamura Y, Tsutsumi A, Kawakami N, Kan C, Shimada T, Umekage T, Kasai K, Tokunaga K, Sasaki T.	The First Pilot Genome-Wide Gene-Environment Study of Depression in the Japanese Population.	PLoS One 11(8),08,2016	うつ病に対し、遺伝子とストレスフルイベントとの遺伝子-環境相互作用を検討した。まず、320名を対象に解析した結果、10q26のRGS10遺伝子近傍にあるSNP rs10510057とストレスフルイベントとの??間に相互作用の有意傾向がみられた。さらに、異なる439名を対象に解析した結果、SNP rs10510057と仕事に関連したストレスとの??間に有意な相互作用が明らかにされた。これらのことより、SNP rs10510057とストレスフルイベントの相互作用が、うつ病に関与することが示唆された。遺伝子-環境相互作用をゲノムワイド関連解析(Genome Wide Association Study; GWAS)に組み込むことにより、従来の分析で潜在的に見逃されていた感受性遺伝子の同定に寄与する可能性があるだろう。
270	Hakamata Y, Sato E, Komi S, Moriguchi Y, Izawa S, Murayama N, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H	The functional activity and effective connectivity of pulvinar are modulated by individual differences in threat-	Sci Rep 6,34777 - ,10,2016	本研究では、注意バイアス(AB)の神経基盤について、健常者41名を対象として核磁気共鳴画像を用いて検証した。結果、ABの強い人ほど、中性刺激と比べて否定刺激を処理する際に視床枕(PUL)-背外側頭前野を含む前頭-頭頂領域間の有効結合が有意に強まったが、逆に注意制御能力の高い人に認められたPUL-情動中枢・扁桃体間の有効結合は欠如していた。PUL-扁桃体間の結合が強いほど否定刺激に対する扁桃体活動が抑制されたことから、ABの変化はPUL-扁桃体間の神経有効結合の変化と関連する可能性が示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
271	Stanaway Jeffrey D, Shepard Donald S, Undurraga Eduardo A, Halasa Yara A, Coffeng Luc E, Brady Oliver J, Hay Simon I, Bedi Neeraj, Bensenor Isabela M, Casta?eda-Orjuela Carlos A, Chuang Ting-Wu, Gibney Katherine B, Memish Ziad A, Rafay Anwar, Ukwaja Kingsley N, Yonemoto Naohiro, Murray Christopher J L	The global burden of dengue: an analysis from the Global Burden of Disease Study 2013.	The Lancet. Infectious diseases 16(6),712 - 23,06,2016	
272	Suzuki S, Saitoh A, Ohashi M, Yamada M, Oka J, Yamada M	The infralimbic and prelimbic medial prefrontal cortices have differential functions in the expression of anxiety-like behaviors in mice.	Behav Brain Res 304,120 - 124,05,2016	本研究では、内側前頭前野前辺縁皮質領域(PL-PFC)及び下辺縁皮質領域(IL-PFC)の情動調節へ及ぼす影響について検討した。電位依存性Naチャンネル活性化薬veratrineをPL-PFCに灌流したマウスでは、細胞外グルタミン酸濃度の有意な増加に伴い、不安様行動が認められた。一方、IL-PFCにveratrineを灌流したマウスでは、細胞外グルタミン酸濃度が有意に増加したにもかかわらず、不安様行動がみられなかった。以上の結果から、PL-PFCとIL-PFCは不安様行動発現に対し異なる役割を有している可能性が示唆された。
273	Nakazato, R. Hotta, S. Yamada, D. Kou, M. Nakamura, S. Takahata, Y. Tei, H. Numano, R. Hida, A. Shimba, S. Mieda, M. Hinoi, E. Yoneda, Y. Takarada, T.	The intrinsic microglial clock system regulates interleukin-6 expression	Glia 65(1),198 - 208,01,2017	小膠細胞において時計遺伝子Bmal1がIL-6の発現を誘導することを明らかにし、炎症反応の調整に概日時計システムが関わっていることが示唆された。
274	Itoh M, Ujiie Y, Nagae N, Niwa M, Kamo T, Lin M, Hirohata S, Kim Y	The Japanese version of the Posttraumatic Diagnostic Scale: Validity in participants with and without traumatic experiences.	Asian J Psychiatr 25,1 - 5,02,2017	自記式の日本語版外傷後ストレス診断尺度(Posttraumatic Diagnostic Scale, 以後PDS)の妥当性を検討した。一般大学生、および精神科を受診した外来患者(N = 225)を対象に(PTSD有病率=44%)、PTSD診断のゴールドスタンダードであるClinician-Administered PTSD ScaleとPDSによる評価を行ったところ、PDSの高い感度(.97)、特異度(.94)、陽性的中率(92.4%)、陰性的中率(97.5%)、ROC曲線下面積(0.97)が得られた。重症度得点の相関も高い値(Pearson's r = .92)であった。
275	Tanisho Y, Shigemura J, Kubota K, Tanigawa T, Bromet EJ, Takahashi S, Matsuoka Y, Nishi D, Nagamine M, Harada N, Tanichi M, Smith AK, Takahashi Y, Shimizu K, Nomura S, Yoshino A, Fukushima NEWS Project Collaborators.	The longitudinal mental health impact of Fukushima nuclear disaster exposures and public criticism among power plant workers: the Fukushima NEWS Project study.	Psychological Medicine 46 (15),3117 - 3125,11,2016	福島第一・第二原発の労働者968人を対象として、東日本大震災後の精神健康について縦断的に調査を行った。研究の結果、震災2-3か月後の時点で差別や中傷を受けた経験があることが、震災14-15か月後の精神的な苦痛や心的外傷後ストレス症状を予測していた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
276	Kubota K, Shimizu-Motohashi Y, Saito T, Akatsuka S, Takeshita E, Ishiyama A, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M.	The long-term health impact and potential predictors of cardiopulmonary arrest in patients with childhood-onset psychomotor impairments.	Brain Dev 38(4),392 – 398,04,2016	重症心身障害児者では突然心肺停止を来し、生命予後不良のこともある。後方視的に心肺停止既往例と非既往例を比較し、その要因を明確にしたことにより突然の心肺停止予防に役立つことが期待できる。
277	Sumida K, Inoue K, Takanashi J, Sasaki M, Watanabe K, Suzuki M, Kurahashi H, Omata T, Tanaka M, Yokochi K, Iio J, Iyoda K, Kurokawa T, Matsuo M, Sato T, Iwaki A, Osaka H, Kurosawa K, Yamamoto T, Matsumoto N, Maikusa N, Matsuda H, Sato N	The magnetic resonance imaging spectrum of Pelizaeus-Merzbacher disease: A multicenter study of 19 patients.	Brain Dev 38(6),571 – 580,06,2016	目的: Pelizaeus-Merzbacher病(PMD)の画像スペクトルを臨床経過および遺伝的背景と関連させて過渡的に評価した。 方法: 14の病院の統合されたWebベースのMRIデータ収集システムを使用して、遺伝的に証明された19人のPMD患者(0-28歳のすべての男性)の磁気共鳴画像(MRI)所見を収集した。低ミエリン化のパターンは、主として、T2強調画像(T2WI)における大脳、皮質脊髄路および脳幹のシグナルによって決定された。我々は、T1加重画像(T1WI)およびT2WIの髄鞘形成の年齢の程度を独立して評価し、小脳および口腔萎縮を評価した。臨床的重症度および遺伝的異常(プロテオリビッドタンパク質遺伝子PLP1の因果的突然変異)を、画像所見と一緒に分析した。 結果: T2WIで脳幹および皮質脊髄路が異常に高い強度を示した場合、臨床段階はより深刻になる傾向があった。脳幹の異常は、PLP1点突然変異を有する患者においてのみ観察された。T1WIで4ヶ月以上の髄鞘形成期を有する8人の患者の症例は、軽度の臨床表現型と関連していた。それらのうち4例はT1WIでほぼ完全な髄鞘形成を示したが、T1WIとT2WIの間の髄鞘化年齢には差異があった。PLP1点突然変異を有する1人の患者において、T2WIでの髄鞘形成のランダムかつ斑状のパターンが認められた。7人の追跡調査患者のうち3人において、高度の髄鞘形成が観察された。4人の患者は小脳の萎縮を有し、17人の患者は脳梁の萎縮を有していた。 結論: 今回の多施設共同研究は、PMDの画像所見の幅広い多様性を実証しています。画像所見は臨床的重症度とよく相関しており、潜在的にPMDの臨床評価の優れた指標となりうる。PMD患者の臨床的重症度を評価するには、MRI所見のスペクトルを覚えておく必要がある。
278	Jalsrai A, Numakawa T, Kunugi H, Dieterich DC, Becker A.	The neuroprotective effects and possible mechanism of action of a methanol extract from Asparagus cochinchinensis: In vitro and in vivo studies.	Neuroscience 13(322),452 – 463,05,2016	
279	Tanokashira D, Mamada N, Yamamoto F, Tamaoka A, Lakshmana MK, Araki W	The neurotoxicity of amyloid $\beta$ -protein oligomers is reversible in a primary neuron model.	Mol Brain 10,4 – ,01,2017	アルツハイマー病の発症に大きく関わる $\beta$ アミロイドの集合体による神経細胞毒性は、可逆的で回復可能なことを初代培養神経細胞モデルで実証した。
280	Okamoto Y, Ishitobi M, Wada Y, Kosaka H1.	The Potential of Nasal Oxytocin Administration for Remediation of Autism Spectrum Disorders.	CNS Neurol Disord Drug Targets. 15(5),564 – 577,05,2016	ASD患者に対するオキシトシンの単回経鼻投与および長期投与の有効性と安全性を調べた過去の研究を引用し、論じた。全ての研究で良好な忍容性が報告され、重篤な副作用の報告も認められなかった。有効性に関しては未だ議論の余地があり、幾つかの研究では明確なASDの中核症状の改善が報告されている一方、全く有効性が報告されていない研究もある。オキシトシン投与の有効性に影響する要因を明確にするために、投与スケジュール(投与総量、頻度など)や研究対象者の特徴(年齢、性、知的能力など)による影響を分析する必要がある。(250文字)
281	Hakamata Y, Sato E, Komi S, Moriguchi Y, Izawa S, Murayama N, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H	The pulvinar activity to unattended fearful faces is modulated by attentional bias toward threat	Sci Rep 6,34777 – ,10,2016	視床の一部が不安に関わる認知バイアスの形成に関わることを示した

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
282	Harigane M, Suzuki Y, Yasumura S, Ohira T, Yabe H, Maeda M, Abe M	The Relationship between Functional Independence and Psychological Distress in Elderly Adults Following the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident: The Fukushima Health Management Survey.	Asia Pacific Journal of Public Health 29(2),120S - 130S,03,2017	東日本大震災、福島原発事故後の高齢者における心理的不調と機能的自立について検討した。心理的不調は、基本的属性、災害関連要因を調整しても、機能的自立の低さと関連していた (OR = 2.32, 95%CI = 1.97-2.73)。高齢者の自立を支援する際には、心理的健康に配慮する必要がある。
283	Nishi D, Su KP, Usuda K, Chiang YJ, Guu TW, Hamazaki K, Nakaya N, Sone T, Sano Y, Tachibana Y, Ito H, Isaka K, Hashimoto K, Hamazaki T, Matsuoka YJ.	The synchronized trial on expectant mothers with depressive symptoms by omega-3 PUFAs (SYNCHRO): Study protocol for a randomized controlled trial	BMC Psychiatry 16(1),321 - 321,09,2016	オメガ3系脂肪酸が妊婦のうつ症状軽減に有効かどうかを日本と台湾で検討する多施設共同の二重盲検並行群間ランダム化比較試験の研究計画書を発表した。
284	Wei CY, Chiu PY, Hou PN, Matsuda H, Hung GU	The Value of 99mTc ECD SPECT With Statistical Image Analysis on Enhancing the Early Diagnosis of Primary Progressive Aphasia.	Clin Nucl Med 42(2),117 - 120,02,2017	短期記憶が不良な64歳の女性が、アルツハイマー病の早期発見と疑われた。脳血流SPECTを鑑別診断のために行った。軽度の低灌流の小さな領域が、従来のディスプレイ上の左側頭葉に認められた。eZISを用いたSPECTのさらなる統計分析は、進行性非流暢性失語(PPA)の典型的な写真と適合する、左前中心およびシルビウス裂周囲皮質領域ではっきりとした低灌流を示したが、アルツハイマー病に特有の領域には関与しなかった。さらに詳細な神経心理学的検査および6ヶ月間の臨床的追跡調査により、PPAの最終診断が確認された。
285	Wei CY, Chen TY, Shih I, Chiu PY, Hung GU, Matsuda H.	The value of eZIS analysis of Tc-99m ECD SPECT on identifying cerebellar hypoperfusion in a patient with superficial siderosis: A case report.	Medicine (Baltimore). 95(47),e5416 - ,11,2016	脳血流単一光子コンピュータ断層撮影法(SPECT)は、機能的イメージングモダリティであり、様々な種類の神経学的疾患の評価に広く利用されている。Easy z-score imaging system(eZIS)は、Tc-99m ECD脳灌流SPECTの客観的解釈を提供する年齢別エチルシステイン二量体(ECD)正常データベースとの比較に基づいたコンピュータ支援統計分析である。めまい、回転感覚、吐き気、嘔吐を呈した64歳の男性で、救急室で脳のCT検査では小脳の低吸収のみが示された。潜在的脳虚血、梗塞および/または変性を評価するためにTc-99m ECD SPECTを実施したが、従来の表示法では経験豊富な読影者によっても顕著な異常は確認されなかった。eZISの結果は、小脳における顕著な低血流および両側前頭葉および頭頂葉の軽度の低血流を示した。磁気共鳴イメージング(MRI)は、前小脳葉の重度の萎縮を示した。さらに、MRIは、特にSPECTにおける低血流を伴う領域で、表在性のヘモジデロシスを検出した。この事例は、まれな疾患における予想しがたい領域で脳病変を検出する脳灌流SPECTの診断価値を高めることに関するeZISによるソフトウェア分析の価値を示している。
286	Oe M, Fujii S, Maeda M, Nagai M, Harigane M, Miura I, Yabe H, Ohira T, Takahashi H, Suzuki Y, Yasumura S, Abe M	Three-year trend survey of psychological distress, post-traumatic stress, and problem drinking among residents in the evacuation zone after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident [The Fukushima Health Management Survey].	Psychiatry Clin Neurosci. 70(6),245 - 252,06,2016	福島第一原子力発電所で避難を余儀なくされた住民の精神的な不調、トラウマ反応、問題飲酒の経年的傾向を検討した。震災から3年後でも、心理的不調を示したものの割合は、平常時よりも多かった。時間の経過とともに、心理的不調、トラウマ反応を示す人の割合は減少していたが、問題飲酒をもつ人の割合に変化は見られなかった。被災住民に対する長期的な支援が必要であることが示唆された。
287	Kleiter, I., I. Ayzenberg, M. Araki, T. Yamamura, and R. Gold	Tocilizumab, MS, and NMO	Mult Scler 22(14),1891 - 1892,04,2016	抗IL-6受容体抗体のMSやNMO治療に関する意義をめぐって、イタリアから問題の多い論文が発表された。我々はドイツの研究者と共同で、論文の問題点を指摘した



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
288	Kito S, Hasegawa T, Takamiya A, Noda T, Nakagome K, Higuchi T, Koga Y.	Transcranial Magnetic Stimulation Modulates Resting EEG Functional Connectivity Between the Left Dorsolateral Prefrontal Cortex and Limbic Regions in Medicated Patients With Treatment-Resistant Depression.	J Neuropsychiatry Clin Neurosci. appineuropsych15120419 - ,11.2016	左前頭前皮質に対する高頻度磁気刺激(rTMS)は治療抵抗性のうつ病に対して有効であることが報告されているが、機能的結合に対する影響は未だ明らかでない。治療抵抗性うつ病患者14名を対象にrTMS施行前後の機能的結合について、LORETAによる安静時脳波解析を用いて、その変化を検討した。その結果、左前頭前皮質に対する高頻度rTMSは、左背外側前頭前皮質と帯状皮質膝下部、海馬傍回を含む辺縁系との機能的連結を調節する可能性が示唆された。
289	Ito, M., Horikoshi, M., Kato, N., Oe, Y., Fujisato, H., Nakajima, S., . . . Ono, Y.	Transdiagnostic and Transcultural: Pilot Study of Unified Protocol for Depressive and Anxiety Disorders in Japan.	Behav Ther 47(3),416 - 430,04,2016	本論文は、うつ病と不安症を対象とした認知行動療法の統一プロトコルの予備試験の結果を報告したものである。この研究では、日本人のうつ病と不安症の患者に対して統一プロトコルを実施し、うつ病と不安症の症状において有意な改善を示していたことが報告された。また、重篤な有害事象が発生せず、臨床試験や統一プロトコルの実施可能性についても確認された。
290	Tomioka I, Ishibashi H, Minakawa EN, Motohashi HH, Takayama O, Saito Y, Popiel HA, Puentes S, Owari K, Nakatani T, Nogami N, Yamamoto K, Noguchi S, Yonekawa T, Tanaka Y, Fujita N, Suzuki H, Kikuchi H, Aizawa S, Nagano S, Yamada D, Nishino I, Ichinohe N, Wada K, Kohsaka S, Nagai Y, Seki K	Transgenic Monkey Model of the Polyglutamine Diseases Recapitulating Progressive Neurological Symptoms	ENEURO 4(2),eCollection - eCollection,03,2017	アルツハイマー型、パーキンソン病、ポリグルタミン病を含む加齢に伴う神経変性疾患は長寿化により、有病率が高くなってきた。これらの疾患研究のために、これまで多様なげっ歯類モデルの解析がなされてきたが、ヒトの様々な違いにより解析結果の解釈には限界がある。そこで我々は、運動機能障害を含む進行性の神経症状をポリグルタミン病の遺伝子組み換えマーマーモセットモデルを作製した。ヒトのアタキシン遺伝子のエクソン3に120のCAGリピートの伸長をレンチウイルスで導入し、7頭のモデルマーマーモセットを得た。高い遺伝子組み換え効率を示した3頭において、生後3-4か月後には様々な度合いの神経症状を呈し、経時的に体重・自発運動・握力が低下した。病理解析では、神経変性、グリオシスを伴う核内ポリグルタミン酸封入体といったポリグルタミン病の神経病理所見が再現された。発症マーマーモセットの脳MRI解析では第四脳室の拡張しており、小脳萎縮が考えられ、これは小脳のニューロン欠損と矛盾しない結果であった。もう一つ重要な点として、導入遺伝子の継代にも成功した。異常タンパク質の蓄積は、様々な神経変性疾患において共通して見られるため、我々の作出した新たなマーマーモセットモデルは神経変性疾患の発生機序の解明やその治療法の開発に寄与するものと考えられる。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
291	Yagishita S, Suzuki S, Yoshikawa K, Iida K, Hirata A, Suzuki M, Takashima A, Maruyama K, Hirasawa A, Awaji A	Treatment of intermittent hypoxia increases phosphorylated tau in the hippocampus via biological processes common to aging.	Molecular Brain 10(2),01,2017	<p>睡眠時の呼吸障害(SDB)は認知機能低下を引き起こすのみならず、アルツハイマー病(AD)との関連性が指摘されている。実際、SDBの動物モデルである間欠的低酸素負荷(IHT)モデルでは、認知機能障害が報告されているが、そのメカニズムは不明であった。そこで我々は、マウスにIHTを施し、その海馬から抽出したRNAを用いて、Gene Ontology (GO)に基づいたマイクロアレイ解析を実施した。既存のデータベースに登録されているデータとの網羅的な比較によって、IHTが起こす変化と加齢が起こす変化との間に類似性を見出し、両者の間に共通する生物学的過程の存在を明らかにした。さらに、その共通の生物学的過程は、Dicerの欠損やグルタミン酸受容体関連シグナルの活性化によっても、同様に変動することが分かった。</p> <p>一方、IHTを施したマウスの海馬では、タウのリン酸化の顕著な亢進が認められ、また、その際のmTORシグナリングの活性化が示唆された。これらの結果は、前述のマイクロアレイ解析結果から予測されたことでもあった。この事実は、本研究で実施したin silico解析の妥当性を示すものでもあり、ビッグデータから意味あるデータや解釈の抽出の好例を提示したといえる。</p> <p>IHTモデルは、Y字迷路試験での過活動を示した。また、IHTの実施期間を延長すると、後シナプスタンパク質が減少することも明らかにした。これらの現象は、ADと密接に絡んでいる。</p> <p>ADの危険因子の一つは加齢であるが、加齢の影響を考慮した実験モデルは乏しい。我々はこの研究で、IHTを施すことによって、加齢で起こる反応の一部を促進させられることを明らかにした。IHTは比較的簡単に実施可能であるため、今後、ADのような加齢と密接に関連した疾患研究のに用いられていくことが期待される。</p>
292	Takeuchi F, Komaki H, Nakamura H, Yonemoto N, Kashiwabara K, Kimura E, Takeda S	Trends in steroid therapy for Duchenne muscular dystrophy in Japan.	Muscle Nerve. 54(4),673 - 680,07,2016	本邦のプレドニゾン治療をうけるデュシェンヌ型筋ジストロフィー患者157名を対象に、2000-2004年、2005-2009年、2010-2013年の各フェーズにおける、プレドニゾン内服の頻度、内服量、内服開始時期について調べた。プレドニゾン内服法は、次第にEBMに準拠して行く傾向が見られた。
293	Suzuki K, Kita Y, Sakihara K, Hirata S, Sakuma R, Okuzumi H, Inagaki M	Uniqueness of action monitoring in children with autism spectrum disorder: Response types and temporal aspects	Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology (39),12,2016	自閉症スペクトラム障害(ASD)児と定形発達児のフランク-課題遂行中の事象関連電位成分を検討した。刺激に同期した事象関連電位N2は、定形発達児よりもASD児で小さかった。また、エラー関連陰性電位は、定形発達児よりもASD児で大きかった。ASDの特徴である細部焦点型注意スタイルや固執性が、反応モニタリングに影響を与えることが明らかになった。
294	Adachi Y, Sato N, Saito Y, Kimura Y, Nakata Y, Ito K, Kamiya K, Matsuda H, Tsukamoto T, Ogawa M	Usefulness of SWI for the Detection of Iron in the Motor Cortex in Amyotrophic Lateral Sclerosis	J Neuroimaging Epub ahead of print,doi:10.1111/jon.12127 - .06,2016	筋萎縮性側索硬化症患者におけるMRISWIの有用性に関する検討。
295	Sumiyoshi C, Fujino H, Sumiyoshi T, Yasuda Y, Yamamori H, Ohi K, Fujimoto M, Takeda M, Hashimoto R.	Usefulness of the Wechsler Intelligence Scale short form for assessing functional outcomes in patients with schizophrenia.	Psychiatry Research 245,371 - 378,11,2016	知能評価に用いられるWechsler Adult Intelligence Scale (WAIS)第3版を、統合失調症を対象とした研究などで簡便に用いるための短縮版を作成した。155名の患者と221名の健常者から得たデータを解析した結果、「類似課題」と「記号探し課題」の組合せ(従来の10%である8分半で施行可能)により、全IQを良好に予測できた。さらに同短縮版によるスコアは、患者において日常生活技能、社会機能と強い相関を示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
296	Kimura K, Morita H, Daimon M, Horio M, Kawata T, Nakao T, Hirokawa M, Kitao R, Watanabe D, Komori T, Nagata T, Takeda S, Komaki H, Segawa K, Nakajima T, Takenaka K, Komuro I	Utility of Cystatin C for Estimating Glomerular Filtration Rate in Patients With Muscular Dystrophy.	Int Heart J. 57(3),386 - 388,05,2016	筋ジストロフィー患者では、腎臓系球体濾過量の評価に、筋量低下の影響を受けない血清シスタチンC値の測定が有用であることを示した。
297	Gosho Masahiko, Maruo Kazushi, Tada Keisuke, Hirakawa Akihiro	Utilization of chi-square statistics for screening adverse drug-drug interactions in spontaneous reporting systems.	European journal of clinical pharmacology First Online,03,2017	薬物相互作用は、血中に複数種類の薬物が存在することにより、薬物の作用に対して影響を与えることであるが、この作用によりいずれかの薬剤の血中濃度が単剤服用時よりも高くなった場合に副作用が発現する恐れがある。本研究では副作用自発報告データにおいて薬物相互作用が引き起こす副作用を検出する統計的基準を提案した。統計的シミュレーションと実データの解析に基づき、提案法が誤検出を許容可能な水準で制御し、既存法よりもより高い感度を持っていることを示した。
298	Tomizawa R, Yamano M, Osako M, Hirabayashi N, Oshima N, Sigeta M, Reeves S	Validation of a global scale to assess the quality of interprofessional teamwork in mental health settings	J Ment Health online journal,1 - 8,07,2016	多職種チームの質を測定するための尺度を開発し、英語版、および日本語版の信頼性、妥当性を検証した。
299	Oda C 1)2), Yamamoto T 3), Fukumoto Y 4), Nakayama K 1), Sato M 1), Murata M 1)3), Kobayashi Y 1)	Validation of the Japanese translation of the Dysphagia Handicap index	Patient Preference and Adherence 2017(11),193 - 198,02,2017	米国で開発された、嚥下障害のQOLを測る自記式質問紙Dysphagia Handicap Indexの日本語版(DHI-J)を作成し、信頼性と妥当性を調べた。対象は研究同意が得られた患者229人、健常者65人であった。DHI-Jの内的整合性は高かった。また、級内相関係数は高かった。患者の総点および下位項目の得点は、いずれも健常者のそれよりも高かった。すなわち、患者のQOLは低かった。以上からDHI-Jは嚥下障害患者のQOLを測る信頼性、妥当性のある質問紙と考えられた。
300	Sone D, Ota M, Maikusa N, Kimura Y, Sumida K, Yokoyama K, Imabayashi E, Watanabe M, Watanabe Y, Okazaki M, Sato N, Matsuda H.	White matter abnormalities in patients with temporal lobe epilepsy and amygdala enlargement: Comparison with hippocampal sclerosis and healthy subjects.	Epilepsy Res 127,221 - 228,09,2016	FreeSurferソフトウェアを用いた自動扁桃体ボリューム法に基づくALE (TLE-AE)の片側性TLE患者17人を選択し、34人の健常対照群とHS (TLE-HS)を有する片側TLE患者35人を募集した。続いて、SPM8ソフトウェアを用いて、3つの群の灰白質(GM)およびWM体積および拡散異方性(FA)の差異を分析した。GMの体積分析は、AEおよびHSを有するTLE (すなわち、TLE-AEにおける扁桃体の増加およびTLE-HSにおける近心側頭萎縮)の構造的特徴と一致する結果を得た。WMの量では、TLE-AE患者のみが主に同側頭葉にWM減少を示した。対照と比較して、TLE-AE群は、同側前帯状回および脳梁において有意なFA減少を示したが、TLE-HS群では、全大脳におけるFA減少の延長が観察された。ALEを有するTLE患者のWMIに関する知見は、扁桃体と前頭前野皮質との間の解剖学的および機能的結合などの特徴的な病態生理を反映する可能性があり、したがって、我々の結果は、AEを有するTLEについての洞察を提供し得る。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
301	Danjo K, Furukori H, Sato Y, Tomita T, Fujii A, Nakagami T, Kitaoka K, Yasui-Furukori N.	Work-family conflict as a mediator between occupational stress and psychological health among mental health nurses in Japan.	Neuropsychiatr Dis Treat 13,779 - 784,03,2017	本研究は、日本の精神科看護師において、これまでよく知られた職業ストレスと精神的健康の関係性のなかで、仕事と家族間の葛藤(WFC)が、どのような役割を果たすかについて検討したものである。婚姻しているか、同居する子どもを有する180人の精神科看護師について横断調査を実施した。ワーク・ファミリー・コンフリクト(WFC)尺度、NIOSH職業ストレス質問票(GJSQ)、バーンアウト測定尺度(MBI-GS)、疫学的抑うつ尺度(CES-D)を実施した。階層的重回帰分析により職業性ストレスがWFCを介してバーンアウトや抑うつ症状に関連することが明らかにされた。WFCは医療従事者における精神的不調のリスク因子になるかもしれないが、この発見は縦断的デザインによる検証が必要である。
302	Hitomi T, Kobayashi K, Sakurai T, Ueda S, Jingami N, Kanazawa K, Matsumoto R, Takahashi R, Ikeda A	Benign adult familial myoclonus epilepsy is a progressive disorder: no longer idiopathic generalized epilepsy	Epileptic Disord 18,67-72,03,2016	
303	Mitoma H, K.Adhikari, D.Aeschlimann, P.Chattopadhyay, M.Hadjivassiliou, C.S.Hampe, J.Honnorat, B.Joubert, Kakei S, J.Lee, M.Manto, Matsunaga A, Mizusawa H, Nanri K	Neuroimmune Mechanisms of Cerebellar Ataxias: Cerebellum	Consensus Paper. 15(2),213-232,03,2017	近年、免疫介在性機序が小脳性失調症で注目されており、このコンセンサス論文でそれらの臨床的特徴や発症機序について論じる。そこには、抗GAD抗体関連小脳失調症、小脳型橋本病、原発性自己免疫性小脳失調症、グルテン失調症、Miller Fisher症候群、SLEに伴う失調症、傍腫瘍性小脳変性症が含まれ、液性機序、細胞介在免疫、炎症、血管障害が関与している。
304	Hirai M, Muramatsu Y, Mizuno S, Kurahashi N, Kurahashi H, Nakamura M.	Preserved search asymmetry in the detection of fearful faces among neutral faces in individuals with Williams syndrome revealed by measurement of both manual responses and eye tracking.	Journal of Neurodevelopmental Disorders 2017,03,03,2017	ウィリアムズ症候群(WS)の社会性の亢進は恐怖情報を処理する扁桃体の機能と関わりとの報告されている。明確な証拠はないため今回、視線追従装置を用いて顔探索課題を行った。WSの顔探索時間は知能を統制した定型群とほぼ同じであり、年齢対照群よりも遅延した。WS小児は中性顔に埋もれた恐怖中性顔を探索する時間は対照群より長かったが、認知過程は定型パターンであった。これらからWSの扁桃体機能について議論を行った。
305	渡邊 理, 藤井千代, 佐久間 啓, 安藤久美子, 岡田幸之, 水野雅文	「精神科事前指示」作成支援ツール開発の試み	精神医学 59(2),159 - 167,02,2017	患者の同意判断能力が欠如している場合でも、自律性を尊重した精神科医療を実践するための方法として「精神科事前指示」が知られている。本研究では精神科事前指示支援ツールを作成し、患者本人の意見を基に修正を行い、精神科事前指示作成の意義について考察した
306	松原三郎, 安西信雄, 太田順一郎, 大森哲郎, 小高 晃, 佐藤茂樹, 佐野威和雄, 羽藤邦利, 三國雅彦, 山之内芳雄, 吉住 昭, 渡辺義文	「病床機能分化と地域移行」に関する学会員へのアンケート調査結果報告	精神神経学会誌 118(9(別冊)),680 - 687,09,2016	精神医療の「病床機能分化と地域移行」に関して、精神科医の意識を調査した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
307	精神医療・保健福祉システム委員会:黒田研二, 岩成 秀夫, 太田 順一郎, 根本 康, 吉住 昭, 新垣 元, 安西 信雄, 池田 学, 磯村 大, 一瀬 邦弘, 伊藤 哲寛, 大海 聖子, 大森 哲郎, 岡崎 伸郎, 加藤 春樹, 小高 晃, 佐竹 直子, 佐藤 茂樹, 佐藤 忠彦, 佐野 威和雄, 関 健, 竹島 正, 羽藤 邦利, 松原 三郎, 三國 雅彦, 水野 雅文, 三野 進, 森村 安史, 門司 晃, 渡辺 義文, 山下 俊幸, 山之内 芳雄	【資料】都道府県による精神疾患の医療計画に関する分析と提言	精神神経学雑誌 118(4),199 - 211,04,2016	各都道府県における精神疾患の医療計画の分析と今後の提言
308	横山晶一郎, 小出彩香, 西野一三, 林由起子, 大木寛生, 三浦 大, 澁谷和彦	ACTA1 変異を伴うネマリンミオパチーに合併した肥大型心筋症の1例	日本小児循環器学会雑誌 32(2),181 - 186,05,2016	先天性ミオパチーの一つであるネマリンミオパチーには, 従来心筋症の合併は少ないとされてきた. 今回われわれは, ACTA1遺伝子変異を伴うネマリンミオパチーに, 非典型的な肥大型心筋症を合併した症例を経験した. 1歳6か月時に歩容異常, 2歳時に筋力低下および筋萎縮, 7歳時に肥大型心筋症を指摘され, 8歳時に筋生検で病理組織所見からネマリンミオパチーと診断し, ACTA1遺伝子の変異が同定された. 心臓超音波検査および心臓カテーテル検査で心基部と心尖部の中間付近の壁が同心円状に肥大し, 著明な拡張障害を伴う特徴的所見を示していた. $\beta$ 遮断薬を導入したところ心不全症状が増悪し, その治療中に心室細動を発生, 9歳5か月で永眠した. これらの特徴は, 心筋での細いフィラメントの遺伝子変異を伴う肥大型心筋症の特徴として報告されている所見に合致する. 心臓合併症は稀とされるネマリンミオパチーにおいても, 心筋症で致死となる症例があり, 慎重な心機能の評価および適切な治療が必要である.
309	Kunugi H	Depressive Disorder and Gut-brain Interaction	Brain Nerve 68(6),641 - 646,06,2016	昨今の研究より腸内細菌とストレスとの関連が注目を浴びている. 今回, ビフィズス菌とラクトバチルスといった腸内細菌とうつ病との関連について検討を行った.
310	Dai H, Goto Y, Itoh M	Insulin-Like Growth Factor Binding Protein-3 Deficiency Leads to Behavior Impairment with Monoaminergic and Synaptic Dysfunction	Am J Pathol 187(2),390 - 400,02,2017	ヒトで自閉症等の症状を示すレット症候群の原因遺伝子であるMecp2は種々の遺伝子発現に関わる. 下流の遺伝子の一つとして我々が報告したIGFBP3について, そのノックアウトマウスを作製して解析を行ったところ, mecp2ノックアウトマウスと同様な神経細胞の形態異常を見いだした. このことから, レット症候群の部分症状にIGFBP3の発現変化が関わっていることが明らかになった.

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
311	向井洋平、村田美穂	J-PPMI(パーキンソン病発症予防のための運動症状発症前バイオマーカーの特定研究)	日本臨床 75(1),151 - 155,01,2017	
312	Hatakeyama H, Goto Y	Respiratory Chain Complex Disorganization Impairs Mitochondrial and Cellular Integrity: Phenotypic Variation in Cytochrome c Oxidase Deficiency	Am J Pathol 187(1),110 - 121,01,2017	チトクロームc酸化酵素欠損症患者の培養細胞を用いて、酵素活性、蛋白量、アッセムブリー状態などの解析を行うことで病態解析が可能であることを示した。
313	Kobayashi Michio, Ishizaki Masatoshi, Adachi Katsuhito, Yonemoto Naohiro, Matsumura Tsuyoshi, Toyoshima Itaru, Kimura En	Survey on genetic counseling and health management for symptomatic and asymptomatic female dystrophinopathy carriers in Japan today.	Rinsho shinkeigaku = Clinical neurology 56(6),407 - 12,06,2016	
314	小林道雄, 石崎雅俊, 足立克仁, 米本直裕, 松村剛, 豊島至, 木村 円	ジストロフィン異常症保因者の遺伝カウンセリング・健康管理の実態に関する調査	臨床神経学 56(6),407 - 412,06,2016	
315	新井麻子、中川栄二	ミシュランタイヤ児症候群が疑われた1p36欠失症候群例	小児科 57(7),961 - 965,06,2016	
316	永田 貴子, 平林 直次, 立森 久照 他	医療観察法指定入院医療機関退院後の予後調査	精神医学 58(7),633 - 643,07,2016	医療観察法の施行から約10年が経過し、対象者の社会復帰状況には社会的な関心が寄せられている。我々は、保護観察所の協力を得て通院処遇対象者累積402名(794人・年)の主診断、再他害行為、自殺、精神保健福祉法入院、社会資源の活用、就労などを調べた。重大な再他害行為は、低い水準にとどまっていた。一般人口に対する標準化死亡比(SMR)は3.84であった。精神保健福祉法による入院は、退院6か月後27.8%、1年後32.1%で、初回入院の6割は任意入院であった。対象者の9割以上が訪問看護など何らかの地域精神保健サービスを利用していた。約1割の者に就労経験が認められた。本調査結果からは、退院後の地域処遇が効果的に実施されている可能性が示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
317	河野稔明, 岡田幸之, 平林直次	医療観察法入院処遇に適した在院期間代表値の選定-3つの平均値に着目して	司法精神医学 12(1),11 - 18,03,2017	
318	河西ひとみ, 辻内琢也, 藤井靖, 野村忍	過敏性腸症候群患者の治癒プロセスに関する質的研究-複線径路等至性モデルによる検討-	心身医学 57(1),59 - 68,01,2017	本研究は, 過敏性腸症候群 (IBS) の軽快・治癒プロセスを明らかにすることを目的とし, 主観的に軽快・治癒に至った7名のIBS患者にインタビューを行った. 分析には質的研究法の複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : TEM) を使用した. 結果, プロセスは3型に分けられ, すべての型が「IBS症状の発現」から「とらわれ」, 次に「対処行動」と「IBS症状の一部軽快」に至るまでは同じ径路をたどったが, 以降の径路は「環境調整」と「心理的葛藤に直面」に分岐した. 分岐後は, いずれの径路を選択した型も, サポート資源を受け取ることによって, すべての型において「受容的諦め」, 「人生観の変化」, 「IBS体験への肯定的意味づけ」という認知的変容体験を経て, 主観的な軽快・治癒に至った. また, 7例中3例において, 他者からの受容・共感と, 変化への圧力の相補的な働きがプロセスを推し進めた可能性が示唆された.
319	金 吉晴	外傷性悲嘆とトラウマ. 特集 神経症性障害と抑うつ-その相互作用と臨床的意義, 治療について-	精神神経学雑誌 118(7),516 - 521,07,2016	外傷性悲嘆は1990年代後半にPrigersonによって主張されたが, その後, 遷延性悲嘆, 複雑性悲嘆などの概念に取って代わられた. 病理としては愛着対象の喪失が重視される傾向にあるが, 喪失の出来事がPTSDの出来事基準を満たすようなトラウマ的性質をもっている場合にはトラウマ的性質については忘却を, 故人については追想を願うという矛盾した心理が生じ, 臨床的にもトラウマ反応の視点を取り入れた格別の配慮が求められる. DSM-5の持続性複雑死別障害の診断基準においても外傷性死別が下位項目として挙げられているゆえんである. 外傷性死別に続発する場合同様に外傷性悲嘆として意識する必要がある. しかし, 臨床カテゴリーとしての意義については治療反応性, 病態についての今後の研究を待たなくてはならない.
320	瀧元沙祈, 中知華穂, 銘苅実土, 後藤隆章, 雲井未歎, 小池敏英	学習障害児における改行ひらがな単語の音読特徴: 音読の時間的側面と誤反応の分析に基づく検討	特殊教育学研究 54(2),65 - 75,07,2016	
321	高澤 英嗣, 阿部 十也, 飯塚 伯, 設楽 仁, 高岸 憲二, 花川 隆	機能的MRIを用いた神経イメージングによる脳脊髄の神経機能評価法の開発	Journal of Spine Research 7(9),1366 - 1372,09,2016	脳脊髄機能的MRIの技術開発についてのレポート
322	古島わかな, 中川栄二, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行	急性肺炎によりLance-Adams症候群類似症状を呈したダウン症候群	日本重症心身障害学会誌 41(1),125 - 130,04,2016	
323	長田治, 岩崎章, 西野一三, 埜中征哉, 後藤雄一	高度のミトコンドリアDNAA3243G変異率と臨床経過との関連が示唆されたMELASの一例	神経内科 83(6),520 - 524,12,2016	筋での変異率が92%で, 臨床経過と変異率の関係を考察した.

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
324	山崎広子、柴玉珠、関根久恵、岩淵一馬、 稲垣真澄、加我牧子	国府台病院眼科における知的障害者専門外来：開設後10年の状況	臨床眼科 10,2016	【目的】知的障害者の眼科専門外来開設後10年の診療状況を報告する。 【方法】受診時年齢、原疾患、主訴、眼科的診断、治療法を検討した。【結果】総数は239名で、初診時16歳以上が半数を占めた。原因不明例が多く、ダウン症、脳性麻痺、自閉症などが続いた。主訴は視力低下、眼位異常、眼瞼下垂、外眼部の異常で、白内障(63例)、網膜剥離(17例)、斜視(67例)の診断が確定した。白内障術後には8割以上で視力が改善した。 【結論】知的障害者が受診しやすい環境作りと丁寧な検査により確定診断や適切な治療法選択につながる。視力向上がみられる症例も多く、眼科専門外来は知的障害者のQOL向上に貢献していると考えた。
325	五郡直也、前田千織、横田悠季、服部功太郎、木村 円	腰椎穿刺後の頭痛に対する精神状態の影響	総合病院精神医学 28(3),243 - 248,06,2016	
326	大沼麻実、篠崎康子、金 吉晴	災害時の不安対応と心理的応急処置PFA(サイコロジカル・ファーストエイド)。シリーズ：内科医と災害医療。	日本内科学会雑誌, 106,130 - 132,01,2017	災害時に起こりうる不眠、不安を取り上げ、的確かつ迅速な対応方法を説明するとともに、WHO版PFA(psychological first aid, サイコロジカル・ファーストエイド)を取り上げ、被災者が現状以上の被害を受けないように安全や安心を確保し、尊厳や文化に配慮しながら支援を行うための枠組みについて説明している。また本編に加え、災害時の持参用に災害医療活動アクションカードを作成した。
327	齊藤彩・松本聡子・菅原ますみ	児童期後期の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの関連-養育要因と自尊感情に着目して-	パーソナリティ研究 25(1),74 - 85,06,2016	
328	中西陽, 石川信一, 神尾陽子	自閉的特性を強く示す中学生に対する通常学級での集団社会的スキル訓練の効果	教育心理学研究 64,544 - 554,02,2017	中学校通常学級において社会的スキル訓練(SST)が、自閉スペクトラム症特性(autistic-like trait: ALT)を強く持つ生徒に効果があるかどうかを検証することを目的に、SSTを3回実施する介入群と実施しない統制群において、それぞれ高ALT群と低ALT群に分けて介入前後で社会的スキルと学校適応感に変化があるかどうか調べた。研究の結果、SST介入群では統制群と比べて好ましい変化がみられたが、高ALT群と低ALT群とは異なる効果、すなわち、前者では社会的スキルの向上と身体的ストレス反応の低下が、後者では学校適応感の向上が認められた。これより、生徒の認知特性によって効果の側面は異なるが、SSTはユニバーサルなプログラムとして有用である可能性が示唆された。
329	加賀佳美、石井佐綾香、黒田格、神谷裕子、中村幸介、金村英秋、杉田完爾、相原正男	重症心身障害者の骨粗鬆症に対する静注用alendronateの有効性	脳と発達 49,113 - 119,03,2017	骨粗鬆症を持つ重症心身障害者(重症者)に対して静注用BP製剤(alendronate)を継続的に投与し、その有効性について検討した。20~60歳の重症者のうち骨粗鬆症が判明した62例を二群(BP投与群32例と対照群30例)に分けた。評価項目を骨密度量、血中骨代謝マーカーとして、投与前および後(6ヵ月、1年、2年後)で群間比較した。BP投与群では投与6ヵ月後と1年後に投与前と比べて骨密度の変化が有意に増大し、血中骨代謝マーカー値の低下が認められた。2年後の骨密度変化はBP投与群(16例)では有意に増大し、対照群(18例)では低下していた。BP投与による重篤な副作用はなかった。静注用alendronateは、重症者における骨粗鬆症治療薬として安全に投与でき、全般的に有効性があると考えられる



	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
330	臼田謙太郎, 西大輔, 佐野養, 松岡豊	出産に関するプレッシャーと産後抑うつ症状の関連について	総合病院精神医学 28(2),147 - 155,04,2016	産後うつ病の予測因子については国によって異なった要因が報告されており、社会文化的要因の影響が考えられる。日本においては、子どもを産まなければならないというプレッシャーを感じる事が産後の抑うつ症状を予測する可能性があると先行研究から考えられたため、本研究ではその仮説を検討した。12-24週の妊婦をリクルートし、妊娠中と産後1か月時点でエジンバラ産後抑うつ質問票 (EPDS)を実施し、産後のEPDSを従属変数としてロジスティック回帰分析を行った。解析の結果、出産に関するプレッシャーが産後の抑うつ症状を予測しており、妊娠中にプレッシャーの有無を尋ねることは、産後の精神的健康を予測する上で有用な可能性が示唆された。
331	関沢洋一, 宗 未来, 野口玲美, 山口創生, 清水栄司	信頼と心理指標(抑うつ度、不安度、ネガティブ感情、ポジティブ感情)の関係の検証:心理介入によって信頼を向上させることができるか?	RIETI Discussion Paper Series 16-J-050 08,2016	本稿は、オンラインによる認知行動療法(iCBT)やマインドフルネス療法、ポジティブ心理学のエクササイズにおける各種心理尺度の得点に与える効果を測定した無作為化臨床試験であった。研究の結果、ポジティブ心理学のエクササイズは、コントロール群と比較し、一般的信頼尺度(人をどの程度信頼しているか)の得点を有意に改善した。しかし、認知行動療法(iCBT)とマインドフルネス療法では、コントロール群と比較し、一般的信頼尺度に関する効果が見られなかった。
332	西原智恵, 菊地裕絵, 安藤哲也, 岩永知秋, 須藤信行	心身医学的アプローチが有効であった身体表現性障害を合併した食物アレルギーの1例	心身医学 57(3),264 - 271,03,2017	食物アレルギーと身体表現性障害が併存し、身体的介入のみ受けたことで多彩な症状が遷延し高度な生活機能障害にいたったが、心身医学的介入により改善したと考えられた症例について報告した。
333	水野雅之	進路選択に関するサポートの活用に援助要請スキルと小集団閉鎖性が及ぼす影響-友人および父親, 大学教員に注目した検討-	キャリアデザイン研究 (12),191 - 198,09,2016	本研究は進路選択に良好な影響を持つ友人および父親, 大学教員のサポートに注目し, それらのサポートを活用することの促進要因と抑制要因を明らかにした。階層的重回帰分析の結果, 友人と父親については, 援助要請スキルが正の回帰係数を示した。一方, 大学教員については援助要請スキルと小集団閉鎖性の交互作用が有意であり, 小集団閉鎖性が高い場合は援助要請スキルが高くと, サポートが活用されないことが明らかになった
334	山田悠至	生々流転する形而上的自己	哲学の探求 (第43号),229 - 241,06,2016	九鬼周造の自己論
335	山口創生, 佐藤さやか, 松長麻美, 坂田増弘, 大島真弓, 武田裕美, 藤井千代, 細谷章子, 伊藤順一郎	精神科デイケアにおけるアウトリーチ型ケースマネジメントの実装に関するプロセス調査:サービス量分析	臨床精神医学 46(1),91 - 102,01,2017	本研究は前向きのプロセス調査を通して, 精神科デイケアにアウトリーチ型ケースマネジメントを導入した際のサービスの内容や量の多寡について, 検証することを目的とした。研究参加者15名に対する12か月間のサービス提供回数は2,659回であり, サービス提供時間は188,028分(1対1換算サービス提供時間:84,957分)であった。アウトリーチサービスの提供は一人あたり月平均約1回であったが, サービス提供時間は個別サービスの約40%を占めた
336	阿部裕二, 大森由実, 西宮弘之, 伊藤弘人	精神科領域における自記式栄養管理ツールの開発	日本精神科病院協会雑誌 35 (11),73 - 77,11,2016	精神疾患患者の健康管理の基本は生活習慣の改善や食事療法であり、管理栄養士による栄養食事指導が日常的に行われている。本研究では、精神科領域で使用されている食事記録用紙を収集し、特徴を整理して地域包括ケアに資する食事記録の開発を行った。
337	山之内芳雄, 大野美子	精神疾患を合併する救急患者対応の現状と課題	総合病院精神医学 29(1),30 - 36,01,2017	急性期身体合併症医療における精神科と身体科救急との連携

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
338	後藤基行, 中村江里, 前田克実	戦時精神医療体制における傷痍軍人武蔵療養所と戦後病院精神医学-診療録に見る患者の実像と生活療法に与えた影響	社会事業史研究 50,143 - 159,09,2016	NCNPが所蔵する戦中期の診療録等を利用して傷痍軍人武蔵療養所の基礎的研究を行い、また同療養所が戦後の病院精神医学に与えた影響を考察した。1940年から45年までに入所した817名分(全入所者に対し85.7%)の診療録を分析した。傷痍軍人武蔵療養所入所者の84.0%は国府台陸軍病院からの転院だったことが判明し、戦中期において傷痍軍人武蔵療養所は国府台陸軍病院からの難治性患者の移送先としての機能を付与されていたことが分かった。また、病状が重いながらも元軍人患者たちが身につけていた規律的な生活スタイルは、戦後国立武蔵療養所における「生活療法」と呼ばれる治療体系の構築に影響を与えていたことが示唆された。
339	池田朋広, 常岡俊昭, 松本俊彦, 高木のり子, 石坂理江, 種田綾乃, 小池純子, 齋藤勲, 森田展彰, 稲本淳子, 岩波 明	措置指定病院における精神障害と物質使用障害を併せ持つ「精神障害併存性障害者」への集団認知行動療法プログラム実施の意義とその有効性の検討	日社精医誌 26,11 - 24,02,2017	
340	本橋 豊	組織における自殺対策-職場のゲートキーパー養成-	産業ストレス研究 23(4),257 - 260,11,2016	
341	藤本健一, 村田美穂, 服部信孝, 近藤智善,	大規模患者調査で明らかになったパーキンソン病野薬物治療の実態	BRAIN and NERVE(脳と神経) 68(9),1087 - 1098,09,2016	
342	井上祐紀, 奥村泰之, 藤田純一	知的障害児に併存する精神疾患・行動障害への向精神薬処方の実態-大規模レセプトデータベースを活用したコホート研究-	精神神経学雑誌 118(11),823 - 833,11,2016	知的障害児は精神障害や行動障害を頻繁に併存する。本研究では、知的障害児に対する向精神薬の処方実態を把握することを目的とした。大規模レセプトデータベースを用いて、コホート研究を実施し、主要評価項目を向精神薬の処方割合、副次評価項目を処方日数、多剤処方割合、抗精神病薬の平均投与量の割合とした。2,035人うち、抗精神病薬が12.5%、抗不安・睡眠薬が12.4%、ADHD治療薬が4.8%、気分安定薬が2.4%、抗うつ薬が1.8%に処方されていた。抗精神病薬の多剤処方割合と大量処方割合(クロルプロマジン換算300 mg/日超)も年齢の上昇に伴って増加していた。知的障害児に対する行動障害治療ガイドラインや、多剤処方・大量処方ケースのモニタリングなど、知的障害児における有効で安全な薬物療法を担保するための制度的な枠組み作りが求められる。
343	銘苅実土, 中知華穂, 後藤隆章, 小池敏英	中学1-3年生の英単語綴り困難における重複リスク要因に関する研究: 重複リスク要因の学年的特徴に基づく検討	LD研究 25(2),272 - 285,05,2016	
344	高野歩, 宮本有紀, 川上憲人, 松本俊彦	日本における薬物依存症に対するe-Healthの可能性: ウェブ版再発予防プログラム「e-SMARPP」の開発と改良	日本アルコール・薬物医学会雑誌 51(6),382 - 392,12,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
345	大曲めぐみ, 嶋根卓也, 松本俊彦	日本の刑事施設における薬物依存離脱指導の評価方法についての文献レビュー	日本アルコール・薬物医学会雑誌 51(5),335 - 347,10,2016	薬物事犯者の治療的処遇に対する効果検証に資する知見を得るために、日本の刑事施設における薬物依存離脱指導の評価方法について文献レビューを行った。その結果、13件の文献が抽出された。調査デザインについて、比較対照群を設置した介入研究が行われていたのは3件、そのうち1件でRCTが行われていた。釈放後の追跡調査を行っていたのは2件であった。アウトカム指標については、対象者の行動に関する指標と心理指標に分類された。行動に関する指標は再犯と治療継続率があり、3件の文献で使用されていた。心理指標について、最も多く使用されていたものは自己効力感に関する尺度(7件)、次いで薬物依存に対する問題意識と治療に関する動機づけの程度評価;SOCRATES(4件)であった。 現状の日本の制度においては、薬物事犯者への短期的介入の評価として、SOCRATESが最も適したアウトカム指標であることが示唆された。しかし、介入の効果についてより堅固な根拠を得るためには、比較対照群の設定や釈放後の追跡調査の実施や行動に関する指標の追加など、調査のデザインやアウトカム指標について検討する必要がある。今後は、刑の一部執行猶予制度の施行に伴い、薬物事犯者に対する介入機会が増えることが予想される。その評価を縦断的に行うためには、司法分野と医療分野のさらなる連携体制の構築が今後の課題である。
346	石郷岡純, 野田隆政, 西山浩介, 田丸紀子, 島智子, 山崎有美子, 田鳥祥宏	日本の統合失調症患者を対象としたaripiprazole持続性注射	日本神経精神薬理学雑誌 36(3),63 - 68,06,2016	Aripiprazole持続性注射剤(ALAI)は、統合失調症患者の維持治療の為に4週に1回臀部筋肉内投与で承認された。投与部位としての三角筋投与の承認取得のため、日本の統合失調症患者を対象にALAI 400 mgを三角筋内反復投与したときの薬物動態および安全性を非盲検で評価した。その結果、ALAIの三角筋投与は、安全性に特に大きな問題はなく、薬物動態についても臀部筋肉内投与と大きな差がなかったことから、臀部筋肉内投与に加え、投与部位の選択肢のひとつになると考えられた。
347	千葉広毅, 伊藤道哉, 池崎澄江, 伊藤弘人	日本医療・病院管理学誌における学術用語の動向-探索的および計量的分析-	日本医療・病院管理学誌 53(4),227 - 237,10,2016	本研究の目的は、日本医療・病院管理学会で10年間に公表された学術的用語と付帯情報を客観的に分析し、特徴的な用語を抽出し、テーマの傾向を明示することである。2010-2014年ではDPCやレセプトのビッグデータの活用、在宅医療や訪問看護、分析に基づく経営、外国人の受療対応に関連する用語が2009年以前より多く出現する傾向があった
348	島本和恵, 反町吉秀, 岩瀬靖彦	乳幼児の飲料摂取と母親の飲料に対する意識との関連	日本栄養士会雑誌 59(9),25 - 36,09,2016	乳幼児の飲料摂取と母親の飲料に対する意識との関連を明らかにすることを目的とし、9か月～3歳の乳幼児を持つ母親275人に、12種類の飲料の摂取頻度、与える理由・場面についてアンケート調査を実施した。その結果、「水・お茶」以外の飲料も「水分補給」としてほぼ全児に与えられていた。加えて、児の摂取頻度の高い飲料ほど「子どもが好きだから」という理由で与えている母親の割合が高かった。さらに、摂取頻度が高い飲料は年齢階級が上がるに従って増加していた。一方、「水・お茶」以外の飲料を与えない理由(自由回答)として「まだ早い」は上位項目に挙げられ、「食事摂取量・食欲に影響」は挙げられていなかった。水分補給を目的として「水・お茶」以外の飲料を与えている場合、哺乳量や食事量に影響を及ぼすことが周知されていない実態が推察された。与える場面・理由より飲料を類型化した結果からは、類型に応じた栄養教育の必要性が推察された。
349	廣實 真弓, 堀井 大輔, 曾根 大地, 渡邊 さつき, 岡崎 光俊, 渡辺 裕貴	発達性読み書き障害が明らかになった後頭葉てんかんと心因性非てんかん発作の併発患者	てんかん研究 (0912-0890) 34,31 - 39,06,2016	後頭葉てんかんと心因性非てんかん発作を併発した患者に対し、神経心理検査による評価を行ったところ発達性読み書き障害が判明し、その後のフォローアップに役立てられた。症例報告。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
350	上田 鼓, 中島聡美, 金 吉晴	犯罪被害者支援活動における警察職員の二次的外傷性ストレスと関連要因	トラウマティック・ストレス 14(2),45 - 54,12,2016	犯罪被害者支援活動に従事した経験を有する全国警察職員を対象に、これまでに最も強い心的ストレスを受けた事案による支援活動後のPTSD症状、支援活動の累積によるバーンアウトと全般的な精神健康への影響およびそれらの関連要因について、質問調査を行った。有効回答者は862名であり、PTSD該当者は男性で2.8%、女性で9.0%、K6ハイリスク者は男性1.2%、女性2.6%であった。PTSD症状の強い群は、女性であること、ストレス対処法として、支援活動を振り返る、上司・同僚に支援活動について話す、家族と過ごす時間をもつほか、支援活動を押しつけられる環境にある特徴があった。全般的な精神健康の低下には、殺人および子供が犯罪被害者本人となった事件事故における支援活動の累積がリスク要因となる一方、バーンアウトおよび全般的な精神健康の低下には、支援活動を複数名でおこなうことのできる状況が防御要因となっていた。女性職員への対策強化、職員の理解促進を図ることが求められる。
351	高橋孝治, 中川栄二, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 須貝研司, 北 洋輔, 高橋章夫, 大槻泰介, 佐々木征行	片側巨脳症における半球離断手術後の非罹患側の脳波経過と発達	てんかん研究 34(3),619 - 627,01,2017	片側巨脳症は、出生後早期から早期乳児てんかん性脳症などの難治性てんかんを認め、最重度の精神運動発達遅滞を呈することが多い発達予後不良の疾患である。薬物療法が無効のため生後早期に大脳半球離断術が行われることが多い。術後の経過中に、てんかん発作が消失しても非罹患側に脳波異常の出現を認めることがある。半球離断術によりてんかん発作が消失した症例を対象に、非罹患側の経時的脳波変化と発達月齢、発達指数との関係について後方視的に検討した。片側巨脳症の半球切断術後でてんかん発作の消失した症例では、術後の発達指数は全例で低下傾向だったが、発達月齢は運動・言語発達とも全例で緩徐ながら伸びていた。術後の発達は、発達指数より発達月齢で評価した方が、術後臨床的に発達を認める実態を把握しやすい。また経過中に非罹患側の突発活動が出現することがあり、その増加率が高いと表出性言語発達が遅滞する可能性が示唆された。
352	伊藤絵美, 吉村由未, 森本雅理, 小畑輝海, 松本俊彦	報告 女性かくせい剤乱用者に対する回復プログラムの構築と実践 -ローズカフェ第1報-	日本アルコール・薬物医学会雑誌 52(1),34 - 55,02,2017	
353	近藤あゆみ, 栗坪千明, 白川雄一郎, 松本俊彦	民間依存症回復支援施設DARC利用者を対象とした認知行	51(6),414 - 424,12,2016	栃木ダルク利用者20名と千葉・館山ダルク利用者18名に対して、認知行動療法SMARPPを実施し、その有効性を評価した。栃木ダルクでは、一定期間(平均17.4ヶ月)施設に滞在した利用者に対してSMARPPを実施した。一方、千葉・館山ダルクでは、入所後まもない利用者(平均1.2ヶ月)に対してSMARPPを実施した。その結果、栃木ダルクの対象者のみ、SMARPP参加前後でSOCRATESのサブスケール「実行」に有意な変化が認められた(Wilcoxon順位検定,p=0.041)。また、POMSのサブスケール「緊張-不安」も有意に改善した(Wilcoxon順位検定,p=0.004)。ダルクのような12ステップ・プログラムをベースにした依存症治療施設でSMARPPを実施する際には、施設入所後すぐよりも、ある程度施設での通常のプログラムを終えた後で実施するほうが高い効果が得られる可能性がある。
354	元木崇裕, 中川栄二, 小一原玲子, 高橋幸利, 竹下絵里, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行	免疫グロブリン治療が奏功したてんかん性脳症例	脳と発達 48,277 - 281,07,2016	

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
355	水野由輝郎, 森まどか, 岡本智子, 大矢寧, 西野一三, 村田美穂	免疫治療が効果的であったsporadic late onset nemalin myopathyの2例	臨床神経学 56(9),605 - 611,09,2016	Monoclonal gammopathy of undetermined significance (MGUS)を合併した孤発性成人発症型ネマリンミオパチー (sporadic late onset nemalin myopathy; SLONM)は予後不良で自家末梢血幹細胞移植が有用とされる。我々は免疫治療(ステロイドパルス療法, 血液浄化療法, 免疫グロブリン大量療法)のみで症状を維持しえた2症例を経験し, 免疫療法は移植困難な場合の代替となる可能性があると考え報告した。筋生検ではType 2B線維欠損を認めない点が先天性ネマリンミオパチーと異なっていた。
356	近藤あゆみ, 高橋郁絵, 森田展彰	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラムの理解度と有用性-医療保健機関家族教室と家族会の参加者を対象としたアンケート調査結果から-	日本アルコール関連問題学会雑誌 18(2),25 - 32,03,2017	医療保健機関や家族会を利用する薬物依存症家族延べ871名を対象に、家族心理教育プログラムの理解度と有用性を検討するためのアンケート調査を行った。4種類の基礎教材を用いて家族教室を実施した結果、7割を超える対象者が役立つと感じており、教材ごとの差もなかったことから、対象を狭く限定せず多くの薬物依存症家族にとって有用であることが示唆された。一方、理解度は有用感に比較して低く、よく理解できたと感じた対象者は約5割であった。家族にとって教材の内容はある程度複雑で、一度の学習で十分な理解を得るのは難しいと思われることから、繰り返し参加できる体制づくりの上実施することが望ましい。
357	齊藤彩・坂田侑奈	両親の注意欠如／多動傾向と大学生の精神的健康との関連-世代間伝達と親子関係の観点からの検討-	人間文化創成科学論叢 19,03,2017	本研究は、大学生を対象とした質問紙調査により、両親の注意欠如／多動傾向が子ども(大学生)の注意欠如・多動傾向を媒介して子どもの精神的健康の低さへと関連するパスモデル、ならびに両親の注意欠如／多動傾向が親子関係の問題を媒介して子どもの精神的健康の低さへと関連するパスモデルについて実証的な検討を行った。
358	澁谷郁彦, 元木崇裕, 上田理誉, 西條晴美, 本橋裕子, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行	膀胱癌を発症した重症心身障害児者の2例	日本重症心身障害学会誌 41(3),439 - 444,12,2016	
359	齊藤祐子	認知症をきたす疾患の背景病理	通信医学 2017.9;203-231	認知症の背景病理として、アルツハイマー病やレビー小体型認知症以外にも複数のものがあり、予後がそれぞれ異なる点から臨床的に診断を試みるのが大事であることを示した。
360	瀧澤 透, 反町 吉秀	オーストラリアにおける国立コロナー情報システム—データベースによる公衆の健康と安全の増進—	日本セーフティプロモーション学会誌9(2): 35-43	
361	瀧澤 透, 反町 吉秀	オーストラリア連邦ビクトリア州におけるVictorian Suicide Registerの概要と自殺予防 —コロナー事務所の訪問調査より—	日本セーフティプロモーション学会誌 9(1): 35-49	